

---

# 万事屋銀ちゃん

山南ケー助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

万事屋銀ちゃん

### 【Nコード】

N5934A

### 【作者名】

山南ケー助

### 【あらすじ】

ほとんどギャグで、ちょぴつとシリアスだけど、やっぱりギャグな銀魂二次創作短編集。万事屋トリオが織り成すバカなストーリー！計4本。

かつこいい銀さんが読みたい人は回れ右！真面目な銀さんを読みたい人も回れ右！  
ただの「銀魂好き」に捧げます。

## 目次

それぞれが独立したストーリーですので、好きなところから読んで下さい。

「近藤、101回目のプロポーズ」(全8話)

主な登場人物・万事屋トリオ、近藤勲、志村妙

あらすじ・お妙との仲を取り持つてもらおうと、万事屋を訪ねた近藤。お妙にふさわしい男になるべく生まれ変わろうとする男の物語  
(完結済)

シリアス度：

コメディ度：

ストーリー度：

「ダブルス」(全7話)

主な登場人物・万事屋トリオ、土方十四郎、沖田総悟、山崎退  
あらすじ・ひょんなことからマヨネーズを巡ってミントン対決をすることになった万事屋と真選組。マヨネーズを建前に、沖田と神楽の私情対決が繰り広げられる。  
(完結済)

シリアス度：

コメディ度：

マヨネーズ度：

「磁石の指す方へ」(全10話)

主な登場人物・万事屋トリオ、桂小太郎、糸井菊

オリジナルキャラクター

あらすじ・スキー旅行で雪山に訪れた万事屋トリオ。その先で彼らを待ち受けていたのは馬鹿と貧乏女将と埋蔵金伝説。馬鹿野郎たちが繰り広げる雪山探検物語。（完結済）

シリアス度：

コメディ度：

エリザベス度：

「ボケとツツコミと男と女」（全12話）

主な登場人物・万事屋トリオ、あやめ

あらすじ・漫才大会に出場することになった万事屋トリオと猿飛あやめ。人を笑わせるのって難しい！ 下ネタ注意。（完結済）

シリアス度：

コメディ度：

チームワーク度：

星の数は作者が考える割と曖昧なものです。目安程度に考えて下さい。

## 第一話 来客

「ちょっと銀さん。銀行に預金369円しか無かったですよ！ 僕らこれからどうやって食っていくんですか？」

今日も、相変わらず平和な江戸の街で、相変わらず騒がしい万事屋。

新八の声が響き渡る。

「んだよ、うるせーな。アレ、こないだの五千円あったろーよ？ 猫探しの仕事のヤツ。アレどうした？」

銀時は顔に被せたジャンプをのけて、ソファーからノソリと起き上がった。

「こないだっていつの話してんスカ。半月も前ですよ！ とつくに光熱費とかで引かれてますよ！」

「マジでか。ヤベーなこりゃ。どうやって食ってくかな……139円で」

「アンタ何勝手に230円引いてんのオオ？ 何ジャンプの分引いてんのオオオ！」

「どうせ369円じゃロクなモン食えやしねーよ。だったらジャンプで夢とロマン買ったほうが賢いだろうよ？」

「夢とロマンで腹が満たせるかアアア！」

「二人ともうるさいアル。テレビに集中出来ないネ！」

酢昆布をくわえ、テレビにかじり着いたまま神楽は怒鳴った。

「まったく……キングゴリラ見てる時くらい静かにして欲しいアル」

神楽はそう言いながら、またテレビに向き直った。

キングゴリラというのは神楽が今ハマっている特撮モノの番組である。

なんかこう……でっかいゴリラが出てきて建物を壊したり、なんかタワーとかに登ったり、着ぐるみの中のオッサンが見えたり見えなかったり……まあ、小さな男の子が好みそうな番組なわけだ。

それを、カッケエエ！とか言いながら見ている。酢昆布をかじりながら。

そして二箱目の酢昆布に手を伸ばした時だった。

「ちょっと神楽ちゃん！そんなにパクパク食べないでよ。酢昆布だって今日からは貴重な食料なんだから」

と、新八が神楽を止めた。

「嫌アル。アタシの酢昆布は誰にもやらないネ。どうしても欲しけりゃ酢昆布三年分上納するヨロシ」

「なんでだよ！何そのハイリスク・ローリターン？」

神楽はフンツと鼻を鳴らし、またテレビに戻って行った。

「おっ？」

すると神楽は突然声を上げ、テレビに飛び着いた。

そしてしばらく食い入るように画面に張り付いたかと思うと、今度は銀時の元に駆け寄った。

「銀ちゃん銀ちゃん！ ハ、ハガキ！ ゴリラのハガキ！」

「とりあえず落ち着け」

神楽は何か伝えようと必死だが、どうも上手く伝わらないようだ。つまり要約するところという事である。

テレビを見たら番組の最後で視聴者プレゼントの告知があった。プレゼントは『キングゴリラのなりきり着ぐるみセット』という、まあ商品名だけでどんなのか容易に想像はつくが、加えて説明するなら、ものっそい恐いゴリラのマスクと、モジャモジャのスーツなわけだ。それに応募する為のハガキが欲しい、ということなのだ。

「……ということアル」

「いや、『……』ということアル」じゃねーよ。小説だからって自分で説明する手間省いてんじゃねーぞ」

「いや、銀さん。アンタも『小説』とか言っちゃダメだから。僕らそういうの知らないカンジでページ進めてかなきゃいけないから。あつ、ページって言っちゃった」

「大体よー、神楽。オマエなんであんなモン欲しいわけ？」

「定春に着せるアル」

「いや、あんな恐いの着せちゃダメだから。定春から愛くるしい外

見取つたらもう恐さしか残らないから」

「とにかくハガキちょーだいアル」

「……ったくメンドクセーなー。ちょっと待ってろ、確か年賀ハガキ余つてたはずだから。不幸の手紙でも送ろうかと残しといたヤツ」

「ちょっと、やめて下さいよ銀さん。アンタみたいな不幸なヤツが不幸の手紙って。なんかマジで呪いとかありそうだから」

ピンポーン

銀時が押し入れの中を探している時、玄関の呼び鈴が鳴った。

「ハイ、今行きまーす」

と、新八は玄関に向かった。

「キングゴリラ来たアルか？」

「んなわけないのでしょ。まだハガキ送ってもないのに」

ピンポーン

また呼び鈴が鳴る。

「ハイハイ。すぐ行きまーす」



ガラッ

新八が引き戸を開けた先に立っていたのは、真選組の局長 近藤勲だった。

（あ、キングゴリラだ。）

新八のメガネが5ミリずり落ちた。

## 第二話 依頼

「……万事屋。実は折り入って頼みがあつてな」

近藤は来客用のソファアールに腰掛け、低い声で話を切り出した。いつになく真剣な面持ちである。

この人が絡んで来るといつもロクなことがない。それは万事屋の誰もが分かっている。

しかし今は状況が状況だ。

金がない。

いつもならこんなゴリラは門前払い……いや、門ごと吹っ飛ばしていただろう。

しかしヤツは幕臣である。ゴリラだけれども幕臣なのである。今の万事屋にとって、幕臣のゴリラは最上級のお客様なのだ。

「近藤さん。粗茶ですが、どうぞ」

新八は出来るだけ丁寧にな藤にお茶を差し出した。

「ありがとう、新八君。……それで、話というのはだね……」

そう言うと、近藤は一口茶をすすり、少し間を置いた。

ゴクリ

万事屋三人は固唾を呑む。

「お妙さんとの仲を取り持つてくれないかな？」

「……」

「いや、分かってる！　こんなこと人に頼むなんて俺も本意じゃない。けど、もう俺だけじゃどうにもなんないんだよ！」

「ふ、ふざけんなアア！　なんで僕がそんなことしなきゃなんないんだ！　一生懸命掘らされた穴が自分の墓穴でした、みたいなモンだよ！」

最初にキレたのは新八だった。

「落ち着くアル、シスコン眼鏡。動揺しててツツコミがイマイチネ」

「そうだぞ新八。ここでキレたら生活費もジャンプもパーだぞ」

「パーなのはアンタの頭だよ、この天然パーマああ！　いい加減ジャンプから頭離せや！」

「ちよつ、新八君。落ち着こう！　一旦落ち着こう。コレあげるから、ホラ。お通ちゃんの新作のCD！　コレ聴いて落ち着こうよネクロマンサー！」

「語尾が違えーよ、ゴリラアア！ てか俺を誰だと思ってんだアア！ 寺門通親衛隊長だぞ？ それもう持ってたんだよ！ あ、でもやつぱ一応下さいんきんたむしィィ！」

そんなやり取りが半時ほど続いただろうか、ようやく新八は落착きを取り戻した。

とは言っても今回の依頼に対して反対という立場は変わらないように、ムスツと黙り込んでいる。

新八が落ち着いたところを見計らって銀時は本題を切り出した。

「なんかややこしくなってきたから一回まとめるぞ。まず、依頼人の近藤さん……いや、ゴリさんはお妙と上手くいきたい。で、新八はそれをどうしても阻止したい。そして俺はどっちでもいいから、とにかく金が欲しい。こんな感じか？」

「え、なんで今言い直したの？ そのまま『近藤さん』でいいじゃん」

「大体なんですか、銀さん。その、どっちでもいいから金が欲しいって。アンタさっきから自分の事ばっかじゃないすか」

「まあ、ようはそれぞれが納得の形なりやいいってわけだ」

銀時は二人のツツコミを流して勝手に話を進めた。  
しかしなかなか興味深い話ではある。この状況から双方の利害を一致させようと言っただから。

「銀さん、そんな事出来るんですか？」

「まあ、とりあえず聞け。それはだな……」

新八と近藤は銀時に詰め寄る。

「あ、やっぱり長くなりそうだから『第三話』でまとめるわ。」

「だからアンタ小説を何だと思ってんだアアア！」

### 第三話 主人公

「じゃあゴリさん、結論から言つぞ。万事屋はこの件に関しちや一切手は貸さねえ」

「ちよつ、待て万事屋。ここは金を出せばなんでもやる万事屋だろ？」

「お前、なんか勘違いしてねーか？ 万事屋は『なんでも出来る』店じゃねえ。『なんでもやる』店だ。だがな、俺らがどんだけお前らをくつつけようとしたところで、お妙の気持ちがお前に向かねーようじゃ、どーにもなんねーんだよ」

銀時の声は冷たい。

「お妙さんの気持ち……すまん、万事屋。俺は自分の事しか考えてなかったようだ」

近藤はうつ向きがちにそう言うと、席を立ち、さつき来た方へ歩き出した。

「まあ待ちな。話は最後まで聞くモンだ。言つたろ？ それぞれの納得する形にするって」

「……どういう事だ？」

「俺はオメーらをくつつけるつもりはねえ。……アンタを磨くのだ。勿論、アンタが変わったところでお妙の気持ちに絶対変わるとは言

い切れねえ。

だが、今のままじゃ無理なのは確実だ。

だからアンタが変わる為に俺が協力してやるのさ。そこから先はテメーで何とかしな。そもそも恋愛なんてのはテメーの力でやるもんさ。違うか？ それに新八もこれなら問題ねえだろ？ 結果として二人が上手くいったとしても選ぶのはお前の姉ちゃんだ。お前だって、そこに口を挟むほど野暮なこたあしねえだろ？ それにそんな頃にはこのゴリラもそれなりの男になってるだろうしよ。」

銀時はそう言うとジッと近藤の眼を見つめ、それ以上は口にできなかった。

近藤の反応を待っているからだ。

「……万事屋。……お前」

近藤もまた銀時の眼を真っ直ぐ見る。

「スマン。もっかい言って」

「テメエエエ！ 聞いてなかったのかアア？」

「いや、違う！ 聞いてたよ？ 聞いてたけど長くって途中からよくわかんなくなっちゃたんだよお！」

近藤の脳みそに収まるメモリーの容量は小さい。どれくらい小さいかというと、めっさ小さい。だってゴリラだもん。

そのゴリラの脳みそには、先ほどの銀時の言葉は恐らく3割も入っていないだろう。

ともかく、ゴリラの発言はこれまでのシリアスな流れを物の見事にブツた切ってくれたわけだ。

「『ブツた切ってくれたわけだ』じゃねえよ！ どうしてくれんだよオオ！ 人がせつかくいいこと言ったのにイ。やっとかツコついたのにイイ！」

「柄にもなくカツコつけて長台詞なんか使うからこういうことになるアル。銀ちゃんもつこう、ダメなカンジの路線でいった方がイイネ」

「大体、第三話になってようやくカツコついている時点かどうかと思いますけど。アンタ、ホントに主人公なんすか？」

神楽の毒舌に続く形で新八の追い討ちが入る。

「え、何？ 俺が悪いの？ 俺が悪いカンジになっちゃってんの、コレ。ねえ？」

「これに懲りたらもう、カツコつけようなんて考えんことだな。万事屋」

神楽、新八に便乗するように近藤も続く。

「アレ？ おかしくね？ 何でお前までそっちサイドなの？ どっちかつつとお前はこっちサイドだろ。馬鹿側の住人だろ。てかプリンスだろ？ 何で俺だけこんな惨めな気分。……アレ、なんだろコレ？ しよっぱいや……」

グシグシと泣く銀時を見ながら新八は思った。



色々と言っではしまったが、この人はやっぱりスゴイ人なのかもしれない。なんだかんだで結局、僕も近藤さんも救う道を見つけてしまったのだから。

ただちよつと不器用なだけで……。

そうは思うものの、日頃の銀時への恨みのせいかな、それが言葉になることはなかった。

## 第四話 恋文

「じゃあゴリラ。お前を磨くにしても、まずお前の実力がどんぐらいのモンか分かんねーと話になんねーな。とりあえず何かやってみる」

先ほどの話し合いの結果、全員銀時の案に一応賛成したようで、近藤は依頼の内容を変更した。

「待て万事屋。急にそんな事言われても……、何をしたらいいんだ？」

「んー、……そうだな。誰かいい案あるヤツ、手エ挙げる」

「いや、銀さん。アンタも何か考えて下さいよ」

銀時は解決法は考えたものの、その先はノープランだった。新八のツツコミは当然である。

「あん？ 俺はさつきスゲーいいの言っただじゃん。今回はオメーが何か言えや。まだ何も活躍してねーのお前だけだぞ？」

「僕はちゃんとツツコミ役こなしてますよ。何もしてないなら神楽ちゃんの方でしょ」

「何言うアル。冴えないツツコミしか出来ないクセに。大体オマエのツツコミ、ただうるさいだけでつまんねーんだヨ。悔しかったらノリツツコミとかしてみナ、『……ってなんでやねん！』って。ホ

ラ言ってみろヨ、ダメガネ」

「あん？ ダメってなんだ、オイ。やんのかチャイナ、コラ」

このまま神楽にケンカをふっかけようかと思っただが、新八は思い留まった。

イカン、イカン。ここでコイツらのペースに乗せられちゃダメだ。僕はツツコミなんだ。常識人なんだ。僕が話を進めなきゃダメなんだ。てかケンカなんかふっかけたら僕がやられちゃうか。……いや、そんな弱腰でどうする、新八！ 逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！ 僕は初号機のパイロットです！ ……って違うか。あつ、ヤベツ、ノリツツコミしちゃった。

新八は一人でイタイ自問自答（一人ボケノリツツコミ）を繰り返す中で、ふとアイデアを思いついた。

「ラブレター……なんてどうですかね？ 姉上の事どんな風に思ってるか分かるし、文章にすれば近藤さんのセンスも分かりやすいでしょ」

「まあ、悪くねー案だな。他にいいのがあるわけでもねーし。とりあえずゴリラ、書いてみる」

新八の案は採用された。近藤は、わかった、と一言いうと紙を広げ、書き出した。

近藤の胸の内に秘めた想いを。

不器用だが、確かに真っ直ぐ突き進むその想いを筆に乗せ、書き

殴った。

『前略、志村妙様。

突然のお手紙申し訳ありません。

僕の胸にうづくこの想いをどうしても抑えきれず、手紙を書いた次第であります。

好きです。

付き合ってください。

これが僕の想いの全てです。

今はこれ以外の言葉は出て来ません。

どれだけ美しい形容詞で言葉を飾り立てても、アナタを想う僕の気持ちは表現しきれそうにありませんから。

もしこの言葉をアナタが受け止めてくれたなら、僕はアナタの為に星を動かすこともできましょう。

しかし、この想いがアナタに届かなかったなら……えっと、あの……何かします。

大勢の隊士を引き連れ、何かしに行きます。

どうかこの想い受け止めて下さい。

P・S・

アナタの名字が『近藤』に変わることを、心より願って。

近藤勲』

ビリッ！

「恐エエエよ！　なんだよ、大勢の隊士引き連れてつてよオオオ？」

新八は近藤の書いたラブレターを破り、ありったけの声で怒鳴った。

「ああ、それは隊士全員で貢ぎ物持つてお願いしに行くつて事だ。大名行列みたいなカンジで」

「ならそう書けやアア！　紛らわしいんだよオオ！　こんなのホラー以外の何者でもねーよ！　夢に出ちゃうよ！」

「大丈夫ネ。『ソウシナハノコ』って三回叫べば助かるアル」

「いや、あつたけどさ、そんなの。寺子屋で流行つてたけどさ」

新八の考えたラブレター作戦は、近藤が救いようのない馬鹿であるという事を裏付けるだけの結果を残し、静かに幕を閉じたのだった。

## 第五話 イメチェン

「あー、もういい。お前のレベルは分かったから。んじゃーそろそろ始めるか。名付けて、『ゴリラを人間にしよう大作戦！』だ」

「え？ 俺そんなレベルなの？」

銀時はラブレターの一件で、完全に近藤に見切りをつけたようで、早々と依頼の方に踏み出した。

「まずは……そうだな、その服だ。その堅っ苦しい隊服脱げ」

「服？」

「人間、変わるにやコレ、ぶっちゃけ見た目だ。思い出してみる。いつもクラスの隅にいる、地味な眼鏡のあの娘が、眼鏡外した日にやクラス中大騒ぎだったろ？ その娘が毎パンツでも履こうものならラブストーリーだって始まんだけ？」

「マジでか？」

「だからって毎パンツは履かないで下さいよ？ そんな履いたら変態100%ですよ？」

隊服をズボンの方から脱ごうとする近藤に、新八は低くツツコンだ。

「オメーもな、ダメガネ」

さりげなく眼鏡に伸ばそうとしている新八の手は、神楽の言葉にピタリと止まる。

「ちっ、違えよ！ コレはレンズ拭こうとしたただけだよ！」

そう言い、新八は慌てて眼鏡のレンズを袖で磨く。

「あーあー、わかったわかった。もう何も言っな。まあオマエが眼鏡外したところで、たかが知れてるケドナ」

新八の必死の弁解（裏声気味）は、神楽に鼻の先であしらわれたのだった。

「これでいいか？」

数分後、そこにはすっかり変わった近藤がいた。

暑苦しくカッチリした隊服は、羽織と袴に変わり、顎髭は剃られ顔の輪郭もすっきりしている。

普段の下品な風貌は何処へやら。むしろ上品な感じさえする。

姉上の為にここまで変わるとは……というか、あの顎髭にはポリシーとか無いんだろうか？ と新八は思っのであった。

しかし、近藤に言わせれば、妙の為になら己のポリシーさえも捨てる。それがこの男のポリシーなのであろう。

「なかなか様になってるじゃねーか」

銀時は少し驚いたように言った。

「次は中身だな。外側ばつが良くなっても、中身が伴わねーようじやダメだからな。神楽、ちょっと来い」

「……？」

「ゴリラ、お前に決定的に足りねーモンが何か分かるか？……そりや言葉だ。大事な場面で気の利いたセリフの一つも言えねーようじやな。そこでコイツの出番なワケだ」

銀時は神楽の肩をポンと叩く。

「今から色々な場面を想定して演技をする。で、お前にはそのシチュエーションに合ったセリフを言ってもらふ。神楽はその相手役だ」

「任してヨ！ 月9の女優並の演技見せちゃるネ！」

神楽はノリノリだ。

「何でちよつとゲーム的な要素入ってんの？ 何か桜塚 つくんっぽいし！」

「いや、コイツ馬鹿だからさ。口で言ってもどうせ分かんねーだろ？ だからゲーム感覚で覚えさせようってワケ」

なるほど、銀時の言う事も一理ある。

「で、僕は何をすればいいんですか？」

「ああ、そうだな……。コイツ間違えた時のツッコミ頼むわ」



「結局それかよ！」

そう言いつつも、ンッ、ンッ、と軽く咳払いをして、シッコミに備える新八であった。

## 第六話 ツッコミ

「じゃあ始めるぞ。シーン1、夜景。はいスタート」

銀時はパイプ椅子に深く腰掛け、右手に丸めた台本を叩いてパンツと鳴らした。

室内なのにかけている大きめのグラサンは、どこぞの映画監督でも意識しているのだろう。

「わー、キレイな夜景アルネー」

「そうですね、お妙さん。でもこんな夜景より……」

『アナタの方がキレイ』

どうせ続くのはこんな言葉だろう。……ありきたりだな。新八は思っのであった。

今じゃドラマですら、お目にかかれなほど使い古された口説き文句。今の近藤のレベルじゃ恐らくこの程度の返ししか出来ないだろう。

しかし近藤は新八の予想の遥か上に行く。

「……函館の夜景の方がキレイですよ？」

「そこじゃねーだろ褒めるとこ！」

新八は反射的にツツコンでしまった。

「そうだぞ。そこは長崎の方がいいと思う」

「アンタも違えよ！ それからオマエも『それがあつたか！』みたいな顔すんな！」

ポンツと手を打つ近藤に新八はツツコむ。

「よし、じゃあ次。シーン2、喫茶店でコーヒーを溢してしまった時の対応。スタート」

「いいのか？ 間違つた答えのまま先に進んでいいのか？ 掛け違えたボタンはすれ違える結末しか生まないぞ！」

「誰が上手いこと言えつつつたよ？」

銀時は新八のツツコミを軽く流し、そのまま続けようとした。

あれ、待てよ？ ここで新八の頭に、一つの疑問が生じる。そしてその疑問をぶつけてみた。

「銀さん、さつきからデート中のシチュエーションしかないですよ  
ね？」

「それがどうした？」

「いや、だって近藤さんそこまで漕ぎ着けてないですよね？ デート云々の前に、まともな会話も出来てないのに、そんな先のシチュエーションじゃ意味ないんじゃないんですか？」

「！」

新八を除く三人は固まった。ショックだったのだ。

しかしそれは、今まで無駄な労を費やしてしまっていた事に対してではない。

さっきまでダメガネだ何だのと、ひたすら罵ってきたこの男に新八にそれを言われたのが、なんかめっちゃ悔しかったのだ。

「えー……、それじゃあシーン1。街角で偶然会った時の挨拶」

銀時は何事も無かったかのように話を進めた。新八に言われた通りに事を運ぶのだけは、銀時の無駄に高いプライドが許さなかった。だからこれまでの流れを全て無視して、シーン1から仕切り直したのだ。さりげなく。

新八も銀時の気持ちを察したのか、この時はツツコミを控えた。それに、ここでツツコんだところで、またグダグタな展開になるのは目に見えていたから。

新八の気遣いの甲斐あってか、その後の展開は順調であった。近藤は、幾百もの想定しうる全てのシチュエーションとその時の対応を、半ば無理矢理頭に叩き込んだ。

そしてついに、その時はやって来た。

## 第七話 卑怯

「い、いよいよだな」

「今さら怖じ気付いたか、ゴリラ？」

「いや、やっぱちょっと緊張して……」

「大丈夫ヨ！ 最期にモノを言うのは度胸ネ。男ならドーンとぶつかれ！ ドーンとぶつかってガッシャーン、ネ」

「え、何の音？」

公園の茂みの中で、近藤達は最後のミーティングをしている。今日が妙に告白する日なのである。

「近藤さーん！ 姉上呼んで来ましたあ！」

近藤達のいる茂みに新八は叫んだ。

「ありがとう、新八君。で、お妙さんは？」

「もうすぐ来るはずです」

「そうか……」

近藤はそう一言呟いて立ち上がった。ちょうどその時、妙が公園に姿を現した。

「万事屋……。ありがとな……」

近藤は背中越しに感謝の言葉を残し、そのまま妙の元へ駆け出した。

「何なのかしら、新ちゃんったら。急に公園に来いなんて」

「お妙さアアあん！」

公園にやって来た妙は新八を探してキョロキョロしていた。そこに近藤が大声で駆け寄っていく。

「聞いて下さい！ 僕の想い……。ぶほオオオ？」

「またテメーかアアアア！」

近藤が声をかけるのとほぼ同時に、妙の飛び蹴りが近藤の顔面にメキツと音を立ててめり込む。

近藤の身体は二回転半して5メートルほど吹っ飛んだ後、地面に伏した。

「ウソ！ いきなり？ 鼻血出ちゃったしィ！ シチュエーションとかそういうの無いしィィ！」

近藤は鼻を押さえ、そのまま蹲る。

「姉上！ あんまりじゃないですか？」

妙のあまりの理不尽さに、新八は思わず茂みから飛び出していた。

「まだ近藤さん何も言っていないじゃないですか！ それなのに顔面に飛び蹴りなんて酷すぎますよ！」

「顔面セーフよ」

しれつとした顔で妙は答える。

「ねえよ！ こんな顔面セーフ！ めっちゃ重症じゃん！ アウトじゃん！」

ピクピクいつている近藤を指差しツツコむ。

「それより新ちゃん。どういう事？ こんな事のために呼び出したの？」

妙の目は冷たい。

「大体アナタだって嫌がっていたじゃない。それを今さら何？ アナタはその男の味方なの？」

「そうじゃない！ そうじゃないけど……」

けど……。その後続く言葉が見つからない。確かに新八は元々この事に関して反対の立場だった。こうしている今だってそれは変わらない。

しかし新八は知ってしまったのだ。近藤が妙の為に数え切れないほどの努力をしてきた事を。勿論、だからといってそれがそのまま評価に繋がる訳ではないのだが、新八は何だか釈然としなかった。

だが、それを上手く伝えられる言葉が見つからず、新八は黙っている事しか出来なかった。

「オイオイ、酷いんじゃないの？ こんなゴリラでもウチの客だぜ？」

いつの間に茂みから出て来ていたのだろうか。そう新八の言葉を補ったのは銀時だった。

「銀さん？ ……なるほどね。あのゴリラに仕事依頼されたってワケ？」

妙は銀時を睨みつける。

「まーな。それにしてもあんまりじゃねーの？ 話くらい聞いてやれや。コイツにもそれぐらいの自由あんだろうが」

「私にだって拒む自由があります」

どちらの言い分も、一応筋は通っている。

どちらも間違った事は言っていない。新八が言葉を続けられなかった理由は、まさにそこにあった。

もし、妙の方が一方的に悪いのであれば、新八の言葉でも十分に説得出来たかもしれない。しかし、どちらか一方を悪いと言えない以上、この話をまとめる事は困難であった。

「……じゃあ、お前は一度でもコイツの気持ち、真剣に考えた事あるのか？」

「そ、それはっ……！」



銀時のこの言葉に、妙は初めてたじろいだ。

「別にお前が間違ってるとは言わねーよ。けどよ……お前に見合う男になろうと無理して背伸びして、それでも足りなくて慣れねー高下駄まで履いて、そのせいでつまづいては足りくじきながらもここまで来たんだよ、このゴリラは。それを見ようともしねーで拒むのは、ちよつと卑怯なんじゃね？」

「……」

卑怯　銀時が口にしたその言葉は、どちらが良いとか悪いとか正しいとか間違っているとか、そんなものは全て無視した言葉だった。それだけに、妙に反論の言葉は無かった。

「おい、ゴリラ。後はテメーで頑張んな」

そう言つと銀時は公園を後にした。神楽と新八も慌てて銀時の後を追う。

公園に残されたのは、妙と近藤の二人と、銀時の言葉だけだった。

## 最終話 クリームソーダ

「『卑怯』か……」

掃除機をかけながら新八は考えていた。

近藤の告白から三日が過ぎた。その後、妙と近藤がどんな話をしたのか、二人以外に知る者はいない。

妙の話では、断ったという結果のみしか教えてもらえなかった。新八もそれ以上は聞かなかった。他人の恋話に深入りするのは野暮だと思ったし、何より近藤が酷いフラレ方をしなかったと分かって、少しホッとした気持ちだったからだ。

昨日、近藤から一封の茶封筒が送られて来た。中にはお金が入っていた。今回の依頼の報酬である。しかし、それは万事屋が請求した額より少し多かった。それを見た時、きっと近藤も納得の行く形でフラれたんだろう、と新八は察したのだった。

「それにしても銀さん、あんな言葉よく出てきましたね」

「ん、何が？」

「『卑怯』ってヤツですよ。僕なんか、何も出来なかったのに」

「ああ、アレな。ああ言つとけば、大概相手は何も返せねーモンだ。世の中、善悪だ何だの、白黒ハッキリするもんなんてそうそう無いからな。だが、言い負かすだけならアレで十分なワケよ」

この人はいつも何処を見ているのだろう。時々新八はそう考える。

普段はチャランポランなくせに、いつもここぞという時に、決まってこの男は何かしてくれる。初めから全ての展開が見えているのではないかという気さえする。

新八がふと銀時の方を見ると、銀時は鼻をほじりながらジャンプを読んでいた。少し買いかぶり過ぎかな、と新八は笑った。

「さて、金も入ったことだし、たまには外で食うか？」

銀時はジャンプを閉じるとノソリとソファーから起き上がった。

「いいですね」

「賛成アル！」

「チョコレートパフェ……いや、ストロベリーも捨てがたいな。この際2ついつちまうか？」

ピンポン

玄関の呼び鈴が鳴った。

「あ、誰か来たネ」

「ハイハイ、今行きまーす」

新八が引き戸を開けると一抱えほどの荷物を持った男が立っていた。

「万事屋さんにお届け物です」

「誰からだろ……ん？　コレ、神楽ちゃん宛だよ？」

「マジでか？」

神楽は新八から荷物を受け取ると、急いで包みを破った。

「あつ、近藤さん？　……じゃない、キングゴリラだ」

包みの中身はキングゴリラの着ぐるみだった。

「お？　神楽、懸賞当たったのか？」

「へー、いい事って続くものなんですネ」

神楽は、キャッホオオオ！　とか言いながら着ぐるみを抱えて跳びはねていた。

「……あのう」

配達のおじさんが銀時の肩を叩いた。

「ん、何？　おじさん、まだいたの？　あー、アレか、ハンコか？  
おーい、新ハイ。ハンコ持って来い」

「いや、そうじゃなくてお代の方を……」

「何？　最近の懸賞って着払いなの？　随分不親切な懸賞だな、才  
イ。でもいいよ。今の俺懷暖かいから払っちゃうよ」

そう言いながら請求書に目を落とした。が、次の瞬間その目をひんむいた。

「い、一万二千だとオオオ？」

確かに請求額は12000円と表記されている。何度数えても『0』は3つあった。

え？　どういう事？　と銀時は請求書を睨みつけた。その時、銀時の目が止まった。その先には『代金引換』という文字。どうやらこれは懸賞ではなく、通販だったようだ。

「オーイ、神楽。コレどういう事？」

「アレにも同じのあったから念のため応募したネ」

そう言いながら神楽は、銀時が木刀を買っている通販会社のカタログを指差した。

「あー、なるほどなー。これで当たる確率2倍ってか？」

「そういう事アル」

神楽は着ぐるみを定春に着せながら答える。

「あのー、おじさん。コレ返品で」

「いや、ワンちゃんに着せちゃってるからね。無理」

おじさんはアッサリ拒否。

「……新八。俺のパフェは？」

「クリームソーダくらいで我慢した方がいいんじゃないですか？」

「そっか、クリームソーダかぁ……。アハハ……。ハハ、アハハハ……ハ」

銀時は笑った。笑うしかなかった。

その散文的な笑い声はその日、途切れることはなかった。

『近藤編 完』

## 第一話 ヤマサキ君（前書き）

今回は光風さんと、埼玉さんのリクエストに応え、土方と沖田メイのストーリーです。

それと、今回から読みやすいように第一話のサブタイトルはその作品通してのタイトルを付ける事にしました。

ついでに近藤編の方のタイトルもいじっておきました。

えー、最後に。今回リクされていないキャラも登場してます。その人物の正体は本編で

## 第一話 ヤマサキ君

「え？ 俺、呼ばれてないんすか？」

そう驚きの声を上げたのは、真選組の觀察、山崎退だつた。

「誰も呼んでねーよ。俺が呼んだのは山崎君だ」  
ヤマサキ

銀時は冷たくあしらう。

その場には山崎と同じ真選組の副長、土方十四郎と、これまた同じく真選組の一番隊隊長、沖田総悟。その二人と対峙するように万事屋一行が立ち並んでいた。

山崎はその間にポツリと一人立っている。

「誰ですか、そいつ？ てかいねーよ、そんな紛らわしいヤツ！」

「何だと？ ヤマサキ君に失礼だろ、ジミー！ 全国のヤマサキ君に謝れ！」

「え？ あ、……スイマセン。てか旦那も俺に対しては十分失礼ですけどね。ジミーって……地味から来てんでしょ？」

「あ、でも『滋味』って書くと、『物事の豊かな深い味わい』って意味があるらしいですよ。」

と、広辞苑片手に新八のフォロー。

「え、それフォロー？ ……ところで旦那。コレ一体どういう状況



なんすか？」

先程から睨み合っている二組を見て疑問を感じた山崎は、銀時に尋ねた。

「あー、それはな……コホン」

銀時は軽く咳払いをしてから言葉を続けた。

「……時は数分前に遡る」

と、キートン山田っぽい口調で続けた。

「勝手にナレーション始めちゃったよ、この人！ てか何でキートン？」

山崎のツツコミも虚しく、時は数分前に遡る。

「はあ……この歳でお使いとはなあ。どう思うよ、新八？」

銀時はトボトボと、肩を落としながら商店街をうろついていた。

「仕方ないじゃないですか。家賃の事言われたら、さすがに断われないですよ」

銀時達は『スナックお登勢』のオーナー兼、『万事屋銀ちゃん』の大家である、お登勢に買い出しを頼まれていた。

ここの所ほとんど仕事が無く、家賃の滞納は積もりに積もり、お登勢はキレ気味である。

そのため、さすがの銀時も素直に言う事を聞かない訳にはいかな

かったのだ。

ブツブツ文句を言いながらも買い物はほとんど終わっていた。

「後はコレで最後だな」

銀時は商品に手を伸ばした。と、その時、銀時の手が誰かの手とぶつかった。

「あつ、スンマセ……」

そのもう一方の手の主は、そこで言葉を止めた。彼のくわえたタバコの灰がポトリと落ちる。

土方である。

「え、何？ おたくコレ買うの？」

「買うの？ ってコレは俺が先に目エつけたヤツだ。テメーは他の店当たりな」

銀時と土方の手の先にある、『コレ』と呼ばれているそれは、マヨネーズであった。しかも、よりによってラストの一つ。

「いや、先に目エ付けたって、俺の方が先だったって」

「何言ってやがる。俺のが先だ」

「じゃあいつ目を付けましたかあ？ 何時何分何十秒？ 地球が何回回った時？」

「ガキか、お前等アアア！」

あまりに幼稚な口喧嘩に新八は喉を震わせてツツコむ。

「いや、土方君よお……コレは俺に譲つとけつて。アレだぞ？ コレはお前の為に言つてんだぞ？ そんな毎日マヨネーズばつかチューチューしてたら、キューピーちゃんみたいに髪の毛クルンってなっちゃうぞ？」

「既にクルンクルンのテメーが言えた義理か！」

「まアまア、落ち着いて下せエ、二人共。店中で騒いでちゃ、他の客に迷惑ですぜ？」

やんわりとした口調で二人の間に入ったのは沖田だった。

「何イイ子ちゃんぶってるアル、サディスト」

「テメーはすつこんでろ、チャイナ」

沖田は、つつかかつて来る神楽に軽くガンを飛ばし、改めて銀時の方に向き直る。

「旦那ア、ここは土方さんに譲っちゃアくれませんか？ こちとら非番だつてのに、もう四軒も付き合わされて参ってんでさア」

「いや、俺もさア、コレ買つてかねーとババアに殺されんだよ。老い先短いババアより老い先短くなっちゃうんだよ。アレ？ 俺今上手い事言つたんじゃね？ オーイ、ヤマサキくん！ 座布団持つて来てー！」

で、今に至る。

「いらねーだろオオ、最後のオオオ！ 結局ヤマサキ君謎のままだしイイ！ 座布団運びなんて山田君に任せとけよオオオ！」

「ジミーの怒りも、もつともである」

「キートンの方じゃねエエエー！」

未だキートンの真似を続ける銀時に、額に血管を浮かばせながらツッコむ山崎。

あー、ツッコミ役（山崎さん）いると助かるなあ。今回は僕、疲れなくてよさそうだな。

と、山崎を見ながら新八は思った。

だが、そのせいで山崎より地味なキャラになってしまっている事に、彼は気付いていなかった。

## 第二話 沖田

「いや、だからさ、コレは俺に譲っとけて、な？ いい加減、大人になろうや」

「テメーにだけは言われたくねーんだよ。脳みそネバーランドが」

未だ続く、二人の不毛な言い争い。さすがに面倒くさくなった銀時は、

「あー、分かった分かった。じゃあコレやるからさ」

と、土方に卵を渡した。

「何だこりゃ？」

「それで十分だろ？ お前ならマヨネーズくらい自力で作れるさ」

「あん？ ふざけんな。酢が足んねーよ。あと塩も」

「そこじゃねーだろ！ 今はマヨのレシピなんてどうでもいいんだよ！」

と、山崎のツッコミだったが、二人の耳には届いていない。

「……どうやら口で言ってもわからねえらしいな」

そう言つと土方は鯉口を切った。銀時を斬るつもりである。

「……上等だ、コラ」

銀時もまた、『洞爺湖』と文字の入った木刀をスラリと抜く。

そのまま睨み合う二人。      どちらが先か、二人が一步踏み込んだその刹那、

「そこまでですぜイ」

二人は踏み込んだその位置から動けずにいた。

沖田である。

沖田は間合いの外から一瞬にして二人の間に割っ入っていた。そしていつの間に抜刀したのか、右手に持った刀の刃元で銀時の木刀を受けた。そして空いた左手で土方の刀を抜ききる直前で抑えている。

体重とスピードが獲物に乗る直前だったとはいえ、二人を同時に止めたこの男。さすがは真選組の一番隊隊長といったところだろうか。

「なっ      ！」

神速の攻防を目の前に、新八は言葉を失った。が、当の沖田本人は気楽なもので、間の抜けた声で、

「マヨネーズで刃場沙汰にんじょうなんてなア、俺は御免ですぜイ」

と、ひょうひょうとした態度で言って退けた。

「真選組の副長がマヨネーズ取り合って往来で刀抜いた、なんて噂が巷に広まったら事ですぜ？      ここは一つ、穏便に解決しましょう

「や」

「いや、噂が広まったらって、いつも噂流してんのお前だろ？  
…まあいい。で、どうやってケリ着けるってんだ？」

土方は刀を鞘に収めると、視線を銀時から沖田に移した。

「そりゃア、コイツでさア」

言うなり、沖田は何処からともなくバッグを取り出した。バッグには『米EX<sup>ヨネックス</sup>』の文字が入っている。

「それ俺のラケットバッグじゃないすかアア！」

山崎が叫ぶ。どうやらこれは山崎の愛用しているバドミントン用のラケットバッグらしい。ちなみに『米EX』というのはそのメーカー名である。

「バドミントんで勝った方がマヨネーズを手に入れるって事でどうですかね？」

沖田はそう言いながら、山崎のラケットバッグの中を勝手に出し始めた。

ラケット、シャトル、ネット、ボール、……ボール！？

「入れてない！俺は入れてないぞオオオ？てか、どうやってたらラケットバッグからボールが出て来んだアアア？」

長さにして１メートルは優に超えるであろうボールを、ラケットバッグからスツと抜き出す沖田にツッコむ山崎。

「……ドラえもんか、お前は？」

と、土方も呆れたようにツッコむ。が、沖田は

「いえ、パズーのカバンでさア」

と、最後に目玉焼きを乗せたトーストを取り出し、それを頬張りながら返す。

「わあ、パズーのカバンって何でも出て来るのね。まるで魔法の力バンみたい！……って言うてる場合ですか！俺のバッグ返して下さいよオオ！」

「分かった分かった」

と、沖田はバッグから出した物を戻しながら答える。

「アレ？入んねーや。おかしいな、さっきは入ったのに」

ラケットバッグより大きなボールをグイグイと押し入れながら沖田は呟く。

「いい！ボールはそのままでもいいからアア！！」

「いや、もう少しで入りそう……あっ」

ピリッという何かの裂ける音に、沖田の手が止まる。  
山崎は嫌な予感がした。



「あの……沖田隊長？ 『あつ』てなんすか？ 『ビリッ』ってなんすか？」

「……山崎イ。世の中なア……形あるモノ、いずれは壊れるんでイ」  
「『壊れた』んじゃねーよ！ 『壊した』んだよ！ どうしてくれるんだテメエエエ？」

怒りに我を忘れ、沖田の胸ぐらに飛びかかる山崎。

『あん？』と刀を抜く沖田。

『ゴメンナサイ』と謝る山崎。

反撃終了。

ラケットバッグを抱いて一人沈む山崎をよそに、沖田は言葉を続けた。

「どうです、旦那？ ミントンで決着つけませんかイ？」

「俺は別にいいぜ？ ミントンだろうがミン・ジョンホだろうがマヨラー侍に敗ける気はねーよ」

「銀さん、『ミン』しか合ってますん。てかアンタが思ってるほど韓流ブームは浸透してませんよ」

と、久しぶりの新八のツッコミ。

「あん？ 俺だってミン・ジョンホだろうがチャングムだろうが天パごときに敗れるかよ」

と、負けじと返す土方。

「いや、アンタに至っては『ミントン』にかすってすらいらないからね。てかアンタも影響されてたんすね、韓流ブーム」

「じゃあ双方納得という事で。ここじゃ狭いんで、公園の方に行きましょうかい？」

とりあえず話はまとまったようで、沖田は皆を先導し公園に向かって歩き出した。そして振り向き様に、

「チャイナ、今日こそ決着着けてやらア」

と、ニヤリと笑った。

そこで新八は初めて気付く。この男の狙いは最初から神楽一人である事に。上手く二人をまとめるフリをしながら、神楽と決着を着ける場を作り上げていたのだ。

新八はふと、神楽の方を振り向く。

「笑っていられるのも今のうちヨ。今に吠え面かかしやるネ。…で、新八。ミントンって何？」

ラケットを右諸手上段に構える神楽を見て、『ダメだな、こりや』と、思う新八であった。

まあ、新八にとってマヨネーズなんて正直どうでもよかったのも事実である。

### 第三話 溜め息

万事屋と真選組の6人は公園に着いた。

辺りには小さな子供等が5人くらい、それぞれ思い思いに遊んでいる。

公園の真ん中辺りは遊具も無く、割と広かったので、そこにコートを作る事にした。

とりあえず、銀時と沖田はポールを立てることにした。

バドミントンのポールは普通、体育館にそれ専用の穴があいていて、そこに立てるように作られているのだが、当然公園にそのような穴は無い。そこで沖田はポールの先端を斜めに切り落として、ちようど竹槍の切っ先のような形にした。そうしてポールを地面に突き刺せるようにした事で、公園でも立てられるようにしたのである。

その先端を尖らせたポールの片方を支えながら沖田は、もう一本のポールを運んでいる銀時に指示を出す。

「すいやせん旦那ア、もうちとポール右に動かしてくれませんかイ？」

「こんくらい？」

と、少しポールの位置をずらしながら銀時が返す。

「旦那ア、左じゃなくて右ですぜ。ドゥーユーアンダースタン？」

「だから右だろ？ お箸持つ方だろ？ ちゃんと動かしたぞ。ドゥ

「ユーアンダースタン？」

「アレ？ 旦那左利きでしたっけ？ お腕持つ方に動いてますぜ。  
ドゥーユーアンダースタン？」

「いや、俺は右利きだけど？ お箸持つ方が右でお腕持つ方が左で  
ポールが左で？ アレ、よく分かんなくなってきたぞ？ ドゥーユ  
ーアンダースタン？」

「あ、すいやせん。俺から見て右だから、旦那から見たら左なワケ  
で、お腕持つ方がポール持つ方で……アレ？ 俺もよく分かんなく  
なっちまいやした。ドゥーユーアンダースタン？」

「ダリーよ！ メンドクセーよオ、もうオマエらよオオオ！ いつ  
までそれで引つ張るつもりだ？ こんなモン、ここにこう立てれば  
いいだけじゃんよオオ！ ドゥーユーアンダースタアアン？」

新八は銀時からポールを奪うと、思い切り地面に突き立てた。

それにしても……。新八は大きく溜め息をついた。

なんで僕の周りにいるヤツはこんなんばっかなんだろうか。ただ  
ポール立てるだけだったのに、どうしてこつもボケに持って行きた  
がるんだろう、コイツ等は。

大体もう一人のツツコミ役は……。

ふと山崎に目をやると、ラケットバッグと先ほど沖田に切り落と  
されたポールの切れはしを抱いて蹲っていた。

ああ……、あのポールも山崎さんの私物だったんだ。アレ、泣い  
てる？ そりゃあ泣くよな、普通。あ、今ちよつとこつち見たぞ？

あ、また見た。アレ、おかしいぞ？ さっきから何だかチラチラこつちを……。

てか、すごい見てくるんですけどオオ！ 何、僕にどうしろつての？ 殺れつてか？ あのサディスト王子を僕に殺れつて言うのか？ いや、無理だから。例え僕がカメハメ波使えても勝てないから！

だからそんな目で僕を見な……ちよつ、ホント止めてエエ！ その目エエエ！

新八は耐え切れず、慌てて身体ごと顔を背けた。

この分だと、山崎さんにツツコミは期待出来そうにない……。この場は自分で何とかするか。さて、後の二人は……。

新八が振り返った先に見たものは、木の枝を引きずって走り回る神楽と、地面にブリュブリュとマヨネーズを搾り出す土方の姿だった。

「何してんのオオオ？ オマエらアアア！」

「コートのライン引いてるアルヨ」

「ああ、ライン引いてたのね。……てか、ラインより神楽ちゃんが走り回った跡の方が目立ってんだけど。ラインって言うより、もはや溝なんだけど」

新八は言つて、深くえぐれた地面を見た。これがラインという事は、あの地面に搾り出されたマヨネーズもラインのつもりなのだろう。

「……つたく、真面目やりやがれ」

土方はそう言って、不機嫌そうにタバコをくわえながら睨みを利かせた。

「チンタラやってる暇なんかねーんだよ。こんな事してる間にマヨネーズ売り切れてたらどうすんだ？ 何のためにこんな事やってんのかもう一度考えろ！」

「そのマヨをラインに消費してんの誰ですかアア？ 何のためにこんな事やってんのかもう一度考えろオオオ！」

ピシヤリとツツコミを入れると、新八は深く溜め息をついた。

なんで準備段階でこんなに疲れなきやなんないんだ？ ……もう帰りたい、中止にならないかな？ 雨でも降れば……。

ふと見上げた空は、何処までも青かった。

新八はもう一度、空に溜め息を吐きつけた。

雲になれと、願いを込めて。

## 第四話 審判

「……さてと、コートも出来ましたし、そろそろ始めましょうかい？」

色々あったが、どうにかコートは完成した。

「じゃあオレ審判やりますね」

そう名乗りを上げたのは山崎だった。誰も何も言っていないのに自分から名乗り出たところを見ると、できるだけこのゴタゴタから逃避したかったらしい。

山崎が抜けた為、万事屋チームからも一人外すことになった。これは新八にとっては、まさに渡りに船だった。

「じゃあ僕が……」

と、新八が言い出すよりわずかに早く、

「新八……。お前抜けろ」

銀時の言葉が遮った。

新八の心境は複雑だった。自分が抜けることには全面的に同意なのだが、それを他人に言われたのが妙に腹立たしかった。

「たかし、アンタまた漫画ばかり読んで！ 宿題終わったの？」

「うるさいなー、今やろうと思ったところ！」

「何言ってるの！ アンタがあちゃんが言わなきゃずっと漫画読んでるじゃない！」

「だから今やろうと思ったって言ってんじゃん！ せっかくやる気になったのに、先にかあちゃんに言われたらやる気無くなるだろ！」

という思春期特有の、母親に理不尽な怒りを覚えるあの心境である。新八の心境もまさにそれであった。それ故、心とは全くの裏腹に新八の口から言葉が飛び出す。

「なんで僕が外されるんですか！」

「……そう怒るな。お前にはお前にしか出来ない役をやってもらう」

「え……？」

銀時の声は低く、深く落ち着いていた。そして新八の目を真っ直ぐ見つめる。

どうしてだろう……。この男がこの眼をした時はいつも、どういう訳か素直に言葉を受け入れることが出来る。

いや、いつもの死んだ魚のような目ではあるのだが、僕の目を見つめながら何か別のモノを見ているような……。気付いた時にはすでに、新八の怒りは何処かへと消え去っていた。

「新八、お前は副審をやれ。……主審をやッ等に取りられたのは痛い。おそらく誤審的な事をするに違いない」

「誤審的な事って……まさか……。考え過ぎじゃないですか？」



「バカヤロー！ I W G Pの悲劇を忘れたのか？ ヤツは第2のボブだ。いいか！ ヤツ等に好き勝手やらせんじゃねーぞ！」

「……W B Cね。池袋関係ないから」

「そう！ それ！ W B Cの悲劇を忘れるな！」

「いや、『パールハーバーを忘れるな』みたいに言われても。もう、みんな忘れてるし……」

銀時の微妙に古臭いボケに、とりあえずそこまでツツコミを入れて新八は考えた。

確かに向こうのチームだけに審判をさせるのはフェアではない。山崎が不正を行うというのは銀時の考え過ぎではあるだろうが、一人何もせずに見物するのはどこか後ろめたい気がした。

「わかりましたよ。副審やります」

新八はそう言って銀時に背を向け、山崎の方へ歩き出した。歩きながらさっきの銀時の眼を思い出していた。

銀時が時折見せるあの眼は一体なんなのだろう。あの男がその眼をした時、一瞬だけどカッコよく思える。いや、ホントに一瞬なんだけど。さっきだって結局マトモなことなんて一つも言わなかった。大体どうやってたらワールド・ベースボール・クラシックと池袋西口公園間違えんだよ？ 共通点『W』だけだし！

そこまで考えて、またあの眼を思い出す。どうも調子くるうな……。

新八は頭をポリポリと掻いた。

それから新八は山崎の元に歩み寄り、自分が副審をすることになった旨を伝えた。

「お願いしますね、新八君。……お互い大変な上司ですね」

そう返した山崎の言葉に、新八は安堵した。別に山崎を疑っていたわけではないが、不正を働くような人じゃないと再度確信を持てたから。また初めて自分を理解してくれる人が現れたような気がしたから。

この人は自分と似ている。

そう思うと、妙に嬉しくなって新八は、はにかんだように笑った。

#### 第四話 審判（後書き）

長い間、更新出来なかったことをお詫び申し上げます。

これだけ遅れておいて言うのもなんですが、これからも読んでいただくと幸いです。

## 第五話 判定

「じゃあ始めますね。10本先に決めたチームが勝者です。サーブはジャンケンで勝った副長から、旦那、沖田隊長、チャイナさんの順番で一本交替で。みなさん初めてなんで、ややこしいルールは抜きつてことにしましょう」

初めに山崎の簡単なルール説明が入り、ついに試合が始まった。

土方は頭上高くシャトルを投げ上げた。

上体を大きく反らせ、そのまま流れるような動作で腰と膝が沈む。そうしてタメた状態から一気にラケットを振り抜き、サーブが放たれた。

「マシガン・サアアブウ！」

小学生が考案したような技名を臆面もなく叫ぶ土方。

そもそも一発しか打てないのに、どの辺がマシガンなのだろうか。

しかし、その恥ずかしい名前のサーブは確かにすごかった。

何かが破裂したかと思うほどの豪快な打球音が響いたときには、シャトルは既に銀時の左耳をかすめていた。

「な　ッ！」

銀時が後ろを振り向くと、シャトルはコロコロと転がっていた。

銀時が反応出来なかったのも無理はない。男子のトップ選手ともなると、スマッシュ時のシャトルの初速は時速300kmを超える

と言う。

もつとも、それが打者の手元に来た時点では時速60kmほどまで減速しているとのことだが、それでも打ち返すには相当な技術を要する。

時速がどのと言うよりは、瞬間の速さの世界なのだ。土方のサーブもそれに近いものだった。素人とはいえ、彼の並外れた運動センスとパワーがそれを可能にしていたのだった。

土方がニヤリと不敵な笑みを見せる。

試合展開は真選組チームの圧倒的有利に思われた。が。

「アバブ・ザ・ウエスト」

山崎が土方にフォルトを言い渡した。

『アバブ・ザ・ウエスト』とはバドミントンにおける反則の一つである。バドミントンのサーブは打者の腰より低い位置で打たなければならない。それ故、テニスやバレーボールのように、攻撃的なサーブを打つことは出来ないのだ。

「知るか！ オイ山崎イ、ややこしいルールは抜きじゃなかったのか？」

素人の土方は当然そんなルールは知るはずもなく、山崎にクレームを付ける。

「これくらい基本じゃないですか。知りませんでした、副長？」

「そーそー、基本だろ。そんなことも知らないの、土方君？ 誰だっけ知ってるぜ、アバズレ・オブ・ウエスタン」

「オメーも知らねーだろ！」

「銀ちゃん、しかもコイツさっき決まっと思ったてニヤついてたアルヨ、自殺点なのに。プププ、ダセーの。何、あの不敵な笑み？」

わざと視線だけ土方に向けたまま、神楽は銀時に耳打ちをする。土方に聞こえる程度の声で。

沖田もそれに続く。

「マジですかイ、土方さん？ あれだけ恥ずかしい失点しといてカッコつけられるなんて、俺には到底真似できませんぜ。マシンガン……何でしたっけ？」

今となつては恥ずかしい、土方の不敵な笑み。

わざわざそれを掘り起こしてはからかう沖田と神楽の言葉に、土方はついに恥ずかしさで居た堪れなくなつてフォルトを素直に受け入れた。

「さーて、次は俺の番だな」

そう言つてサーブの体制に入つた銀時だが、すぐに構えを解いた。

「アレ、お前等んトコの大將じゃね？」

スツと土方の後方を指す。

「近藤さん？」

くるりと土方と沖田が振り返つたのを見て、ニヤリと笑う。二人が振り返つた先に近藤の姿はなかった。

ハメられた！

土方が慌てて振り向いた時には既に、銀時はサーブを打ち終えた後だった。

「きたねエエエ！」

不意打ちという最低な作戦に出た銀時に、副審という立場を忘れて新八は思わず声を上げた。

忘れていた。この男は、普通の人なら誰もが嫌悪感を抱いて使わないような姑息な手段を、平気でやってのける男だということを。

「間に合えッ！」

土方の身体は思うより早く、それこそ反射的に駆け出していた。

シャトルの落ちる先へ腕を伸ばすが、わずかに足りない。だが、尚も土方は喰らい付く　が、体制を崩し転倒してしまった。

土方はそのまま、シャトルに触れることなくネットに突っ込んだ。土方は倒れた状態からすぐさま起き上がり、シャトルを探した。するとどういう訳か、シャトルは万事屋チームのコートに転がっていた。

「……アレ？」

打ち返した覚えの無いシャトルが敵のコートにあることに、土方は首を傾げた。

実は、銀時のサーブはわずかに距離が足りず、ネットに弾かれていたのだった。

まあ、要は自滅である。

恥ずかしいイイ！ あんだけ卑怯な手使って不発？ マシンガン・サーブの恥ずかしさも帳消しだよ！

「……ウン、アレだよ。次、沖田クンのサーブだよ。」

無かったことにしようとしてるよ、この人！ どこまで卑怯なんだよアンタ。卑怯を卑怯で上塗りしたよ。アバブ・ザ・卑怯だよ！

しかし主審 山崎の判定は以外だった。

「副長のタッチネットにより、万事屋チームに1点！」

『タッチネット』というのもまた、バドミントンにおける反則の一つである。ラリー中にネットに、ラケットや身体の一部が触れると、シャトルのインやアウトに関係無く失点になるのだ。

先ほどラリーの場合、銀時のサーブが地面に付く前に、土方がネットに突っ込んでいた為この判定がされた訳だ。

「……と、いうことです」

「いや、『……と、いうことです』じゃねーよ。ややこしいルールは抜きなんだろう？」

二度も反則をとられた土方はさすがに怒りを隠せず、額に血管を浮かべながら山崎に詰め寄る。

「基本ですから」



「どの辺が？ お前の『基本』、分かりづらいんだけど！」

土方が山崎をシメ上げる一方で、銀時は安堵の表情を浮かべる。しかしそれは、自分のサーブが失点にならなかったことへというよりは、そのサーブでの失態がタッチネットの一件でうやむやになったことへの安堵だった。

「何だか知らねーけどポイント入ったみたいだぞ。俺アてつきりフォルトかと思っただが……」

「人の道的にはフォルトだケドナ」

だが、味方 神楽の反応はシビアだった。

「ひねくれるのは髪の毛だけにしとけヨ、天パが」

神楽は一瞥して、辛辣な言葉と共に唾を吐き捨てる。

結果が得点か失点かは関係なかった。純粋な少女の瞳に銀時の姿は、汚い大人としか映らなかったらしい。

ボロクソに言われる銀時を少し哀れみながらも、まあ、自業自得だな、と思い直し、新八は何も言わずに試合の行く末を見守った。

## 第六話 理由

これで2対0。

スコア上では万事屋チームが一步リードといったところだが、優勢と言える程の点差ではない。

野球やサッカーなどの2点ならばかなり有利ともいえるが、これはバドミントンだ。

ラリーが終われば必ずどちらかに点が入る訳だから、こんなスコアはすぐにでもひっくり返る。

それ故、この手の競技では、攻めることよりむしろ、如何にミスをしないかにウェイトが置かれる。が、闘争心剥き出しのコイツ等の頭には攻めるといふ考えしかない。もつと言うなら、出来る限りの屈辱を与えた上でポイントを取ろうという考えしかない。

当然、そんなヤツ等がテクニクだの戦略だのを考えて動けるはずがなかった。

ただ一人 沖田を除いては。

土方のそれとは対照的な、ゆつくりとしたモーションから放たれた沖田のサーブは、ネットを越えて小さく弧を描いた。シャトルはそのままネット近くに落下する。

「甘えよ」

銀時は易々とシャトルを掬い上げる が、そこには既に沖田の姿があった。

サーブ一本で決めようとしていた銀時や土方に対して、二手、三手と先を読む攻撃スタイル。天才肌というヤツだろう。

バドミントンの最も適切な戦い方を、本能でやっているのだからと、まあ感心出来たのもそこまで。

そこはそれ、やはりあの沖田な訳だから、それだけで終わる訳がなかった。

「バルス！」

言つて、高く打ち上げられた打球を思い切り叩き付ける。

銀時の目に。

「ぐああああ！ 目が、目がアアア！」

「大丈夫アルか、銀ちゃん！ 心配ないネ、お婆ちゃんに教えてもらつたおまじないで治してあげるヨ」

左目を押さえてのた打ち回る銀時の元に、神楽が急いで駆け寄つた。そつと額に手をかざし、やんわりとした口調で呪文を唱える。

「……イタイノイタイノ、飛ンデイケー。      バルス！」

言つて、指を左目に突き立てる。

「ギヤアアアア！ 痛いの痛いのカムバアアアック！ てか何で最終的に滅びのまじない？」

痛みの余り、身体を大きく退け反らせてイナバウアー。

そんな状態ながらも必死にツッコむが、それはもうほとんど悲鳴に近いものだつた。

「お前バカか？ バカだろ？ つーかバカだよ！ 仮に飛行石持つてたとしても、お前はシータにはなれねーよ！」

「ここはお墓ヨ。アナタとオマエの」

「やっぱりお前には無理だよ。シートっぱいこと言ってるけど無茶苦茶なもの。『アナタ』も『オマエ』も俺だもの」

それを聞き流すように、神楽はシャトルを拾いにネット側に歩き出していた。

ネット下に落ちていたシャトルに手を伸ばそうと屈み込む神楽に、スツと黒い影が覆い被さる。

それに気付き見上げると、沖田がネット越しに見下ろしながらニヤニヤと笑っていた。

「しけた面してんなア。あん、チャイナ？　せつかくサシの勝負付けられる機会作ってやったんだから、もう少し嬉しそうな面出来ねーのか？」

「お前……銀ちゃんの目、ワザと狙ったアルか？」

自分がトドメを刺したことなど無かったことのようにセリフを吐く。

そんな理不尽な発言はさておき、神楽は確かに怒っていた。沖田を見上げる二つの大きな瞳は限界まで開かれている。そのまま相手に噛みつきそうな程に。

「旦那にア悪いが、こうでもしねーとテメエとの勝負が出来そうになかったんでねィ。……何怒ってるんでィ？　テメエも望んでたとだろ？」

悪びれた様子など少しも無く、肩の上でトントンとラケットを踊らせながら沖田が返す。

「まあ、どの道あの目じゃ旦那は無理だ。土方さんには俺から言つて退かせる。……純粹に一对一の勝負と行こうぜい」

「……待てや、コラ。誰がもう無理だつて？」

熱くなる二人を制するように銀時の言葉が割って入った。フラフラと立ち上がり、左目を押さえながらゆっくりと二人に歩み寄り、言葉が続ける。

「……ったく、とんでもねーパズーとシータだな、オイ。お婆ちゃんからおまじない教わる時一緒に、決して人前では使うな、とも言われなかったか？ ……試合は続行だ」

「待ってヨ、銀ちゃん！ 私コイツ許せないアル。私一人にやらせてヨ！」

「テメー等のちっせえ意地の張り合いなんざ知らねーよ。試合にくだらねーモン持ち込んでんじゃねエ」

だが、神楽は退かなかった。そこで退いてしまつたら自分で自分を否定してしまうような気がしたから。

それは、神楽にとってのアイデンティティーの芽生えだったのかもしれない。

しかし、しつこく食い下がる神楽に銀時は苛立ちを隠せなかった。

「しつこいんだよ！ いい加減に」

ついに我慢の限界が来たその時だった。

「銀時イイイ！　こんな所で何油売ってんだイイイ！」

お登勢だった。

その瞬間銀時の怒りは冷めきった。というか血の気が引いた。お登勢は額に血管を浮かばせ、一気にタバコを根元まで吸い上げる。そして煙を溜め息混じりに吐き出し、そのまま言葉を続けた。

「あんまり遅いんで様子見に来たらコレだ。その歳になってお使用も口クに出来んのかイ、お前は？　もうキャサリンが全部買ってきてくれたよ」

「……え、マヨネーズも？」

「当たり前だろ。んなモンに何時間もかけてんじゃないよ」

はあ、ともう一度煙の溜め息を吐き、呆れ顔で答える。

「どうやら、試合続ける理由も無くなったようだな。いいんじゃないかねか？　もう、アイツ等の好きにさせて」

タバコに火を付けながら、土方は興ざめといった感じで銀時に言葉をかけた。既に手にラケットを持っていないところを見ても、土方にもう戦意は無かった。

頭をボリボリ掻きながら、銀時は神楽に向き直る。

「……ったく、わーったよ。オイ神楽、負けんじゃねーぞ」

「　銀ちゃん！　うん、任せてヨ！」

そう返した神楽の顔は、もういつもの笑顔に戻っていた。  
青く透き通った大きな瞳は、銀時の言葉に力を取り戻したように  
強く輝いていた。

それこそ、飛行石のように。

## 第六話 理由（後書き）

皆様、あけましておめでとございます。

今年も、皆様にとって良いお年で有りますように。

えー、『ダブルス』ですが、次が最終話になります。ホントは年内に終わらせるつもりだったんですが……（笑）

どうぞ、最後までお付き合い下さいませ。

今年もよろしくお願い致します。



## 最終話 太陽

「うるアアア！ 死ねエエエ、チャイナアアア！」

「デメエが死ねエエエ、ボケエエエ！」

「デメエがもつと死ね！」

「デメエがもつともつと」

スポーツマンシップなんて言葉からはおよそかけ離れた暴言が、白いシャトルと共にネット上を行き交う。

その往来の中でどこかの羽が折れたのだろうか。シャトルは夕焼けに染まる山吹色の空に、いびつな軌跡を描いていた。

「……なんだかんだ言っつて、楽しそうじゃねえか。あの二人……」

ベンチに腰掛け、新しいタバコに火を付けながら土方が呟く。

「……オイ、何でだよ」

同じベンチの上で、土方とは人二人分の間隔をとって座っていた銀時が、左まぶたにマヨネーズを当てがいながらぼやく。

「アイツとまともに張り合えるガキなんていなかったからな……それが嬉しいんだろう」

「そつちじゃねーよ」

目の上に当てたマヨネーズを指差しながら、不服そうに言葉を返した。

「冷やした方がいいだろ」

「だからなんでマヨなんだよ？ 普通ジュースとかだろ。それに何かブヨブヨしてて気持ち悪いんだよ」

「そのフィット感がいいんじゃないか」

タバコの灰を落とし、またくわえ直して言葉を続けた。

「どうだ、大分冷えたろう？」

「うるせーよ。五分くらい前からもう人肌程に温もってんだよ。冷やしてんのか冷やされてんのか分かんねーんだよ。つーか何でお前、マヨこんなに持ってんだよ？ 買いに来てたんじゃねーのか？」

「常にストックがねーと落ち着かねーんだよ」

「アホか。トイレットペーパーみてーな買い方してんじゃないよ」

言って、マヨネーズを土方に投げ返し、その腫れぼったい目をバドミントンを続ける二人に移した。

どれほどのラリーが続いたのだろう。二人は肩で息をしながら、尚も打ち合っている。

白いシャトルは相変わらず溶け込むことなく、赤に近いオレンジ色に変わっていく空に、幾重にも軌跡を描いていた。

お天道様はもう眠いのか、東の空から藍色のカーテンを引っ張っ

ている。

そうして短くなっていく夕焼け空に反比例するように、二人の影はぐんぐんと伸びていた。

「……で、オマエんとこのガキが何だつて？」

目は二人に向けたまま、先ほどの土方の言葉を思い出したかのように銀時は口を開いた。

土方もまた、目線をコートに残したまま答える。

「ああ……アイツにとって好敵手と呼べるヤツなんざ、今までいなかったんだよ。俺や近藤さんはともかく、真選組の中にもアイツが本気でやり合える相手はいねえ。ましてや同じ年頃のガキになんざ

」

そこまで言うと、またタバコを吸い上げた。チリツ、と音がして火種がさらに赤く光る。

煙を吐き出し、それが空に溶けて無くなるまで眺めた後、また言葉が続けた。

「アイツ等ぐれーのガキがデカくなるにア、ああいう互いを高め合えるような存在が必要なんだろうよ」

「デカくなる……ねエ」

土方の言葉を噛み締めるようにそう呟いた銀時は、自分に必死に喰らい付いた神楽の姿を思い出した。

子どもが大人に反抗するというのは、同時に子どもの中で『自分』

が出来てきていることの表れでもある。

そういう見方では、神楽は本当の意味での反抗期を迎えたのかもしれない。

銀時は少し笑みを見せた。それは、今まさに大人になろうともかく二人を羨ましく思ったのからなのか、それとも。

「……違えねエ。そういうヤツが生涯に一人くらいは欲しいモンだ」

そう言った銀時の言葉に、土方も少し笑みを溢したように見えた。

「不思議なモンだな。ガキってなア、俺ら大人の知らねえ所で勝手にデカくなっていきやがる。ガキは大人の背中見て育つて言うが、ありや嘘だ。アイツ等の目に俺達なんざ映っちゃいねエ。……だとしたら大人の役割ってなア、何なんだろうな」

土方はそう言ってタバコを揉み消した。

コートではまだ二人の熾烈な争いが繰り広げられている。

東の空はもうほとんど夜に近く、太陽は更に傾き二人の影はますます伸びていた。

「俺達大人の役目は、太陽と同じなんだろうよ」

今日一日の仕事を終えて沈んでいく太陽を見ながら、銀時は言った。

「アイツ等が自分の色を出そうと必死にもがくなら、俺達はそれをただ照らしてやればいい。俺達が沈む頃には、それこそお前が言うように勝手にデカくなってるだろうよ。まあアイツ等にア、それすら必要ねえのかも知れねーがな」

「フン、違えねエ……」

言って土方は新しいタバコに火を付け、それを美味そうに吸って見せた。

シャトルを打ち合う音は途切れることなく続いた。  
二人の影が闇に溶けて重なるまで、ずっと。

『ダブルス 完』

## 最終話 太陽（後書き）

大変お待たせ致しました。『ダブルス』ようやく完結しました。いかがでしたでしょうか。お楽しみいただけたら幸いです。

実はこの作品、途中でプロットを書き直しているんです。

初期の段階では終始ギャグで突っ走って、最後にお登勢が出てきてガツンと一発、みたいな感じにするつもりでした。今思えばしょうもないですね（笑）

都合で更新が全く出来ない時期があったんですが、その時に自分の作品を読み返して、このまま行っているのかな？ と途中でプロットを作り変えたんです。

というのも、この作品に何かテーマを持たせたかったんです。ギャグだけで終わったら何かうすっぺらい物が出来てしまいそうで……。何かしらこのテーマが届いてくれればと思います。

そういう理由で更に更新が遅れてしまった訳ですが、読者の皆様には大変ご迷惑おかけしました。

待たせてしまった時間に見合うほどの出来なのかは自信ありませんが、自分の中では前作より成長した作品のつもりです。

最後までお付き合い ありがとうございました。

次回は寿々さんリクの桂編になります。これからプロットの作成になりますので更新は大分先の予定です。

これからよろしく願います。

## 第一話 埋蔵金伝説

### 埋蔵金。

それはかつての武将などが、井戸や洞窟、地中などに隠した莫大な資金のことで、それは日本各地に伝説として伝わっている。

建設工事などで地面を掘り起こしたりすると時折、古いお金などがまとまって発見されることもあり、それが一層伝説に信憑性をもたらしめているのだ。

いつの時代も伝説というものは人を惹き付けるものらしい。

それに魅せられた人間は、熱心な歴史研究者から一獲千金を夢見る者など様々である。

しかし、彼らが功を奏した例はない。発見されるのは決まってただの偶然。そういう人を惹き付ける魅力を持っていながら、決して人を寄せ付けはしないのだ。

不思議としか言いようがないが、そういうところもまた、この伝説が伝説たる所以なのかもしれない。

これらの伝説には必ず、その在りかを示す手がかりなるものが存在する。その形は言い伝えだったり、秘伝の巻物だったり、果ては童謡の歌詞だったりと多種多様ではあるが、どれも不可解で解釈しづらいものであるという点では共通している。

元々一部の者にのみ伝える為に作られたものなのだから当然といえば当然なのだが、そういった暗号めいた要素が、余計に人々の好奇心をくすぶっているのだろう。

いずれにせよ、それを解読できた者にのみ伝説に触れる権利が与えられるのである。

そして、そんな不可解な言葉が残るところがここにもあった。

それは古びた小さな温泉宿。山の中にひっそりとたたずむそれは、伝説などとはおよそかけ離れた風貌である。

いや 得てして伝説というのは、むしろこういう場所を好むのかもしれない。



## 第二話 雪山

見渡す限りの白銀の世界。山も木も街も雪に埋もれ、辺りは白一色に染められる。

空は雲一つなく、青く澄んだそれをバックに、白い山はシルエツトがくつきりとして余計に映えて見える。

陽の光はさんと照りつけ、ゲレンデに反射するそれがいやに眩しく、新八は目を細めた。

「いい天気ですね。絶好のスキー日和ってやつですね」

「なんでこの寒イ時期にこんな寒イとこに来なきゃなんねーんだ？」

「まあ、いいじゃないですか。ここの宿、温泉もあるらしいですよ？」

横でブツクサ文句を言う銀時をなだめるように言って、新八は少し困ったように笑った。

今回、万事屋の三人は一泊二日のスキー旅行に来ている。

というのも神楽が商店街の福引で旅行券を引き当てたのだった。

それで、金払ってまで行くのはメンドイが、まあタダなのなら、とやって来たのである。

ちなみにこのスキー場、さほど大きくはないのだが、初・中級コース、上級コース、子ども用ソリコースと分かれおり、一応それなりの形にはなっているようだ。そのスキー場の側に、これまた小さくはあるがスケート場が申し訳程度に設けられている。

それにしても宇宙旅行の時といい、神楽のくじ運の良さはなかなか侮れないようだ。

「アレ、銀さん。神楽ちゃんは？ さっきから見えないけど……」

「アレじゃねーか？」

そう言つてゲレンデの上の方を指差した。

言われるままに新八はその先を見上げた。

一目で見ても判る。他のスキー客とは明らかに違う、ただ一人の直滑降の影。間違いなく神楽だった。

その影は恋人達が描くシユプールを一直線に切り裂き、こちらに向かつてやって来る。

「うわっ！ 危っ！」

スピードを緩めることなく突っ込んでくる神楽に新八は思わず身を庇う。

確実にぶつかる！ そう思われたが、新八のわずか1メートル手間で神楽は思い切りエッジを立て、すんでのところで止まってみせた。

「いやー、良い天気アルねー。青天の霹靂ってヤツネ」

ゴーグルを外しながら、神楽は何事もなかったかのように気持ち良さげに空を仰ぐ。

「いや、それ意味違うから」

ブレーキの際に飛び散った雪で真っ白になりながら新八はツッコんだ。

先ほどの恐怖で顔面蒼白になった上に雪が被さり、彼の顔はさな

がら雪だるまのよう。

「どうしたアルか、新八？ 雪なんか被って」

「神楽ちゃんのせいでしょうが。……それよりどこ行ってたのさ？」

「上級コースアル。シヨボいスキー場の割には楽しめたヨ」

言われて新八は、神楽が降りて来た方をもう一度見上げた。  
角度は40度ほどあるだろうか。そこそこ急な斜面である。

「ホラ、二人も行くアル」

「いや、俺は……」

銀時は神楽の誘いに若干拒絶の意を示したが、ストックを掴まれ  
強引に引っ張られ行ってしまった。

神楽は銀時を引きずりながら、ずんずんとリフト乗り場に向かっ  
て歩いて行く。歩きながら顔だけ新八の方に振り向き声をかけた。

「早くしナ。置いてくぞ、スノーマン」

「いやだから、スノーマンにしたのアンタだから」

新八は身体中にかかった雪を払い落とし、急ぎ足で二人の後を追  
いかけた。

## 第二話 雪山（後書き）

お待たせしました。三作目のスタートです！  
今回は寿々さんからのリクの桂編になります。まだ桂は登場してませんが（笑）  
では皆様、これからもよろしくお願いします。

### 第三話 大丈夫

「うわぁ、結構高いな……」

恐る恐る下を覗き込みながら新八が呟く。彼の遙か下の方では何人かのスキー客が楽し気に滑っていた。

神楽は退屈そうにそれを眺めながら、新八の横でスキー板をブラブラさせている。それに合わせて三人の乗るリフトが前後に揺れた。

「ちよつ、神楽！ 揺らすな！」

手すりにつかまりながら銀時が声を上げた。

小さなスキー場には似合わない三人掛けのリフトはゆっくりと登って行く。古いせいか、ワイヤーを支える柱の下を通るとき、ガタガタと揺れた。その衝撃で、たまにワイヤーから黒い油が落ちて来る。

彼らの乗るリフトが山の中腹まで来たときだった。

またリフトがガクンと揺れた。が、それはそれまでの揺れとは明らかに異質なものだ。リフトが止まったのである。

「あ、転んだみたいですよ。ホラ」

言って、新八は遙か後ろのリフト乗り場を指差した。見ると、リフトの手前で誰かがうつ伏せに倒れている。どうやら、リフトに乗るのに失敗し、係員が慌てて止めたようだった。

「ありや恥ずかしいねエ。必ず一人はいるんだよ、ああいうの」

からかうように言って、銀時はケラケラと笑っている。

倒れていた人は係員の手を借りて起き上がると、静止しているリフトに恥ずかしそうに腰を掛けた。

一人客なのだろうか。三人掛けのリフトに、一人気まずそうに座っている。その居住まいは何とも憐れで、周りの人の嘲笑う声がここまで聞こえてきそうな程だった。

彼が座ったことを確認すると、またリフトはゆっくりと動き出した。

そういえば　と、銀時は横目で神楽を見た。

陽の光に弱い彼女には、この天気は些か酷なのではないかと思ったのだ。

ただでさえ眩しい青空に加え、下はその全てを跳ね返す真っ白な雪の地面なのだから、普段より苦しくないはずはない。

しかし、当の本人はまるでそんな様子は見せなかった。

「オイ、神楽。平気なのか？」

銀時の心配を察したのか、神楽はコクリと頷いた。

「厚着してるから光通さないし、ゴーグルもあるから平気ネ。それにこうすれば　」

言って、神楽は目深に被ったフードから垂れる紐をグツと引っ張る。フードの口がキュツと絞まり、手の平分だけ顔を除かせた。

「ホラ、これで完全防備ネ」

「やめとけ。サウスポークのケニーみたいになってんぞ」

そう言った銀時だったが、神楽と新八はキョトンとしている。ど

うやらマニアック過ぎて伝わらなかったらしい。  
銀時もフードを被り、口を縛りながら身振り手振りで説明を始めた。

「いや、だからケニーってのはな。オレンジ色のパーカー着てるヤツで、いつもフードをこう……アレ？」

しかしそこに二人の姿は無かった。

ハッと辺りを見回すと、銀時の乗るリフトはもう頂上に着き、ターンを始めている。

降り損ねたのである。

「何やってんですか。置いて行きますよ、ケニー」

リフトの降り口で新八が呼んでいる。

「誰がケニーだ！ ちょっ、ヤベツ、すいませーん、係員さアアあん！ リフト止め……！」

そこまで言いかけて銀時は言葉を飲み込んだ。

リフトを止めた先ほどの男の姿が脳裏を過つたのだ。

このままリフトを止めてしまえば、あの男のように周りの人たちから笑われるに違いない。それだけは何としても避けなければ、と思ったのである。

そんな想いなど知るはずもなく、銀時に気付いた係員が慌てて駆け寄ってきた。

「お客さーん、今止めるから落ち着いて下さーい」

ヤバイ、と思い銀時は慌てて返す。

「いや、あの大丈夫です！ 僕、落ち着いてますから、止めなくて大丈夫です！」

「いや、大丈夫じゃないから！ 落ち着いて考えてその状況を大丈夫と判断してるなら余計大丈夫なわけないから！」

「ホント、大丈夫ですから！ あの……リフト止めてもらうの恥ずかしいんで、このままもう一周してまた戻って来ますから！ 回転寿司のように！」

「そつちのがよっぽど恥ずかしいから！ すれ違う人全員と気まぐれ会釈でもする気？ 一周しても取ってもらえない寿司ネタでいいの？ シメサバでいいの？ 今取ってやるって言ってんじゃん！ トロにしてやるって言ってんじゃんよオオオ！」

半ばキレ気味に言って、係員さんは有無を言わずリフトを止めた。

その後銀時は、数人の係員の手を借りてリフトから引きずり下ろされた。

事の顛末を見ていた周りのスキー客は、嘲笑うどころか冷たい視線を送る。恥ずかしいというよりは、痛い空気が漂っていた。

「降りしてもらえてよかったナ、ビントロ」

「何でビントロ？ 何で絵皿じゃない方？」

神楽は一言吐き捨てると、銀時のツッコミごと置き去りにして滑って行ってしまった。



さて、そうこうして上級コースにやって来た訳だが　なるほど、上級というだけあって中々急な斜面である。

見上げると見下ろすとは感じ方も違うというもの。

思いの外に急なそれに銀時の足がすくむ。

出来ることなら中級コースに行きたい、などと思っても、そんなことを口に出せるはずがなかった。

神楽はおるか、新八までもがスイスイと滑っている。そんな中で中級に行きたいなんて発言は、彼の面子にかかわるのだ。

それにしても新八がスキーが得意なのは意外だった。チョイチョイと小気味よくパラレルターンを繰り返している。

銀時が降りてこないことに気付いたのか、彼は途中で止まるところを見上げた。

「銀さん。何してるんですかー？」

その突然の呼びかけに返す言葉が見つからず、銀時はスキーを履き直す素振りを見せて誤魔化した。

その仕草に何かを察したのか、新八はさらに言葉を続ける。

「……もしかして滑れないんですか？」

「ち、違エよ！　つか、お前何でそんな上手いの？　パラレルターンよりボーゲンとかの方が似合うキャラだろうが、お前は！」

謂われの無い暴言ではあるが、ここまであからさまな僻みだと返って腹も立たないらしく、新八は穏やかに返した。

「板を八の字に開けばゆっくり滑れますよ」

腹立たしい半面、情けなくはあるが、銀時はそのアドバイスに身

を任せるしかなかった。

足は、スキー板をハの字というより『への字』になるほどまでに開く内股。腰の引けた前屈姿勢は洋式便器に座る様を彷彿とさせる。その何とも不格好なスタイルでそろそろと坂を下る姿は、どう見ても上級コースには似合わないものだった。

明らかに銀時だけが浮いている。

しかも、そんな付け焼き刃のスタイルがいつまでも続くはずもなく、大きくバランスを欠いてしまった。

そのとき転べば、まだマシだったのかもしれない。銀時は持ち前の運動神経で体勢を立て直したのだ。

しかし運の悪いことに、その際に両足のスキー板が揃ってしまっただのである。

直滑降と変わりのないそれは加速度を付けて下って行く。

次の瞬間、銀時の身体が宙を舞った。

その弾みで外れたらしい片方のスキー板は、一足先に坂を下り終えて、それより少し遅れて銀時は地面に落ちた。

仰向けに倒れた銀時の目に映るのは、やけに低い青空と、彼をからかうように笑う太陽だけだった。

#### 第四話 風吹けば

「まったく……酷エ目にあつたぜ。やっぱ冬は温泉だな。そこで、旅館でこーやってゴロゴロしてんのが一番だよ」

言つて、八畳間の真ん中に、銀時はごろんと寝転んだ。

あの後三人は、小一時間ほどスキー場で遊び惚けた後、麓の温泉宿に入った。といつても、スキーを楽しんでいたのは神楽と新八だけで、銀時はロッジで一人、汁粉をすすっていたのだが。

仰向けに部屋を眺めて、銀時は溜め息を吐いた。

随分と昔に建てられたのだらう。恐らくは攘夷戦争よりはずっと昔に。

日焼けして、ところどころほつれた藺草がささくれ立つた畳。黄ばんだ白い壁や、破れたままの障子。すっかり擦り減つて堅い木目だけが浮かび上がった黒い柱。それらがこの旅館が長い年月を経たことを物語っていた。

「失礼します」

その突然の声に、銀時は目線を天井から襖に移した。

カラリと開いた襖の奥から姿を現したのは着物姿の女だった。

「ようこそお越し下さいました。私、当旅館の女将、菊と申します」

そう言つて女は深々と頭を下げた。菊と名乗るこの女、見たところ歳の頃は三十路に入つたばかりと言つたところだろうか。笑みを見せると口元に皺ができる。その笑顔をこちらに向けて言葉を続けた。

「外は寒かったでしょう、ゆつくりと温泉で暖まって下さい。この温泉はかの家康公もお浸かりになれたと言われる名湯でして…  
…もっとも自慢できるのはその温泉くらいなんですがね」

そこまで言うくと菊は自嘲気味に笑った。

「実は昨年に主人を亡くしまして、それから私一人でこの旅館を経営しているんです。その上……」

ちらりと窓の外に目を遣る。その先には真新しい大きな旅館がそびえ立っていた。

「こちらは見ての通りのボロ旅館でしょう？ 向かいにあんなのが建ってしまったては……。鼻屑のお客様のお蔭でなんとか持つてはいますが、そういうつまでもは……。あ、すみません。このようなこと、お客様にするようなお話ではありませんでしたね」

菊は目を伏せた。

近いうちにこの旅館は潰れる。誰の目にもわかった。旅館の経営など女将一人でできるようなものではないし、客を引き寄せるにもリニユールなり何なりが必要だろうが、障子紙すら満足に張り替えられない現状ではそれどころでもないだろう。

これには新八はたまらない。氣遣いの彼にとって、この手の話はどうしても無視することができないのだ。

「あの……」

新八が言葉をかけた。

「何か僕らにできることがあれば……」

そう続けようと思ったが、横で銀時が目配せをする。止める、と

言うのだ。

銀時の言うとおり、これはどうにもならない。ここまで廃れた旅館を立て直すには、どうあっても金が必要。

江戸っ子は宵越しの金は持たぬというが、それを地でやっている万事屋にそれだけを都合できる金などあるわけがなかった。初めから無理であるなら、下手な同情はかえって相手を惨めにする。そのことを銀時はよく知っていた。

「あ、あの、ここの温泉って家康公が浸かったほどですから、さぞかしの名湯なんでしょう？」

銀時の意中を察したのか、新八は言いかけたものとは別の言葉を繋げた。

咄嗟の判断にしては、新八の言葉は良かった。多少卑屈になつている菊でも、自ら名湯と称するその話題となれば少しは気も晴れると言うものだ。

案の定、菊は機嫌を良くしたのか口元の皺を一層大きくして、嬉しそくに語り始めた。

「ええ、ここは内風呂の他にサウナや露天風呂などもございました……」

菊は本当に嬉しそくに語る。まるで、一言発することに生氣を取り戻していくようで、どこことなく若返ったかのような気さえした。それを見て新八も安堵の表情を浮かべる。

が、次の瞬間、新八は白目を剥くことになる。

「特に露天風呂からの眺めは格別でして、隣の宿の女湯が一望できます。壁も凝った造りになってまして、向こうからばれることはけしてありません。ああ、そうそう、ご希望でしたらフロン

トで一万円から双眼鏡の貸し出しを……」

「捕まるウウウ！」

「ええ、お蔭で男性客のリピーターがゲットできました。思わぬ利益ですね。風が吹けば桶屋が儲かる的な」

もちろん新八の言った『捕まる』とは逮捕のことで、リピーターのことはではない。が、この女、ただの勘違いというわけでもなさそうである。

双眼鏡の貸し出しまでしておきながら、何食わぬ顔で『思わぬ利益』と言う。正気の沙汰ではない。

よほど肝が座っているのか、それとも旅館存続のプレッシャーで心がどこか壊れてしまったのか。いずれにせよ、これ以上この話題に立ち入るのは賢明ではないと判断した新八は、話をそらした。

「えっと、温泉の効能とかってないんですか？」

「ええ、ございますよ。何でも、ここのお湯に浸かると乳が大きくなるとか……」

「マジでか！ これでアタシも完全体だぜキャッホオオオ！ 18号を吸収したときのセルの心境ネ！」

「それからここのお湯で髪を洗うと、さらさらストレートになるとか……」

「マジでか！ 蛭原へアーキャッホオオオ！」

「あと、こここの源泉で眼球をすぐと視力が回復するとか。因みに

源泉の温度は摂氏90度です」

「なんで僕だけ荒行？」

といった他愛もないやり取りが十分ほど続き、その後三人は温泉へ向かった。

「ふう、いいお湯ですね」

曇った眼鏡をお湯に浸しながら新八はため息をもらす。

「湯気でよく見えねえな……」

銀時かというと、向かいの旅館に向けた目を細めていた。

「なにやってんですかアンタ。……ところで銀さん。やっぱりどうにもならないんですかね、菊さんのこと」

新八はまだ気にしていた。

無理であると分かっているにしても、なんだか歯がゆい思いで、新八はそのままブクブクと沈んだ。

「あー、やっぱりダメだね。湯気が邪魔だな。風でも吹けば……」

「聞けよ」

相変わらず覗きに夢中の銀時を横目に、新八は菊の顔を思い出した。

(やっぱりまだできることがあるはずだ)

そう思い立つと、新八はおもむろに立ち上がった。  
が、その出端を挫くように聞き覚えた声がかかる。

「銀時。こんなところで何をしている？」

見上げた新八の目に映る黒い長髪。

二人のよく見知った男は肩に手ぬぐいを掛け、こちらに向かって歩いてくる。

「ヅラ……！」

桂小太郎だった。

桂は自分の股間にぶら下がるそれを、隠すでもなく見せるでもなく、ただゆらゆらと尚も歩いてくる。

「ヅラじゃない桂だ！……フン、相変わらず無粋な男だな。温泉で腰に手ぬぐいを巻くなど邪道だぞ。外すがいい」

「そついうテメエこそ温泉でくらい外したらどうだ。ソレ」

「ヅラではない言っているだろう！何だ貴様、そんなに腰布を外すのが恥ずかしいのか！貴様の股の下の刀はそんなものなのか？」

「ああ？ テメエの鈍なまくらと一緒にすんじゃないよ。テメエはそれでせいぜいコンニャクでも斬つてろ」

「ははん。さては貴様、鞘がが抜けないのであろう？ それはそうだが、どんな名刀であれ鞘が被ったままでは使い物にならないからな」



この辺が新八の限界だった。

「オマエら武士の魂を何だと思ってんだアア！」

ツツコミの勢いで湯船が波立つ。

「で、お前らはこんなところで何をしている？」

桂は話を戻した。

その問いに、まさか覗きをしていたと答えるわけにもいかないの  
で、新八はこれまでのいきさつを話す。

「お前らも菊殿の話を聞いていたか……」

「桂さんも？」

「うむ、あの御仁には世話になったからな。なんとか恩を返したい。  
手を貸してくれぬか？」

桂は真剣な顔であった。

ただでさえ頑固なこの男がこんな顔を見せた時は、もつてこでも  
動かない。大金が要ると分かっているにも、それすらもなんとかして  
みせる。そういった決心が桂にはあった。

「当てはあるのか？」

視線を女湯に向けたまま、銀時が言う。

それを聞いた桂はニヤリと笑った。とんでもない秘策を持ってい  
たのだ。

「実はな……」

突如、大きな風が音を立てて吹いた。

そのせいで新八はその先を聞き取ることができなかった。しかし銀時には聞こえていたらしく、彼もまたニヤリと笑った。

「……新八。桶屋のバーゲンセールだぜ」

銀時は振り向きざまにそう言ってみせた。

意味はよく分からなかったが、新八にはそれがどこことなくカッコよく見えた。

鼻血が垂れていたことを除けば。

#### 第四話 風吹けば（後書き）

お待たせしました。

すみません、長いこと止まってまして……

やっぱ就活なんて卒業した後までやるもんじゃないですね（笑）  
恐らくのんびり更新ですが、これからもお願いします。

## 第五話 眞実

「あー、のぼせたアル」

どれだけ浸かっていたのだろうか。

銀時達が風呂から上がると、頭から手足の先まで真っ赤に火照らせた浴衣姿の神楽が、全身からほくほくと湯気を立ち昇らせてソファに横たわっていた。

「さすが名湯アル。胸が一回り大きくなった気がするネ」

「ああ、胸どころか全身一回りデカくなったんじゃないか？ ふやけて」

銀時は呆れ顔である。

神楽は菊の言葉を真に受けて、今までずっと湯船の中にいたらしい。

「どうだ？ リーダーも一杯」

桂は自販機から牛乳を2本購入し、1本を神楽に差し出した。

「いただくアル」

受け取ると神楽は立ち上がり、慣れた手つきでピンを刺すとラベルごと蓋を抜いた。

ポンと軽快な音が鳴る。それから片手を腰にあて、ぐいと飲み干した。

「さすがリーダー。作法を心得ている」

桂もそれにつづく。

銀時と新八もそれぞれ、フルーツ牛乳とコーヒー牛乳を同じように飲んだ。

風呂上りはなんといってもやはり牛乳に限る。

ほくほくに茹で上がった身体とそれを外から冷ます心地よい風。そして内側を通り抜けるキンキンに冷えた牛乳。さながら温度の三重奏である。

「ところでヅラ。なんでこんなところにいるアル？」

神楽はビンを戻すと、白いひげをぐいと袖で拭きながら聞いた。その言葉に新八も思い出した。

「そういえば、さつき菊さんに恩があるとか言っていましたよね？  
何があったんです？」

「実はこれも攘夷活動の内なのだが、とある任務でな……」

桂はこれまでのいきさつを話した。

桂は、まずこの辺りの地形を探るべくスキー場に向かったという。しかし山頂まで行くにはリフトに乗る必要があり、スキーをレンタルしなければならなかった。ところが不慣れたスキーと分かりづらいいリフトのタイミングで、ドリフのコントのようなこけ方をして一般客の失笑を買ってしまったらしい。

中には、「リフトとドリフをかけた駄洒落のつもり？ どうせならドリフトまでかけろよ」

などと言う輩まで出てくる始末で、たいそうな辱めを受けた。ようやく係員の手を借りて乗ったはいいが、周りの嘲笑うかのよ

うな視線と、さらには降りる時にもまた転ぶのではないかという不安の板ばさみに耐え切れなくなり、山頂に着く前にリフトから飛び降りるという、とんでもない暴挙に出たのだった。

今度は無事に着地できたが、そう思ったのも束の間。

上から何故かスキー板だけが飛んできて、それに頭をぶたれ担架で運ばれるハメになったのだという。

その後、桂を介抱してくれたのがこの旅館の女将、菊だったのだ。

「……というわけだ。全くひどいスキー客がいたものだ」

どこかで聞いたような話に、銀時は口元を引きつらせた。

あの時リフトを止めたのは桂で、そのスキー板は明らかに銀時が放った物だった。

なんだよ、すでに第三話で登場してたんじゃないコイツ、と内心ツッコミながらも、

「……そりゃ大変だったな」と真実を闇に葬った。

と、ここまでの経緯は大体分かったが、気になるのはやはり桂の言う任務というヤツである。

「で、任務ってなにヨ」

神楽は疑問をそのままぶつけた。

桂はニヤリと笑って答える。

「軍資金の調達だ。実はな……」

「……なるほど、それが埋蔵金ってわけか」

桂が言うより早く、銀時が口を挟んだ。

「埋蔵金？」

新八はあまりの突飛な発言に目を丸くする。しかしこれで合点がいった。

風呂場で桂が言った秘策とはこのことだったのだ。

「ところでヅラ、そいつは確かな情報なんだろうな？」

「うむ。100年以上昔から、この村には徳川の財宝が眠るという言葉伝えがあつてな」

「ちょっと待って下さい！ おかしいじゃないですか」

突然口を挟んだのは新八だった。

「何がだ？」

「だって幕府の資財は天人の襲撃の時に隠されたものでしょう？ それは何でそんな昔からこの村に言葉が存在するんです？」

徳川埋蔵金の話は新八でも知っているほど、つい最近の話なのだ。そのことについて、ここで軽く触れておこう。

事の起こりは20年前の天人襲来まで遡る。

天人の砲撃により江戸城は半ば無理やりの開城させられた。江戸城開城の目的の一つは新たな日本改築のための資金を巻き上げることであった。つまりは現在の江戸の象徴、ターミナルの建築費用の強奪である。

しかし開けてみたはいいが、蔵の中はもぬけの殻。それを見た天人は一つの説を立てた。

幕府は資財を全てどこかに隠したのだ、と。

それが徳川埋蔵金伝説の始まりである。

つまり、桂の言う埋蔵金が徳川のものであるならば、天人襲来の20年前より遙か昔の100年以上も昔から言伝えがあるはずはないのだ。

しかし桂は、そんなことは初めから分かっている、というように答えた。

「ふむ、確かにその通りだ。……徳川の財宝が『一つだけ』ならば……な」

「え？」

「家康公は先を見通す力を持っていたと聞く。だからこそこれだけの永き泰平の世を築くことができたのだ。その家康公が天人襲来のような万が一の事態になんの備えもしていなかったと思うか？ ……徳川埋蔵金は二つある！」

「そんな……まさか」

口では「まさか」とは言いながらも、それを完全に否定できないほど、桂の説には妙に信憑性があった。

「家康公はよくこの温泉に来ていたのだろうか？ それは何よりの証拠だ」

「……あ」

新八の中で、それは確信に変わった。



「やりましょう桂さん！ 絶対に埋蔵金を見つけ出して、菊さんを助けてあげましょう！」

「おお、手を貸してくれるか！ では早速コイツの解説に取り掛かるう。ん、コイツか？ コイツはこの村に伝わる言伝えをまとめた物だ。まずはコイツを見てくれ」

桂は懐から一枚の紙切れを取り出して三人に見せた。  
そこにはこう記されていた。

『私達の始まりは大きな杉の木の下でした。

貴方は私を縛ったり叩いたり、本当に楽しかった。

こんなにも引かれ会うのは私達が対照的だから。

似たもの同士ならきつと喧嘩になった。

貴方に会えるのは年に一度だけだけど、放置プレイされていると思えばそれもまたよし。

ああ、早く貴方に会いたい。こんなに身体が火照っているのは柚子湯に浸かっているせいかしら？

私は始まりの場所から馬に乗って貴方の元に向かいます。

今年こそ宝を授かりましょう。

対照的な二人が交われれば、きつと……』

全てを読み終えると、新八の中の確信は音を立てて崩れた。  
束の間の沈黙が生まれる。

「どうだ。この『今年こそ宝を授かりましょう』というところが怪しいと思わぬか？」

「さあ、夜も更けたしそろそろ寝ましようか」

新八は桂に視線を合わせない。

「アレ、ちよつと?」

「ねえ銀ちゃん、my 雑巾って何?」

「おいおい、駄目じゃないか神楽。それオチに使っヤツなんだから」

「え……アレ? ちよつとオオオ!」

誰もが埋蔵金伝説と桂に見切りをつけた。

正直、こんなアホをいつまでも相手にしていたくなかった。  
桂を残し、三人は部屋へと戻って行く。

それが本物の暗号だとも知らずに。

## 第五話 真実（後書き）

今回の更新は早めです。

いつもこれくらい書けたらいいのになあ（笑）

あ、ちなみに作中の暗号は大したものじゃないので、真面目な推理物ってわけではないです。

なんとなく答えが読めても、そつと心の中にしまって嚴重に鍵を掛けたあと、セコムのセンサーをお取り付け下さい。

## 第六話 心は一つ

始まりは翌日、食堂での朝食時のことであつた。  
無言で朝食を食ふ銀時と神楽。桂も同席している。  
少し遅れて新八が入つて来た。

「おせーぞ、新八」

銀時は納豆を練りながら新八の方に振り向く。見ると新八は肩から湯気を立ち昇らせている。

「ちよつと朝風呂に行つてました。やっぱ温泉には三度は入らないと」

「なにジジ臭いこと……ん？ なんの匂いだ？」

微かに新八から、温泉の硫黄臭とも石鹼の香りとも違う匂いが漂つて来る。

「ええ、内風呂になんかミカンの皮みたいのが浮いてて。何だつたんだろアレ？ なんか酸っぱい香りの」

「酢昆布？」

「違ーよ。せめて柑橘類で間違え」

神楽の茶碗に大盛りのご飯をよそいながら菊が口を挟んだ。

「柚子ですよ」

「柚子？　でも昨日はなかったですよ？」

菊はにこりと笑って答える。

「今日は冬至ですから。ご存じありませんか？　日本では昔からこの日に柚子湯に入る習わしがあるんです。ですから、この旅館では昔からこの日だけは温泉に柚子を浮かべるようにしているんです」

「……柚子湯」

昨日、桂が見せた文面が新八の脳裏に浮かぶ。あの暗号（？）に「柚子湯」の文字が入っていたのを思い出したのだ。

何か関係しているのでは、と思ったがすぐに頭を振った。ただの偶然に決まっている、と。

新八はそれ以上は考えなかった。

朝食を終えた四人はお土産品コーナーを物色していた。と言っても、これとってめばしいものがあるわけでもなく、暇つぶし程度にウロウロしているだけであるが。

それにしてもロクなものがない。どうもこの村にはこれといった名産品があるわけではないらしく、置いているものと言えばご当地の名の入った提灯や饅頭くらいのものだった。

「新八、コレ何アルか？」

見ると、神楽はこの辺りの地図の形をしたキーホルダーを握っている。

「何ってキーホルダーじゃん」

「じゃなくてこのクルクルしてるヤツ」

「クルクル？」

新八はもう一度神楽の手の中を覗き込む。

なるほど、神楽の言うクルクルしてるヤツというのは、どうやら方位磁石のことらしい。別に珍しくもない、方位磁石とキーホルダーが一体化した、観光地などよく見かけるものだった。

「方位磁石だよ。神楽ちゃん知らない？」

ふるふると首を横に振る神楽に新八は説明を続けた。

「コレは方角を示す為の物なんだよ。この中で回ってる針が方角を示すんだ。因みに南を指すのがSで、北を指すのが」

「M？」

「そういう組み合わせじゃねーよ。ていうか、なんでそういう知識はあるクセにこういう知識はねーんだよ」

新八は低くツツコんだ。

そうツツコんだ新八の脳裏にまたあの暗号が浮かぶ。

柚子湯。SとN。SとM……。

そこまで考えたとき、新八の中で何かが繋がった。

「桂さん！ 銀さん！」

興奮した新八の声は思ったより大きく、他の客までもが一斉に新八の方に振り向いた。慌てて声を低くして続ける。

「と、とにかく部屋に」

三人は不審がりながらも言われるまま部屋へと戻った。

「で、どうしたつつーんだ？」

銀時の問いに新八はすぐには答えない。

外に人がいないのを確認し、襖も障子も全て閉め切ってから三人に向き直った。

「わ、分かったんです。あの暗号の意味が」

新八の言葉に一瞬場が静まった。

端から信じていなく、しらけた様子の銀時。あの怪文を信じ切っている桂は息を呑む。神楽はといえはすでに忘れていたらしく、キョトンとしている。皆反応はバラバラだが、確かにその一瞬、辺りは静まりかえった。

「あの文の、『始まりの場所から馬に乗って貴方の元に向かいます』。この部分が埋蔵金の在り処を指しているんです」

新八はさらに言葉を続ける。

「『始まりの場所』とはつまりは出発点。文頭に出てくる『大きな杉』のことです。ここから『貴方の元』に進むわけですが……」

「そうか、南か！」

いち早く新八の意図に気づいたのは桂だった。新八は黙ってうなずく。

「どういうことだ？」

いぶかしげに銀時が尋ねる。

「あの文の『貴方』と『私』は、それぞれSとMだということは文面から分かりますよね？ しかしこの『貴方』のSにはもう一つ、方角を示すS。つまり『南』という意味もあつたんです」

真顔で披露する新八の恥ずかしい推理に、銀時は未だ納得がいかない。

「百歩譲ってそのSにもう一つ意味があつたとして、それが『南』を指すものだって保証はねーだろうが。Sが頭文字の地名を指しているかもしれねーだろ。スキー場とかスケート場とか」

もつともな指摘だった、それには桂が答えた。

「いや、恐らく南という意味で間違いないだろう。この『こんなに』も引かれ会うのは私達が対照的だから。似たもの同士ならきつと喧嘩になっていた』という部分。磁石の性質そのものだとは思わぬか？」

桂の見解に、なるほどといった様子で銀時は顎を撫でた。

「そしてさらにポイントは『柚子湯』です。これは冬至を表してい



るんです。そうすれば『貴方に会えるのは年に一度だけ』というのにもうなずけます。埋蔵金は年に一度冬至の日に、つまり今日にだけ姿を現すんですよ。きつと」

新八の言葉を最後に、一旦場が静まる。そして一斉に湧き上がった。

やってやろーぜテメーらアアア！ 埋蔵金は私のモノアル！ 菊殿の為に！ ジツちゃんの名にかけテリーマン！

という具合に、まあそれぞれ言っていることはバラバラなのだが、確かにこの時誰もが埋蔵金伝説に確信を持った。四人の心が初めて一つになった瞬間である。

「ところで『大きな杉』とやらはどこにあるのだ？ それが分からぬことには始まらぬぞ」

桂の突然の問いに新八は首を振る。

「さあ、それはまだ……」

「では、この『馬に乗って』というのは？」

「それもまだ……」

その問いにも新八は首を振った。

また場が静まる。静まったり湧き上がったりとせわしない一同である。

結局暗号は解けていないではないか！ さっきまで偉そうに探偵気取ってたくせに、いつも肝心なところで使えねーんだよお前は！ だからお前は所詮新八なんだヨ。メガネかけたくらいでコナン君気取りかテメーはコルア！

と、いきなり謂れのない野次が新八に降り注ぐ。

え？ 何？ 僕が悪いの？ と、たじろぐ新八に、尚も罵声が続く。

三人の心が一つになった瞬間だった。

## 第六話 心は一つ（後書き）

SとかMとか……

真面目に解読しようとしている方がいましたらスミマセン。

暗号というよりは言葉遊びみたいなものだと思って読んでいただいた方が無難かもしれませんね。

ともあれ、ようやくストーリーが動き出しました。遅いですが（笑）次話も頑張りますのでよろしくお願いします。

## 第七話 夢物語

とりあえず四人は、これまでに解ったことを紙の上にまとめてみた。

- ・埋蔵金は「大きな杉」から見て、南の位置にある。
- ・埋蔵金が姿を現すのは年に一度、冬至の日だけらしい。

次にこれから解読しなければならないことを書き出した。

- ・「大きな杉」はどこにあるのか。
- ・「馬に乗って」という文は何を示すのか。
- ・恐らくは最終的な埋蔵金の位置を示しているのであろう最後の一文、「対照的な二人が交われば」の意味は何か。

ここまで書き記して新八は筆を置いた。

「まずはやっぱり『大きな杉』の場所ですね。それが分からないことには、僕はスタート地点にすら立てない訳ですから」

ふう、と溜め息を漏らす。

「それでしたら、裏山の頂上にある杉のことではないでしょうか？」

「へえ、そんなところが……って菊さん！」

いつの間に居たのか、なんの気配もなく部屋の隅で茶をすすっている菊に新八は腰を抜かした。

「い、いつからいたんですか！」

「そんなに驚かなくても。お茶でも飲んで落ち着いたらどうです？」

「いや、なんで脅かした張本人がお茶すすってんの？」

相変わらず平然と茶をすする菊。しかも彼女の手にしている湯呑みは、この部屋に備え付けられた、つまり来客用の湯呑みなのであった。

勝手に部屋に入っているところといい、他人の湯呑みで茶をすすっているところといい、ツツコミ処満載の女将ではあるが話を進める為にもあえて流すことにした。

「それで、裏山の頂上の杉とは？」

「実はこの裏山はウチの私有地なのですが、その頂上に『伝説の杉』と呼ばれる、いつから立っていたのかも分からない程の、古くて大きな杉の木があるんです。まあ、つまらない伝説ですが……」

「伝説？ その木の下で結ばれたカップルの愛は永遠につづくってヤツアルか？」

と、神楽が口を挟む。

「なわけねーだろ。どこの恋愛シミュレーションゲームの伝説だよ」

「ご存じでしたか」

菊はコクリとうなずく。

「当たったよ！」

二人の漫才的なやり取りを見ていた菊は、急にクスクスと笑い出した。

そして一しきり笑い終わると、昔を懐かしむような遠い目をして口を開いた。

「私が主人のプロポーズを受けたのも、その杉の下なんです。そんなありもしない伝説を当てにするなんて、馬鹿な人ですよね……」

そこまで言って菊はうつむいてしまった。

自嘲気味になっている菊を見かねた桂が、そつと慰めるように声をかける。

「そんなことは……」

「あるじゃないですかっ！」

桂が思わず尻餅をつくほどの大声だった。

キツと桂を見上げる菊は、目に大粒の涙を浮かべている。

永遠の愛どころか、潰れそうな旅館を菊一人に押し付けて、自分一人はさっさと先に逝ってしまっておいて、何が伝説なのだ。

そう言ってるようだっただ。

「あの人　重義は伝説などに妙なこだわりを持つ人でした。特にあの山の杉の伝説には異常なほどの執着があったんです。理由は私でも知りません。ただ、『例え旅館を捨てるようなことになっても、あの山は、あの杉だけは手放すな』と。これが主人が最期に残した言葉なんです。残された私の身など一つも案じていなかったのです」

溢れ出した涙は一つの筋になって菊の頬をつたう。菊は下唇を噛み絞めた。

さすがにかけられる言葉が見つからなかった。ふいに桂が思い立ったように尋ねる。

「重義。重義殿とは、もしやあの糸居重義のことか？」

菊は黙ってうなずいた。

桂が「あの」と言う糸居重義とは、徳川埋蔵金伝説を世に広めた立役者と言われる人物だった。

まだ埋蔵金伝説がただの噂話に過ぎない夢物語だった頃、ただ一人その夢物語を信じて大掛かりな発掘プロジェクトを立ち上げた男がいた。

それが糸居重義である。

彼は私財のほとんどを投資してまでその夢物語にこだわった。

誰もが彼を馬鹿なロマンチストだと笑った。その話を聞きつけたマスメディアは、彼を番組で面白おかしく取り上げ、たちまち彼は日本中の笑いもののピエロとなった。

しかしそんな中、事件が起きた。

ピエロが本当に埋蔵金を見つけてしまったのである。

発見されたのは小判が数十枚と刀剣が五、六本とそれほど数ではなかったが、調査の結果、それは確かに徳川の物であると判明した。

それは徳川埋蔵金が確かに存在する物的証拠となった。

そうと分かるや否や、世間は急に手のひらを返したようにピエロを祭り上げ、一躍ピエロはヒーローになり上がったのである。

発見されたの埋蔵金はごく一部であつたから、まだ眠っているであろう多くの財宝を求めて、各地でヒーローにつづくロマンチスト達が立ち上がった。

埋蔵金ブームの火付け役となった糸居重義はその後日本各地で搜索をつづけた。

しかしその発掘の際に事故に巻き込まれ大怪我を負い、昨年に亡くなったと聞く。

その糸居重義が菊の夫であつたのだ。

「人生をくだらない伝説なんかに流されて、あげくそれに溺れ死んで……ホント、馬鹿な人です。貴方達までそれに付き合う義理もないでしょう？ もうお帰り下さい。夢物語はもう終演なんです。エンドロールに名を刻むのは主人だけで十分……」

菊は立ち上がり、襖に手をかけた。

「……私はあんな馬鹿にはなりたくない」

そう言って部屋を出ようとする菊に、それまで黙っていた銀時が口を開いた。

「だったら、どうしてそんな馬鹿野郎の遺言を律儀に守る。あの山でも売っ払えばそれなりの金にはなんだろう」

「……買い手がいないだけ。……それだけです」

菊は銀時に目を合わせずに言った。しかし口ではそう言ってはいるが、それだけではないだろう。

明らかに菊は、銀時の言葉に動揺している。

その表情を銀時は見逃さなかった。さらに言葉を続ける。

「その杉のどこまで案内してくんねーか」



「だから嫌なんです！ 夢物語なんてもう終わりだって言っているじゃないですかっ！」

菊は銀時を睨み付けた。涙目になりながら。

銀時は頭をボリボリと掻き、一呼吸の間を置いた。

ただし自分の為の間ではない。興奮した菊を落ち着かせる為に。

「ああ、夢物語は確かに終わりだよ」

ゆつたりと言葉を続ける。

そして一言付け加えた。

「第一部はな」と。

菊は首を横に振った。しかし、先ほどよりは落ち着いているようだった。

二人のやり取りを見ていた桂も間に入った。

「うむ、物語は常にハッピーエンドでなければなるまい。第二部の制作を始めましょう、菊殿」

「……でも」

菊はなかなか同意を示さない。

「では菊殿、先ほどから流している涙は誰の為の涙なのだ？」

「それは……」

「自分の為に流す涙というのは、そんなに美しいものではあるまい」

桂は皆までは言わなかった。

それでも菊には確かに伝わった。

いくら「馬鹿」と罵っても、重義を心の底から恨むことはできなかった。

やり場のない怒りの当たり先を、重義から伝説にすり替えた。

不幸になったから悲しいのではない。

重義の夢が潰えたから悲しいのだ。

一人になったから泣いたのではない。

重義が死んだから泣いたのだ。

誰の為でもない。

ただ一人、夫の為に泣いたのだ。

だから山を売ることもできなかった。

「…………ご案内します」

菊は小さくうなずいた。

キレイな涙を溢しながら。

## 第七話 夢物語（後書き）

第七話更新しました。

最近時間がなくてなかなか執筆できず、だいぶお待たせしました。

ゆったり更新ですが、のんびりお付き合い下さいm——m

## 第八話 行方

「さすがに朝は寒いですね」

新八は白い息を吐きながら身を震わせた。

時刻は午前八時。外は明るいが、冬の低い太陽は未だ山の陰から顔を出せずにいる。

一行は菊の案内のもとスケート場の前に立ち止まった。

「頂上に行く道はどこも雪で塞がってて、通れそうなのはここくらいですね。登山道の入り口はこのスケート場のちょうど向こう側です」

言って菊はスケートリンクの対岸を指した。

目を細めてその先を見ると確かに道らしきものが山へ続いている。

「よし、ツラ！ 私につづくアル」

釣竿を担いで走り出す神楽。

「リーダー、リンクの下にワカサギはいないぞ」

「ていうか目的分かってんのか、テメーは」

というお約束のボケを挟みつつ、目的地に向かって前進する一行。ちなみにこのリンク、池に氷が張った天然のリンクである。そんなただの池に、スケート場と銘打って金を取っているわけだから、つくづくあこぎな商売である。

「では皆さん、靴を脱いでこれに履き替えて下さい」

そう言って菊は全員にスケート靴を配る。

「この辺りから急に滑りますから、普通の靴では危険なので」

言われるままにスケート靴に履き替える四人。

誰より早く滑りだしたのは、ここでもやはり神楽だった。

「おー、これなら楽チンネ」

「待ってよ神楽ちゃん。スケートなんて久しぶりだから、そんなに速く滑れないよ」

次いで新八が駆け出す。

スイスイと先へ進む二人を目で追いながら、未だ動き出そうとしない銀時と桂。

「アレ、どうしたのオマエ？ 先いけよ。俺はゆっくり景色見ながら行くからさア」

「いや、貴様こそ先に行くがよい。というか足がガクガク震えてるぞ、銀時。重心定まってないんじゃないか？」

「いや、俺のコレ、ただの貧乏ゆすりだから。てか、オマエの方こそガクガクいつてね？」

「いや、俺のはコレただのダンスだから」

「どんな？」

意外というべきか、やはりというべきか。スキー同様、スケートもさっぱりな二人。

遙か向こうでは新八と神樂が急かすように手を振っている。

勢いで駆け出してみたが、二人同時にズシヤアアアと転ぶ。

「チキシヨオオオ！　なんだっつーんだこの靴はよオオオ！　なんでわざわざこんな不安定な設計になってんの？　小松未歩ライバル視してんの？　氷の上に立ったうえにさらに危なげなことでもしたいの？」

「まったくなんという靴だ！　大体こういうのは時代とともに進化するものだろう！　髭剃りだって四枚刃とか五枚刃とか出ているというのに、なんでコイツだけいつまでたってもピンポイントトリマー？」

スケート靴に向かって悪態をつきながらも懸命に進む二人の横を、どこから持ってきたのか、犬ゾリにに乗った菊が通り過ぎる。

「坂田さん、桂さん。早くしないと置いていきますよー」

「便利ですね、ソレ！」

二人のツツコミが重なった。

その後十分ほどかかって、ようやく二人は向こう岸に着いた。二人の到着までずいぶん待っていたらしく、菊は水筒のお茶をすすりながら出迎えた。

「遅かったですね。滑れないならわざわざリンクの上じゃなくても、

岸沿いに歩いてくれば良かったのに」

「先に言おう！　そういうことは先に言おう！」

肩で息をしながらツツコむ二人。

そこからの道のりは割りと楽なものだった。

といっても、もちろん雪道なので何も無い地面を歩くようにはいかない。

足場はズボズボとぬかるむし、深い場所では腰まで雪に埋もれるようなところさえあった。

しかし氷の上のように、滑って進めないというようなことがない分、いくらかはマシだった。

そうこうして、一行がようやく頂上に着いたときには時刻は十一時を過ぎていた。

「はぁ……」

誰からの口からともなく溜め息が漏れた。

誰もが見とれてしまっていた。

山頂は一面ぼっかりと開けていて、その真ん中に天まで届きそうな大きな杉の木がそびえ立っていた。

その木を中心に半径数十メートルの開けた空間は、他の木々が寄り付くことすら許されないとでもいうような、威厳　というよりは神々しさにも似た雰囲気がつくり出されていた。

「さて、ここまではご案内できますが」

杉に見とれていた四人は菊の言葉にハッと我に返る。

「その埋蔵金はどちらに？」

「僕たちの推理が正しければ、ここから南になります。とりあえず南に進みましょう」

言つて、新八はクイツと眼鏡を押し上げる。

「ただ、この先の暗号はまだ解読されてません。ですからここからは何か怪しいものがないか、注意深く辺りを観察しながら進みましょう」

「怪しいものって？」

神楽が尋ねる。

「うーん、具体的には分からないけど、なんか埋蔵金が隠されてそんな雰囲気」

「壺の中とかタンスの中とか？」

「うん。せいぜい薬草しか見つからないから、ソレ」

神楽のポケを適当に流して、新八は話を元に戻す。

「とにかく、怪しいものです。怪しいもの！ 見つけたら全員に報告。いいですか！」

とは言ったものの、怪しいものなどそうそう見つからない。もつとも、そんなに簡単に見つかるほど怪しければ、埋蔵金とはいえないのだろうが。



しばらくして、ついに疲れが出たのか、銀時が声を上げた。

「あー、しんどー。おーい新八、休憩にしようぜー」

「まだ三十分も経ってませんよ。もう少し頑張りましょうよ」

「大体オメーよ、南ったってどんだけ南かもわかんねーんだぜ？  
数十メートル先なのか、数キロ先なのかもわかんねーのにそんなに  
飛ばしてどうすんだよ」

言うなり銀時は新八の返答も待たずに腰を下ろし、そばにあった  
地藏に背をもたれさせた。

確かに銀時の言うとおり、このまま闇雲に南へ進んだところで埋  
蔵金は見つからないだろう。そこで、もう一度暗号の解読を試みる  
ためにも、一行はその場で休憩をとることにした。

「ずっと考えていたのだが……」

桂が口を開く。

「暗号の『柚子湯』が冬至を表わしているという解釈。冬至の日に  
しか埋蔵金が現れない理由はなんなんだ？」

「……冬至でなければならぬ『何か』が埋蔵金を見つける鍵にな  
っているってことですかね」

答えて、新八は口元で手を組んだ。

桂はさらにつづける。

「そもそも、埋蔵金が姿を現すのは今日のいつなのだ。まさか一日

中というわけではあるまい」

「時間……ですか。でもそんなの暗号には あっ！」

とたん新八は大声を上げた。

ほぼ同時に桂も気づいたらしく、二人ともおもむろに立ち上がった。

「そうか、十二時か！」

「そうですよ！ 『馬に乗って』 って文は『午』、つまり午の刻を指していたんですよ、きつと！」

午の刻というのは二十四時間を十二分割し、それぞれに干支を割り振った昔の時間の表し方である。つまりその「午」にあたるのが、真昼の十二時というわけだ。

とにかく、ここにきてまた一つ暗号が解けたのだ。

確実に答えに近づいていることが分かり、一同のテンションがぐんと上がっていく。

「オイオイ、マジでコレ埋蔵金見つかんじゃねーの？」

と、銀時。

「いったいどれくらいの額なんでしょうね？ ひよっとしたら旅館建て直してもおつりくるんじゃないですか？」

すでに見つけたつもりの新八。

「酢昆布何個買えるアルか？」

早くも、酢昆布換算を始める神楽。

「リーダー、酢昆布工場ごとだって買えるぞ。いや、んまい棒工場の方が……」

そしてこちらは、んまい棒換算。

「すごいじゃないですか皆さん！ 埋蔵金はすぐそこですよ！ 頑張って三十分以内に見つけだしましょう！」

菊のその一声に、全員、溢れ出す感情を乗せた拳を「おおーっ！」と天高く突き上げた。  
そして固まる。

……アレ？ 今なんだった？ 三十分？

拳を突き上げたポーズのまま、四人が菊を振り返る。

「ですから、今十一時半なんで、あと三十分で見つけるんです。さあ頑張りましょう！」

「三十分んんんんん？」

とりあえず四人は考えた。

この突き出した拳の行方をどうしよう、と。

## 第八話 行方（後書き）

遅くなりました。……スミマセン。

この季節に冬の話を書くのも不思議な気分です（笑）  
恐らくは読者のみなさんもきつと……。

書き始めた頃は雪が降ってたんですが。  
こうして考えると、改めて自分の筆の遅さに驚きです。

次の季節に移る前には完成させるつもりですが、どうなることやら  
……。

では、まだ続きますので、応援お願いしますm（——）m

## 第九話 足跡

残された時間は三十分。

それまでにどこにあるかも分からない埋蔵金を探しださなければ  
ならない。

突然の時間制限に焦る一同。

銀時が叫ぶ。

「テメーらアアア！ 手当たり次第に探せ！ 草の根分けても見つけろ！」

「銀ちゃん！ 草の根分けたけど見つかりません！」

「バカ、本当に分けなくていいんだよ！ 神楽。とりあえずオマエはあの茂みの中探して来い！」

「えー、アレ全部根っこ分けるアルか？」

「だからそれはもういいつつてんだろ！ 時間ねーんだから。次ボケてもツツコまねーからな、俺」

無駄なやりとりに貴重な時間を消費しながらも全員が搜索にかかった。

雪を掻き、岩をどけ、手がかじかんでマメだらけになりながらも探した。

しかし一向に見つかる気配はない。  
その間にも刻一刻とタイムリミットは近づいて来る。  
そして残り五分を切った時だった。

「もう十分です」

それは菊の声だった。

菊は傍らにあった石の上に腰を下ろし、小さく笑った。

「ここまでしていただいただけで十分です。ですが、これ以上探してもたぶん結果は出ません。時間も時間ですし……」

「でも……」

新八は言葉を詰ませた。

菊の言う通り、残り五分で埋蔵金を探し出すことは絶望的だ。しかしここまで来て、あと一歩というところまで来て、諦めるという決断をしなくなかった。

きっと誰もが新八と同じ気持ちだったのだろう。

諦めたくない気持ちはあれど、諦めるしかない現実。

そして、最期まであがくこともできないまま、時計の針は十二時を回った。

「さあ、帰りましょう」

菊は腰を上げ、もと来た道へ歩き出した。

と、その時である。

「……何かしら」

菊は歩き出そうとした姿勢のまま固まっていた。それぞれが菊の

目線の先を覗く。

そこには、菊が座っていた石の影。  
ただ一つ不審な点はその影の中に直径十センチ程の丸い光が映っていた。

「……なんでしょう？」

よく見ると、それは石ではなく、地蔵だった。先ほどの休憩に銀時が背もたれにしていたものである。

影は地蔵の後ろに向かって伸びていた。  
しかしどこにも光が漏れそうな穴などはない。ただの地蔵である。  
しかし影は地蔵のシルエットをそのまま映してはいなかった。  
胸の辺りにぽっかり穴が開いたように光が漏れて映っている。

不審に思い、さらによく見てみると、この光はどうやら地蔵の首の後ろ辺りから漏れているらしい。

「銀さん、もしかしてコレ！」

「知るか！ とにかく掘れ！」

言うなりシャベルを取り出す銀時。全員がそれにつづく。

最期の望みに全てを掛け、その光の当たっている辺りの地面を掘りはじめた。

しばらく雪を掘り進めると土が見えてきた。さらにそこからメートル程掘り進めた辺りで、シャベルの先にコッソとした感触が伝わった。

恐る恐る手応えのあった場所の土を払い除けると、陶器製の蓋のようなものが現れた。

慎重にそれを掘り起こす。

出てきたのは人の頭程の大きさの甕であつた。

取り出した甕を囲み一同息を飲む。

これが徳川の財宝なのだろうか。甕は予想以上に小さい。

「あ、開けてみましょう」

できるだけ平静を装つて言つたつもりだったが新八の声は裏返っている。

「じゃあ、開けますよ？」

言つて、菊は甕の蓋に手をかけた。

ゴトツと重たそうな音を立てて甕の蓋が外される。

そつと中を覗き込む。

「……なんですかコレ」

新八の口からため息のような声が漏れる。

中にあつたのは、誰の予想も期待も裏切るものだった。

大判小判でもない。金銀をふんだんに使つた芸術品でもない。

中にあつたのは何かが書かれた紙切れがただ一枚。

「読めますか？ 桂さん」

桂は紙切れをまじまじと眺めた。

「いや、ほとんど虫に食われている。読めるのはここくらいだ」



桂は最後の一文を指した。

「『徳川の財宝、此处に眠る』」

「それって……」

「うむ。恐らくはこの書が徳川埋蔵金の在りかを示しているということだろう」

「じゃあ僕らが今まで解いてきた暗号って……」

「埋蔵金の在りかを示した書の在りかを示したものだ、ということだ」

「そんな……」

新八は身体中の力が抜けたようにその場にへたり込んでしまった。その横で銀時が思いついたように口を開く。

「これって本物なのか？」

「ああ、捺印もある。俺は職業柄こういうものには詳しい。間違いなく徳川の物だ」

「だったらこの書自体に価値はねーのか？」

桂は目を伏せて首を横に振った。

「家康公が書かせたものに間違いはないが、本人が書いたものではない。これは家康公の字体とは違う。ましてやこの虫食いだ。たい

した価値はない」

辺りが静まった。

さんざん苦勞して見つけたものは、ただの紙切れだった。

結局、埋蔵金探しは振りだしに戻ってしまった。しかも今度は手がかりは無いに等しい。暗号の解読どころか文字すら読めないのだから。

「ヅラ。これ何アルか？」

ふいに神樂が切り出した。

神樂の手には甕の蓋が握られている。その裏側に絵のようなものが刻まれていた。

「これは……埋蔵金の地図か？　しかし一体何処の……」

「これ……この山の地図です」

横から覗いていた菊が答えた。

「何だと？　ということはこの山に埋まっている可能性はかなり高いな。しかしこの地図、埋めた場所を示す印が見当たらない。恐らくこの書の文と照らし合わせて場所を特定するものなのだろうが……」

「でも、それじゃあ……」

「ああ……この書が読めないことには探しようが無い」

暗号が解読できたと思えば突然時間制限がつけられて、ようやく

埋蔵金を掘り当てたと思えば中身はただの紙切れ。

思えば、これまで何度もぬか喜びをさせられて来た。

それでも、その後にはどうにか道を切り開いてここまで来たのだ。しかし今度ばかりは誰にも、どうすることもできなかった。

「帰りましょうか……みなさん」

菊が小さく言った。

「そんな顔しないで下さい。振りだしに戻っただけじゃないですか。埋蔵金を見つけることが目的だったわけじゃないんですから。他に旅館を持ち直すアイデアを考えればいいんですよ」

そう言って笑う菊の言葉の裏にあるものに、誰もが気付いていた。そんなアイデアがあつたらとづくに菊は実行していたはずだ。きつと菊は八方手を尽くしていたに違いがないのだ。それでもどうにもならなかったのだ。

だから埋蔵金探しなど、馬鹿な賭けにまで乗ったのだ。

言ってみればこれが最期のチャンスだった。

そしてそれは菊も分かっている。その最期のチャンスに失敗した今、菊は旅館を畳む決心をしている。

それでも菊は笑う。

「菊殿」

桂は一步菊に詰め寄った。

「振りだしに戻るということはゲームオーバーではない。もう一度賽を振るということだ。もし菊殿が振るのを躊躇ったときは、俺が代わりに振ろう。だから賽を投げ捨てるようなことはしてくれないな

よ」

菊は何も言わなかった。ただ甕を抱えたままうつ向いている。

「これ以上ここにいてもしょうがねーな。帰んぞ、オメーら」

突然、拍子抜けしたように銀時が声をあげた。

まるで興味を無くしたように、すでに一人歩き出している。

「待って下さいよ、銀さん！」

新八は銀時の前に走り寄った。

「まだやれることがきつとありますよ！　だって、甕の蓋の裏にあった地図はこの山なんですよ？　この山のどこには埋蔵金があるんですよ。可能性はゼロじゃないじゃないですか！」

「『どこか』ってどこだよ？　ヒントも無しに見つかるわけねーだろ」

撫然とした態度で銀時は言い放つ。

「それは……」

「それとも山全部掘り起こせってか？　無理なんだよ」

新八も、自分がどれほど無謀なことを言っているか分かっている。あきらめなければならぬとも思っている。

けれど、無理だと分かったとたん急に冷めてしまった銀時が、どうにも気に入らなかったのだ。

そんなに簡単に割り切ってしまうのは、きっと間違っている。  
そうは思いながらも、ずんずんと先に進む銀時に、新八も他の仲間もただついて行くのだった。

山頂に着いた。

あの杉の木のあるところである。

自然に一行の足がとまる。

杉を見上げながら桂は口を開いた。

「何度見ても見事だな」

菊も同じ様に見上げていた。ただ視線はどこか遠くを見ているようだった。

それは夫の重義が遺言に、

「決して手放すな」と言っていた杉。

杉の木に、亡き夫の影を重ねていたのだろうか。

「夫は知っていたのでしょうか？ この山に埋蔵金が埋まっていることを。だから『手放すな』と……」

「そりゃ違うな。アンタの旦那が守りたかったのはそんなモンじゃねーよ」

そう言つて銀時は杉に歩み寄り、

「ホレ」と木の幹をポンと叩いた。

「……あ」

菊は目を丸くした。

幹にはいくつもの傷が付いていた。

それは菊と重義、二人の思い出だった。

子どもの頃に二人で背くらべをした傷。  
相合い傘と、その下に並ぶ二人の名前。

「夢を掴むまで」と刻まれた、埋蔵金発掘への二人の誓い。

杉の木に刻まれた幼い頃からの傷は、重なり、繋がり、二人の軌跡になっていた。

重義が残したかったもの。

それは菊と歩んできた足跡。ただそれだけだった。

菊は幹に寄りかかる様にして、涙を流した。

「……まあ、旅館の方もなんとかなるだろ」

ふいに、後ろで銀時がボソリと呟いたのが聞こえ、新八はそちらにチラと目をやった。

銀時は桂と何かを確かめ合うように、顔を見合わせているようだった。

## 第九話 足跡（後書き）

ようやく更新出来ました。

皆様、大変ご迷惑おかけしました。申し訳ありません。

私事ですが、就職やそれに伴う引越などの環境の変化などで自分のことだけで手一杯になってしまい、しばらくこのサイトにも来ていませんでした。

最近になって少しずつ生活にも慣れてようやく投稿できました。

評価のコメントの返信も遅くなってしまい申し訳ありません。

## 最終話 陽射し

菊の一件から一週間が過ぎ、万事屋トリオはいつものようにコタツを囲んでテレビを見ていた。ミカンを頬張りながら。

「こんな事ってあるんですね」

ミカンの白い筋を取りながら新八がぼやく。

テレビ画面に映し出されていたのは菊の旅館だった。

「お客さん満員アル」

テレビでは、『夫が生み出した埋蔵金ブームを妻が蘇らせた』という見出しで特番が組まれていた。おかげで全国の注目の的になった菊の旅館は大繁盛の様子。

神楽はミカンをまるまる頬張り二、三回咀嚼してゴクリと飲み込む。

「銀さん。最初からこうなるって分かってたんじゃないですか？」

旅館を持ち直すことが出来た背景には、銀時と桂の働きがあった。それは、埋蔵金をあてに旅館を立て直すのではなく、それをエサに全国の馬鹿なロマンチストを客に呼び込むという策だったのだ。そしてこれは思いの外上手くいった。

二人は菊に、山で見つけた鵺と例の虫食いだらけの書をマスコミに公表させた。

いち早く噂をかぎつけたのは、どこぞの大学教授。彼はこれらの品が間違いなく徳川の物だと発表した。

とたん、世間の目が変わった。



旅館には連日の様にテレビや雑誌の取材が押し寄せ、また全国から埋蔵金を掘当ててやるうという輩まで駆けつけ、観光客とは全く毛色の違う連中で、数ヶ月先まで旅館の予約が一杯の大繁盛だという。

ちなみに山は菊の私有物なので発掘には菊の許可がいる。そこで菊は旅館に宿泊してもらう事を条件に発掘の許可をした。これは、埋蔵金目当ての客を隣の旅館に流さないようにする為でもある。

もちろん、これも銀時と桂の入れ知恵。

まあ、こうして旅館は安泰。めでたしめでたしというわけだが、新八にはまだ疑問が残っていた。

「結局、あの暗号、なんで冬至の日なのかわかりませんでしたね」

「ああ、多分ありや地蔵の鼻だ」

ミカンの皮を剥きながら銀時が答える。

「妙にあの地蔵、鼻が高かったんだよ。恐らくあの鼻の下は真南からは光が当たらないように陰になってんだ、冬至の日以外は。ホラ、冬の太陽って低いだろ？ だから冬至に真南の角度から光が当たった時だけ後ろの首筋から光が漏れる仕掛けになってたんだろよ。で、暗号の最後の『対照的な二人が交われば』ってのは、その漏れた光と地蔵の影の重なったところを掘れってことだったんだろ。つつつても、太陽の光じゃそんな正確じゃねーから、実際は冬至を前後に二、三日はあの光は漏れてるんだろーけどな」

新八はポンと手を打った。

「そっか！ 冬至は南中高度が一番低くなるから」

横で神楽が疑問符を投げ掛ける。

「なんという二ート？」

「うっん、『南中高度』。てか、今はさすがにわざと間違えてるよね？」

穏やかにツッコむ新八。

「それにしても、銀さんも桂さんもよくこんな手段思いつきましたね。埋蔵金が見つからないってなった時は僕、もう無理だって思いましたよ」

「フン。しっかしまさかツラと考えが被るとはな……。起死回生の妙案だと思っただのによー」

不服そうに鼻をほじりながら銀時がぼやく。

それは新八にも不思議だった。あの度が過ぎた生真面目の桂と、今も目の前で鼻をほじっているようなズボラな銀時。全く性格も考え方も違う二人なのに、見ているものは同じだった。

新八はふとあの暗号の一文を思い出した。

『こんなにも引かれ合うのは私達が対照的だから。似たもの同士ならきつとケンカになってた。』

これはあの暗号を解く鍵が『磁石』であることを示した文だった。その文に新八は、銀時と桂を重ねていた。

普段は全く相入れず反発し合う二人なのに、根っこの部分で二人は妙に似ている。攘夷戦争の昔から変わらぬ関係。友情なんて言葉

で表すにはあまりに安っぽすぎる。

そんな磁石のような二人を新八は少し羨ましく思った。

こんな二人にいつの間にか惹かれていた自分はさしずめ『砂鉄』  
といったところだろうか、と笑ってみる。

テレビでは相変わらず、菊の旅館の宣伝がされていた。

『へえ。それでは亡くなられたご主人の夢を継がれたわけですね。  
ところで、この山には埋蔵金以外の伝説があるとうかがいましたが、  
どのようなものなのでしょう？』

リポーターの花野アナがマイクを菊に向ける。

菊は山の頂上を指して語り出した。

カメラが菊の指す方へ寄って行き、あの大きな杉の木が画面に映し出された。

『お聞きになりましたか、みなさん？ 埋蔵金ブームで盛り上がる  
今、なんともう一つのブームがこの山から起こりそうです！ 是非、  
週末にはカップルで遊びに来たいですね。では最後に、女将さんに、  
伝説の杉にまつわるご主人との思い出を聞かせていただきましょう』

赤く染まった菊の顔が、スタッフロールの流れる画面いっぱい  
映し出された。

ゆっくりと口を開く。

『私達の始まりは、大きな杉の木の下でした』

プツリとテレビが切れる。

『いくらなんでも売れ過ぎだろ、コレ。ったく、こんなことならも

つと報酬もらつときや良かつたぜ」

リモコンを片手に銀時はため息を吐く。けれど新八にはその横顔が、どこか嬉しそうに見えた。

冬の低く柔らかい陽射しが、万事屋の部屋いっぱい差し込んでいた。

『磁石の指す方へ 完』

## 最終話 陽射し（後書き）

長らくお待たせいたしました。  
ようやく完結でございます。

みなさんのご声援のおかげで、なんとか完成できました。  
本当にありがとうございます。

次回はさっちゃん登場の予定です。

感想やご指摘などいただけるとありがたいです。

それでは、これからよろしくお願いします。

## 第一話 はい！ どーもー！

『 昨日のアレ見た？ マジウケるんだけど』  
『 見た見た！ チョー笑えるよね』

くだらない。

『 今度近くでライブやるってよ。アレの他にも何組か芸人来るって！』  
『 マジで？ 見たーい！ マジ行こうよ！』

くだらない。

目眩しそうなほどの人で溢れる江戸の往来は今日も賑やかだ。  
車の排気音や、街角のスピーカーから流れる流行りの曲。何から何までがやかましい。

この町から、音がなくなる日は、おそらく一生待っても来ないだろう。

なぜなら、この街でもっともやかましい音は、人々の話し声だからである。

一つ的话题を飽きることなく、平気で小一時間しゃべりつつける。騒ぎつつける。笑いつづける。

そんな彼らの間で、最近持ちきりになっているのはお笑い芸人の話題だ。

彼らだけではない。お笑い芸人は今、日本全国でもてはやされている。その人気ぶりは凄まじく、全国あちこちのイベントに呼ばれ、またテレビでは彼らを見ない日はない。

おかげで今や、流行り好きの江戸の町はお笑いブーム一色だった。誰も彼もがその口真似をしたり、ただの会話にボケやツツコミを

はさんだり、不自然なイントネーションの関西弁をひけらかしたりしている。

そんなあちこちで笑い声の絶えない江戸の往来を、異様な雰囲気をつらした一人の男が歩いていった。

全ての雑音から逃れるように、頭に付けた大きなヘッドホンをさらに両手で押さえている。そうして俯きがちに歩いては一人ブツブツと呟いていた。

くだらない。

穏やかな日曜の昼下がり。

万事屋は今日も暇だった。

ここしばらく仕事の依頼がない。当然、金もない。貧乏暇なしという言葉があるが、この店は違う。暇だから貧乏なのである。

だからといって仕事を探すこともなく、万事屋トリオは揃ってぐうたら過ごしていた。

「オイ、コレ何のマネだ？」

銀時の低い声。

なにやら不機嫌そうに、ジトツと神楽を睨んでいる。

「神楽、テメーだろコレ。俺のプリンが台無しじゃねーか、コルア」ズイと差し出したその手には、皿に乗ったプリン　と、その上に乗った妙に見覚えのある黒焦げの物体。

「姉御の作った卵焼きアル。銀ちゃん、プリン・ア・ラ・モードとか上に色々乗ったの好きだから」

肘枕でテレビを見ながら、目線移すことなく神楽は答えた。

「だからって卵焼きはねーだろ。ていうか卵焼きですらねーよコレ。よしんばコレが卵焼きだったとしてプリン何モード？　殺戮モード

？」

「ハハ、困ったものですな」

「いや、困ったのはオマエだよ。何で第三者的な感じなんだよ」

悪びれた様子もなく神楽は酢昆布をかじる。

「まあまあ」

と、そこに割って入ったのは、さっきまでソファでお茶をすすってた新八。

「上に乗っかってるだけですから、こうやって上のところだけ取り除けば……」

言って、卵焼きを、それが付着しているカラメル部分ごとスプーンですくい取った。一番甘いカラメル部分を除いてしまうのは少しもつたない気もしたが、こうでもしないと食べられそうにない。スプーンをどけると下から艶やかな黄色が顔を出す。はずだった。

現れたのは黒いヘドロのようなプリン。

「侵食されてるウウウ！ 何でエエエ？」

「知るかよ、オメーの姉ちゃんのことだろうが！ 聞きてーのはこっちだよ。どうやってたら黄色いプリンが黒くなるんだよ？ バナナじゃねーんだよ！ プリンなんだよ！」

「ハハ、まったく困ったものですな」

「だから誰なんだよソレ！ イラッとするんだけど！ 何で今さらキャラ変えようとしてんだよ？」

「プリンだって黒くなるアル。キャラくらい変わるネ」

プリン もとい、『プリンだった物』と過去形にした方が正しいのだろうか。ソレを前に騒ぐ三人。

だが、その騒ぎも長くは続かなかった。正直、この程度の事件なんていつものことだし、それに加え金欠による空腹感からか、どうも声に力が入らない。

思えばここ数日、白飯の他はおかずらしいおかずが食卓の上に並んでいない。それほどまでに万事屋の家計は緊迫していた。



「虚しいねえ」

そうぼやいたのは銀時だった。

「なんか金になる話はないもんかねえ。オレだって、たかがプリンのことぐらいで騒ぎたくねーんだよ、ホントはよー」

「そんな都合のいい話、そうそうないですよ」

新八はそっけなく答え、テレビのチャンネルを変えた。

『夫婦(?) 漫オグランプリ開催! 全国のお笑い芸人よ集まれ! 参加資格は男女のコンビであれば本当に夫婦でなくてもOK! プロ、アマは問いません。優勝賞金はなんと100万円! 開催日時 は 』

偶然としか言いようがない。

突如流れたCMに三人の目は釘付けになった。

「テメー等……異論はねーよな?」

銀時の少し上擦った声。

100万円という額を前に、異を唱える者などいるはずもなかった。

二人は無言でうなづく。

「100万取るぞオオオオ!」

「オオオオオオッ!」

穏やかな日曜の昼下がり。

万事屋は今日も騒がしい。

第一話 はい！ どーもー！（後書き）

おひさしぶりです。山南です。

およそ2年ぶりの投稿です。長い間放置しておりました。楽しみにしていた読者さんには大変申し訳なく思っています。

これがおそらく最後の作品になるでしょう。

さっちゃん編です。よろしければお付き合い下さい。

## 第二話 コンビ

「さて、ノリで出場することになったけど、よく考えたら僕等だけじゃ一組しかつくれないですね。あと一人どうしましょう？」

出場資格は男女のコンビであること。

今、ここに女性は神楽しかないなので、二組つくるにはあと一人女性が必要だ。

「まず神楽ちゃんが僕らのどっちと組むかを決めて、残った方に合った人を探すのがいいんじゃないですかね？」

「だな。こういうのは相性つてのも人選の重要なポイントだからな」

「二人して私の取り合いアルか？ 私も罪な女アル」

「どっちかっていうと銀さんボケだから、僕が神楽ちゃんと組みましようか？ 神楽ちゃん間違いないくボケだし」

「つつてもよー、俺らの周りにボケと無縁の女なんていなくね？」

だれと組んでも必然的に俺がツツコミに回らなきゃならねーよ」

「二人ともホントは私と組みたいくせにい。照れちゃって。カワイイところもあるアル」

「姉上なんかどうですかね？ ああいう仕事だから、お客さんの相手とかで意外とツツコミできるかもしれないよ？」

「バカ、ツツコミと暴力は別物だろが。ドツキ漫才にもならねーよ。ただの公開リンチだよ」

「オイ、無視すんなヨ」

なかなか話がまとまらない。どうにも彼らのまわりにはまともな女性がいらないらしい。

もっとも彼らがまともでないのだから当然といえば当然だろう。

類は友を呼ぶというヤツだ。

それとはまったく別の理由だろうが、もう一人招かれざる友がやって来た。

というよりすでに来ていた。

「……で、オマエはいつまでそうしてる気だ？」

不意に銀時は、例のプリンを天井に向かって投げる。

高く投げ上げられたプリンは天井にとベトリと張り付き、皿だけ先に落ちた。

カランと皿が床に転がったかと思うと、さらにその上にドサリと降ってきた大きな影。

「さっちゃんさん！」

新八は思わずその影に叫んだ。

「あだだだ、鼻に入った。痛いんだけど！ 臭いんだけど！」

鼻を押さえてのたうち回るそれは猿飛あやめ 通称さっちゃん。  
今日も健気に天井裏からストーキング。

「どうだ特製プリンの味は？ そいつは軍ひとつくらい簡単に潰せる代モンだ」

「人の姉上を兵器みたいに言わないで下さいよ。なんだよ軍つて？ 最終兵器姉上？」

「で、上で話聞いてたんだろ？」

ズイと詰め寄り銀時は、あやめの頭をわしづかみにし、

「俺と組め」

短くそれだけ言った。

「何よいきなり！」

涙目になりながらあやめは訴える。

「初登場で鼻にプリンいれられて、拳句『俺と組め』ですって？ ふざけないでよ！」

おもむろに立ち上がるとあやめは服を脱ぎ捨てボンテージ姿に。

そして鞭を取り出し、一声。

「アアアアッ！」

「やる気満々ですよこの人。ピン芸人ですけど、ソレ」

「しかも微妙に古いアル」

何はともあれ、ようやくコンビが二組できあがった。

銀時とあやめ、新八と神楽。ここからはそれぞれの組に分かれて、

ネタ作りに入った。

### 第三話 ツッコミ

「うーん……」

ところ変わってここは新八の実家 恒道館道場。帳面を前に新八は頭を抱えていた。

今まで自分の周りにはボケで溢れていたし、そんな中での自分の立場はツツコミであるとも自覚している。だから「お笑い」というものの距離は一般人よりは近いと思っていた。

けれど、それは日常のやり取りの中での話で、他人に見せるためにそれを作品という形にしたことはなかった。

いざネタを作ってみようと思い、帳面を開き書き出してみたものの「はい、どうもー」と一行書いたところで筆が止まってしまっている。

「新八！ いい案が出たアル！」

これまでほとんどネタ作りに参加していなかった神楽が突然声を上げた。

「『チャイニーズ娘。』ってどうアルか？」

「はい？」

意味が分からず、新八は間抜けな返事しかできなかった。

「コンビ名アル」

どうにも彼女の思考はズレている。

だが性分からか、げんなりしながらも新八はツツコんだ。

「それ神楽ちゃんの要素しか入ってないじゃないか」

「『。』がメガネ（新八）アル」

「うん、メガネと書いて新八と読むのやめて？ カタカナに漢字でルビ振る人初めてみたよ。てかメガネだしたら丸は二つでしょ。数が合わない」

言い終わらないうちに神楽の右拳が新八の左顔面を抉っていた。吹き飛ぶメガネ。割れるメガネ。倒れるメガネ（新八）。

「だからメガネと書いて新八と読むなアアア！　じゃなくてどう  
いうことだアアア？」

「これで『。』一つで足りるアル」

「そっちを合わせるオオオオ！」

左のレンズが吹き飛んだメガネを神樂の眼前に突きつけて怒号す  
る。

「うるさいアル。そんなに言うなら新八がコンビ名考えろヨ」

「いやだからさ……」

新八はそこで一呼吸置き、話を戻した。

「今はコンビ名よりネタを考えようよ」

「そんなことで悩んでたアルか？　そんなのもう出来てるアル」

神樂の予想外の返答。

「マジで！　いつの間に？」

「ふふん、こういうのはボケの方が得意だったりするものネ。伊達  
に普段からボケてるわけじゃないアル」

「へー、そういうもんなのかな。……アレ？　じゃあいつものボケ  
は計算ってことか？　わざと人をイラつかせてたってことか、コノ  
ヤロー」

新八のツツコミはさておき、神樂の言う通り、プロの芸人でもボ  
ケの方がネタを考えている場合が多い。

それは、ボケという人種は普段からボケることに貪欲であるが故、  
お笑いのアンテナとでもいうようなものを常に張り巡らしている人  
が多いからかもしれない。

神樂もまたそういうタイプの人間であるなら、彼女のネタにも期  
待が持てる。

「まあ聞くヨロシ。テーマはコンビニアル」

フンと鼻を鳴らし、さも自信ありげに語り始めた。

「私が店員で、新八がお客さんネ。新八がレジで肉まん注文する  
ところから始まるアル。まず新八が『肉まん下さい』って言って、私  
が『いくつアルか？』って聞いて、その後新八が……ん！　やっぱ

メンドイから地の文でやらせてもらうアル」

「小説舐めんのも大概にしるよコラ」

ツツコミ『肉まん下さい』

ボケ『いくつアルか？』

お客さん『2つ下さい』

店員『2カートンアルね？』

新八『なんでだろう』

神楽『一緒にボトルキャップもいかがアルか？』

オマエ『なんでだろう』

観客『（失笑）』

私『お会計300ユーロアル』

メガネの少年『なんでだろう』

歌舞伎町の女王『じゃあ500ユーロでいいアル』

「なんでだよオオオ！」

「そうそう、その感じアル」

「違いーよ！ そうじゃなくて……ああ、もう！ どこからツツコめばいいんだコレ！ さばき切れねーよ！」

それでも一応、髪の毛をぐしゃぐしゃに掻きながらツツコミ処を整理する。

「まず、何で僕のツツコミ『なんでだろう』しかないんだよ。どんだけボキヤブラリーないんだよ、僕。それからチヨイチヨイ台詞の前の役名変えんな。あと、何で観客のリアクションまで入ってるんだ。てか、せめて爆笑にしるよ！」

そこまでツツコンでみたものの、ツツコミにはいささか長すぎる。新八は思った。

普段なら特に気にも留めなかっただろうが、ネタ作りという状況が変に意識させる。

もっと短く、もっと的確に、もっとボケを膨らませて……。



「オイ、何ボーっとしてるアル」

不機嫌そうな声に振り返ると、神楽がこちらを睨んでいた。

「神楽ちゃん、もうちょっとなんか分かりやすいネタにしようよ。でなきや、せめてツツコミの台詞変えてよ」

「古臭いツツコミしかできないくせに私のネタにケチつけんじゃねーヨ。昭和の匂いがすんだよ、オマエのツツコミ。何丁目の夕日だコルア」

「んだとゴルアアア！ ノスタルジーなめんじゃねーぞオオオ！」

完全に論点のズレた二人の喧嘩はこの後数時間に及び、結局肝心のネタは完成することなく一日を終えた。

## 第四話 ボケ

「……銀時です。……綿菓子を作っていたら天パに絡まったとです。……銀時です。……天パのことで悩んでたら『悩むと禿げる』と言われました。……悩みが二つになりました。……銀時です。……オレのサドルが　　って古イんだよオオ！」

テーブルに投げつけられた台本がビタンと音を立てる。

「あら、ダメだったかしら？　最新のネタからヒントを得ただけど」

「どこが最新？　中途半端に古いネタを出すな。今どこで何してんだよアイツ？　つーか、そもそもピン芸人だし！」

新八たちと別れた後、銀時とあやめもまた万事屋に残りネタ作りに励んでいた。

しかし、あやめの作るネタはパクリばかりでてんで話にならない。しかもどういうわけか、ネタの大半はピン芸人の自虐ネタである。何か自分と重なるモノでも感じたのだろうか。

ちなみにドツキ漫才も提唱してきたが、銀時がツッコむ度に恍惚とした表情を浮かべるので即座に却下された。

「やっぱネタはオレが作るわ。あとオマエ、ボケ降板な。ツッコミやってくれ」

「私がツッコミ？　何をどうツッコめばいいのか分からないわよ。

そもそもナニをツッコむのは銀さんの役目でしょう！」

「オマエの何処にツッコめばいいのかわかんねーよ！」

「それとも銀さん、そういうプレイが好きなの？　意外とマニアックなのね。まあ私ならそんなところも含めて全て受け止めてあげられるけど」

「そんなところはいいいから日本語を受け止めて！」

「ニホンゴ？　そんなプレイあったかしら？」

「日本語が通じないイイイ？」

新八達と同様、こちらのコンビもまたネタづくりが進まないようだった。

どういうわけか、あやめにボケを担当させると必ずネタがエロ方面へシフトする。彼女をツツコミに回した理由がここにある。

ちなみに、あやめがボケのネタはこんな感じである。

「はいどーもー、銀時でーす」

「あやめでーす」

「いきなりなんですけどね、あやめさん。僕、最近子どもの頃の遊びが懐かしいなーって思うことあるんですよ」

「あー、ありますねー。なんでこんなのに夢中になっちゃたんだろう、みたいな」

「今日ね、久しぶりにちよつとやってみたいなーって思うんですけど、10回クイズって覚えてます？」

「ああ、あの卑猥な単語を10回連続で言わせる」

「そんな背徳的な遊びじゃねーよ」

「あ、間違えた。辛辣な言葉で10回罵られる」

「さっきとどう違うんだよ！」

「えつと……ごめんなさい。どんなゲームだったかしら？」

「いや、だから、例えば『ピザ』って10回言って」

「言われた分だけ服を脱ぐ？」

「新し過ぎんだろ！ ゲームとして成立しねーよ！ そもそもクイズだっつってんだろうが！」

「ちよつと私には難しいわね。もっと簡単なクイズにしてもらえるかしら？」

「問題文すら読み上げてねーんだけど？ まあいいや。じゃあクイズっつーかなぞなぞだけど。『上は洪水、下は大火事。なーんだ？』」

「

「……そういうプレイ？」

「全然違うわアアア！」

「じゃあ、次は私からなぞなぞです」

「答え聞かねーの？」

「いっぱい最初の『い』を『お』に変えたものなーんだ？」

「それはただのセクハラだアアア！」

と、まあこんな感じである。

彼女の手には掛かれば、オーソドックスな10回クイズネタも下ネタに昇華されるのだ。

実際はこのあと、もうしばらくこんな掛け合いが続くのだが、自主規制的な意味合いでカットさせていただく。

さて、ツツコミ役に徹すること、いくらか行動に制限をかけられるだろうという銀時の計らいは間違っていないのだろうが、それでも不安は残る。元々不安の塊である彼女から、いくらかの不安要素を取り除いたところで不安が残るのは当然と言えよう。

不安・不安Ⅱやつぱり不安なのである。

ツツコミにコンバートされたあやめといえば、部屋の隅でツツコミの素振りをしている。革のムチで。

『何でやねん！』とか『いいかげんにしろ！』とか言いながら。

どちらもコイツのことである。

ともあれ、なにもしなければ始まらない。幸い、やる気だけはあ  
るらしいから、今はそれに賭けるしかないだろう。

再度練習に取り掛かることにした。もちろんムチは取り上げて。

「あやめさん。子どもの頃ってどんな遊びにハマりました？」

「主にエロいことですね！」

ダメだった。

1ターンも持たなかった。

結局この日はここで解散となり、後日ネタを持ち寄って練習という  
ことになった。

あやめが去り、しんと静まり返った万事屋。  
精魂尽き果てた銀時の寝息だけが響く。

## 第五話 ノリ

そんなこんなでろくにネタもできないまま大会当日がやってきた。会場に一步足を踏み入れたそのままの形で四人の足が固まる。

眼前に広がる人の群れ。会場は超満員であつた。用意されていた椅子の数が足りず、立ち見客までいる。

「……まさかコレ全部出場者つてことはねーよな？」

引きつった笑顔で新八を見やる銀時。

「ま、まさか。ほとんど観客でしょ。……でも」

でもこれほど大規模な大会だとは思ひもしなかった。それに参加者だらうが観客だらうが、これだけの群衆の前で恥をかくことに変わりはない。

何しろネタが出来ていないのだから。

あわよくば「なんかグダグダだけど面白くね？」みたいな文化祭の学生漫才的なノリで切り抜けよう！、という作戦すらも、今となつてはサツカリンより甘い考えだったと反省せざるを得なかった。

「帰りましょう！ やっぱ帰りましょう！ 僕ら絶対場違いですつて！」

「ば、バカヤロウ！ ここまで来て引き下されるか！ 毒を食らわば皿までつて言うだろうが！」

「皿どころかテーブルや食器洗浄機まで食らう羽目になりそうですよ、コレ！」

「だらしないアル。私について来な」

そう言つて言葉だけは勇猛果敢に、同手同足で歩み出す神楽。やはり緊張は隠せないらしい。というか一番緊張しているのは神楽だった。

銀時は、ここ一番でのプレッシャーに弱い意外な一面が彼女にあつたことを失念していた。

以前、定春を連れてテレビに出た時の彼女の狼狽振りを考えれば、

既に人選の時点で優勝など絶望的であつたのだ。

とはいえ、もう覚悟を決めるしかない。

四人は他の出場者の待つ控え室に向かった。

控え室もやはり、人で溢れかえっていた。

中は体育館とまではいかないが、幼稚園のお遊戯室くらいの広さはある。テーブルはない。壁に立てかけられたたくさんのパイプ椅子は、ご自由にお使い下さい、と言うことだろう。それ以外は何もない。

今日という日のおかげで、この本来殺風景なはずの部屋は、おそらく世界一珍妙な空間になっていたことだろう。

それにしてもすごい人数だ。ざっと見て軽く200は超えている。さらに驚くのは彼らの容貌である。まるでハロウィンか仮装パーティーかのような衣装から、これから面接に向かう就活生のようなスーツ姿まで様々だ。

その、どう見ても統一観も共通性もない格好の連中が、「人を笑わせる」という一つの意思で繋がっている。

「それではこれより、受付を開始します。参加者はコンビの方と一緒にこちらにご整列下さい」

「受付」と書かれたプラカードに向かってワラワラと人の群れが動き出した。

「さあ、私たちも行きましょう！ 銀さん！」

「ちょ、ま、待て！ まだ心の準備が！」

銀時の手を引いてぐいぐい歩きだすあやめ。

渋る銀時だったが人波におされ、結局列に並ぶ羽目になった。

「まったく情けない大人アル。いい加減腹くくれヨ」

列の後ろから神楽がジト目で睨んでいる。

「いや、準備運動は大事なんだって！ 準備運動しないとケガするって先生が言ってたんだって！」

「ハイハイ。でその心の準備運動は済んだアルか？ 次の次の次が

銀ちゃんの番アルよ」

「嘘！ もう？ 俺まだ心のラジオ体操第一しか終わってねーよ！」  
「そんだけ踊れば十分でしょ」

「いや、全然足んねーって！ その後、心のラジオ体操第二踊って  
から『壊れかけの心のレディオ体操』を第一から第三まで」

その時、列の前の方がざわついた。

「いやいや、失格って……。それはないでしょう？ ちゃんと条件  
は満たしてるんだし。本物の夫婦じゃなくても男女のコンビならい  
いって言ってたじゃないすか」

「いや確かにそうは申しましたが……」

見ると、スーツ姿の男と受付の係員が言い争っているようだった。  
異様な雰囲気の中だった。黒いスーツに黒いサングラス。首に下  
げた大きなヘッドホンと、なぜか左肩にセキセイインコを乗せてい  
る。

しかしその何より奇妙なのは、その男が一人連れであつたことだ。  
その相手であるはずの女性が見当たらないのである。

それにしてもこの男達は一体何をもめているのだろうか。

また男の声が大きくなった。

「だーかーらー。この子は女の子なんですって！ ホラ、よく見て  
くださいよー！」

「いや、私オウムの雌雄の見分け方なんて知らないですから」

「オウムじゃないです！ インコです！」

「失礼しました。……いえインコだとしてもですね、インコをパー  
トナーと認める訳には……」

「だって人間の女性じゃなきゃダメなんてどこにも書いてなかった  
じゃないですか！」

大体話の流れが分かった。

つまりこの男は、雌のインコをパートナーとして認めることを、  
あらゆる屁理屈を捏ねて正当化させる気にいるらしい。

男は尚も喚いている。

それにしても妙に鼻につく声だ。作り声の様な成人男性にしては変に高い声。

また、妙なのは、その喚き様が怒りによるものというよりむしろ、ふざけているように見える点である。

なんというか、トーク番組に出てくる雑壇芸人のノリに近いものを感じる。

わざとらしく、大袈裟な身振り手振りで自己主張をしているような感じなのだ。

「これは何の騒ぎだ？」

奥から低い声が聞こえてきた。その声の主はゆったりと大股に騒いでいる二人に元に歩み寄る。

「こ、これは会長！ 申し訳ありません！ いえ、こちらの参加者の方がインコをパートナーとして認めると……」

係員は慌てて頭を下げると、おどおどしながら状況を説明した。

会長と呼ばれた男はよほど偉い人物なのだろうことが、係員の様子から窺えた。

「どの道こんなヤツでは予選も通るまい。好きにさせろ」

そう言つて、ヘッドホンの男をチラリと一瞥しただけで、後は何も言わず立ち去ってしまった。

「あーざーっす！」

ヘッドホンの男はその後姿に大袈裟なお辞儀と謝礼の言葉をかけた。が、やはりそれはふざけているようにしか見えなかった。

彼はくると係員に向き直り、番号札を受け取ると、何事もなかったかのように受付を後にした。

列の横を、進行方向と逆向きに歩いていく。

「ちっ……会長ともあるうお方がツツコミもなしかよ」

通り過ぎ様に彼がぼそりと舌打ち混じりに呟いた言葉に、新八は我が耳を疑った。

まさかこの男はあれだけの騒ぎを、ただツツコミ欲しさのためだけに起こしたのだとも言つのか。



振り向きざまに見たその男の背中は一きまでとはまるで別人の  
ように思え、一種の恐ろしさにも似た奇妙な感覚を覚えた。

気のせいだろう、と自分に言い聞かせ、新八はそれ以上は考えな  
いようにした。

## 第六話 ネタ

まだ開会宣言もされていないと言うのに、会場は物凄い熱気だった。

観客席の前に大きなバックパネル付のステージが一つ。その中央にスタンドマイクが一本。

一組がネタを披露するには広すぎるくらいの舞台だ。

舞台から見て右手側には審査員の席が五つ設けられている。

突然ステージの照明が落ちた。

会場が一瞬ざわつく。

パツと照明が戻ると同時、盛大な音楽と共に司会者がステージに躍り出た。

客席が一気に沸騰したかのように湧き上がる。

「お待たせしましたー！ これより第一回夫婦漫才グランプリを開催致します！ まずは審査員の五人の先生方にご登場願います。皆さん拍手でお迎え下さいーい！」

盛大な拍手に合わせ、審査員が次々と現われそれぞれの席の前に立った。

司会者の進行の元、審査員の簡単な自己紹介が入り、最後にルール説明が行なわれる。

「これより出場者の皆さんには一次予選、二次予選と戦っていただき、勝ち残った十組に決勝戦でネタを披露してもらいます」

司会者の「予選」という言葉に舞台袖に集まっていた出場者達がざわつく。予選があることなど誰も知らされていなかったからだ。

その中の一人が全員の疑問を代表して質問した。

「ちょっと待ってください！ そんなの初耳ですよ。ネタなんて一つしか用意してきてませんよ！」

その質問に答えようとした司会者を遮って一人の男が立ち上がる。審査員列一番右端の席、先ほどの騒ぎで「会長」と呼ばれていた

男である。

「その質問には私が答えましょう。今大会の主催者、鳥田紳之助です。今大会はただのお祭りではありません。昨今のお笑いブームをさらに盛り上げる人材発掘の場でもあるのです。優勝者には賞金その他、私自ら芸能事務所の紹介をするつもりでいました。正直に言つて今の芸人はレベルが低い。急速に広まり過ぎたお笑いブームが生み出した負の産物だ。だから私は本当に面白い人間をこの場で探したいのです。そのためには本物の芸人に求められる臨機応変さを計る必要がある。だからあえて予選のことは伏せておいたのです。とはいえ、即興でネタを作るのは困難でしょうから、予選では一発芸のようなその場で考えつけるものをやってもらうつもりです。これで納得できたでしょうか？」

鳥田は着席した。

この鳥田紳之助という男は、漫才界で名を馳せいくつもの看板番組を抱える、誰もが知る国民的スターであつた。

しかし普段のテレビから受ける印象とは大分違って見える。

テレビでは陽気で気さくな、一言で言えば誰からも愛されるような人物なのだが、今日の前にする鳥田はひどく高圧的で、どこか不機嫌そうにも見える。

少なくとも自分と同種族であるはずの芸人を「レベルが低い」と切り捨てするような物言いはしない人だ。

人は誰しもいくつかの顔を持っている。

クラスでは大人しい生徒が、家の中では母親に威張り散らしていたり、一見怖そうなヤンキーが土砂降りの雨の中捨て猫にミルクを与えていたり。

したがって芸能人がテレビとは違った顔を持っていたところだけで不思議なことではない。

不思議なことではないが、やはり誰にとつてもショックだった。どこことなく会場全体がひんやりとした空気に包まれた気がした。

「え、えーと、それでは早速第一次予選に入りますよう！」

場の空気を取り繕うように司会者が切り出した。  
「第一次予選は『モノマネ』です！」

## 第七話 モノマネ

「こーんーにーちーはー、ぼーくードローラーえーもーんーでーすー」

かくして予選の火蓋は切って落とされた。

次々とモノマネを披露していく参加者たち。

しかしモノマネというと割と簡単そうなイメージがあるが、実際やってみるとそれがいかに高度な芸かを思い知らされるのであった。意気込んで舞台袖から駆け出していくが、そのほとんどがションボリして帰って来る。

しかもほとんどが素人の集まりである今大会。ネタが被る被る。ちなみに、今のは本日18人目のドラえもんである。

「あー、イライラするわー」

あやめは舞台袖からステージを眺め、親指の爪を噛む。

「どうしたんですか、さっちゃんさん？」

と、新八。

「なんであんなにノロノロ喋るのよ！ あー、イライラする！」

「確かにドラえもんのモノマネって、誰がやってもオリジナルより喋るのかなり遅いですよね」

ドラえもん。

誰もが一度はやったことのあるモノマネ。

なのに誰一人として似てないモノマネ。

そんなものを18人分も見せられれば、あやめが苛立つのも無理の無い話である。

「ところで銀さん」

と、銀時に視線を移す。

「モノマネ大丈夫なんですか？ 全然練習してないみたいですけど。今やってる23人目のビートたけしが終わったらもう銀さんの番ですよ？」

『ダンカンこのやろう！』とか言ってる出場者を指差しながら新八はたずねる。

「あー大丈夫、大丈夫。秘策があつから」  
言つてニヤリと笑う銀時。

前の出場者が終わり、銀時は軽い足取りで中央のマイクへ向かう。その第一声。

「83番、坂田です。えっと、あの、アレ。キョンのモノマネやりまーす！」

「おまつ！ 反則だろそれエエエエ！」  
舞台袖から新八のツツコミ。

で、まあ結果から言つと、ウケた。

それどころか、続くあやめ、神楽、さらには新八までもがこの秘策とやらを使い、各々が高い評価を得た。

反則だなんだと言つたところで、ロクな持ちネタもないわけで、結局簡単にウケが取れる方に流されてしまったわけだ。

とりわけ神楽の評価は高かった。

『ルイズうううう！』

『シヤナああああ！』

『くぎゅうううう！』

と、一部の層から絶大な支持を得ていた。何故そんな層がこの会場にいるのかは甚だ疑問だが。

難無く一次予選を切り抜けた万事屋一行。舞台袖を後に控え室へと向かう。

控え室では次の予選に駒を進めた出場者たちが居並んでいた。ざっと20人といったところだろうか。かなり少ない。

銀時が83番なので、それ以前の出場者は82人。およそ4分の3が落とされたことになる。

「アレ？ もっと合格していたと思ったけど」

顎に手をやり首を傾げる新八。

すぐに、ああそうか、と思い至る。『片方』が落ちたのだ、と。

この審査では、×のプレートを用いて行われた。5人の審査員がどちらかの札を出し、が多ければ合格、×が多ければ失格、という選考方法だった。

そして審査は一人一人行われる。コンビの内、片方が合格でも、もう片方が失格ならコンビとしては失格なのだ。

この様子だと、一次審査でかなりの人数が落とされることになるだろう。かなりシビアな判定だ。

逆に言えばここに残った者たちはそれなりの実力者ということになる。

新八は改めて周りを見渡した。次のステージで戦うことになるライバルたちを。

しかし、ぐるりと回した視線はある一点で留まった。

控え室の左奥、窓際。そこに、居た。

肩にインコを乗せた、あの奇妙な男が。

見間違っはすも無い。首から78番の番号札をぶら下げたセキセイインコ。そんなのをパートナーにしている参加者など一人しかいない。

受付で騒ぎを起こしたあの男だ。

それが、何故ここに？

「アイツがどうかしたアルか？」

神楽が後ろからひよこりと顔を覗かせる。

「私覚えてるヨ。結構ウケてたアル」

「うそ？ どんなネタ？」

新八は自分のネタの練習に精一杯でステージはほとんど見ていなかったから、あの男のやったネタも、合格したことさえも知らなかったのだ。

「んー、なんかアニメのキャラのネタ色々やってたアル。クリリンとか」

「クリリン？」

「『クリリンのことかアアア！』って」

「クリリンが？」

「あとコナンとか」

「コナンも？」

「『クリリンのことかアアア！』って」

「コナンが？ あ、いやいや。そちじゃなくて」

新八が聞いたかったのは男のネタではなく、インコが。どうやって『インコ』が『モノマネ』なんて芸をクリア出来たのか？

受付での騒ぎ、あの時鳥田会長の言った言葉。

どの道こんなヤツでは予選も通るまい。

あれは男ではなく、インコに対して言った言葉だったのだ。

一次予選の審査が『モノマネ』だと知っていたから。インコにできるはずの無い芸だから。落ちると知っていたから。

だから 出場資格を認めた。

なのに ここにいる。

合格者のみが集う、この場に。

「神楽ちゃん。あのインコは何のモノマネをやったの？」

全く想像がつかない。インコにできるモノマネなんて存在するのか？ 喋るだけで精一杯のインコに？

神楽はゆつくりと口を開く。

「オウム」

……シュール。



## 第八話 フリ

ついに二回戦に進出するコンビが決定した。

その数、わずか20組。総参加者数のおよそ5分の1である。

その20組がずらりとステージ上に立ち並ぶ。

あの一次審査を潜り抜けただけあって、いずれも実力者の風格を醸し出していた。

その中でも、やはりこの男は一人目立っていた。

いや、一人と一羽と言うべきか。肩にインコを乗せたヘッドフォンの男。

「銀さん」

新八は銀時の耳元で囁いた。

「あの人、要注意ですよ」

目配せして視線をヘッドフォンの男に向けさせる。

「ああ、あのアニメ声だ。モノマネ芸は確かにヤツの十八番なんだろうが、それだけじゃねえ」

銀時もやはり気付いていた。

参加者のほとんどは、一次予選がモノマネと聞かされ次々に『モノマネ』を披露した。中には客席から「おお！」と感嘆の声が上がるほど完成度の高いモノマネをする者もいた。

銀時達もまたその例に漏れない。

しかし、客席から笑い声を上げさせたのは、この男とインコのみであった。

誰もがモノマネ芸人になった一次予選で、彼らだけが面白い芸人だった。彼らだけが、この大会の本質を見誤っていなかったのだ。確かに鳥田会長は言っていた。「一発芸のようなその場で考えつけるものをやってもらう」と。モノマネなどその場で修得できるような芸ではない。

ならば、この『モノマネ』で参加者が試されていたものは似てい

るか似ていないか、ではなく、貪欲に笑いを取りにいく姿勢だったのだ。

「強敵ですね……あの男」

新八はゴクリと固唾を飲み込む。

「あの『男』……ねえ」

銀時は変にその部分を強調して言い、視線を戻した。

「さあ！ それでは、見事予選を勝ち抜いた20組の皆さんに戦っていただく、次の種目はこちら！」

司会の声に合わせてステージのバックパネルにでかかと、種目名が表示される。

「大喜利です！」

ステージの前列に赤い着物を着た数名のスタッフが座布団を並べていく。

「えー、これも皆さんよくご存知だと思いますが、私の方から簡単にルール説明をさせていただきます」

座布団が敷かれる時間を使って、司会が行われる。

「今回はコンビの合計ポイントで競ってもらいます。面白い回答なら加点、逆につまらなければ減点。回答権は早押しです。さらに今回の特別ルールとして男女で増減するポイントが異なります。男性回答者なら1ポイントの、女性回答者なら倍の2ポイントの増減となります。勝負の鍵を握るのは女性芸人の皆さんです。頑張ってくださいね！」

このルールは万事屋チームには酷すぎた。

不安要素が女性陣に大きく偏っている。

仮にあやめや神楽がポイントを落とした場合、それをフォローするには相方が最低2回答しなければならない。それも20組、総勢40名での早押しだ。その2回の回答権を得ることがそもそも困難であるのだ。

加えて、行動の大半が脊髄反射の二人である。

考えなしの早押しに限っては大得意だ。

確実にマイナスまつしぐらである。

「いいか、お前ら……」

銀時は二人を呼びつける。

「今回はお前らは回答しなくていい。いいか絶対にボタン押すんじゃないぞ」

「分かったわ」

「分かったアル」

二人は快諾した。

が、何故だろう？ いやな予感しかしない。

そうこうしている内に二次予選が始まった。

司会がそのまま出題者を務める。

「それでは、最初のお題は夫婦漫才に因んで、『こんな  
ピコーン。と司会が言い切らない内に高い電子音が鳴り響く。』」

「一体誰だ？ まるで早押しクイズのごとく回答ボタンを叩いた馬鹿は！」と、出場者全員が互いに顔を見合わせる。

しかし、彼らとは全く別のリアクションを取る4人。

当然この4人である。

顔を手で覆い隠しながら俯くようにうなだれる銀時と新八。それとは対照的に真っ直ぐ前を見据えるあやめと神楽。

そのあやめの前で回答ランプは点滅していた。

神楽もランプこそ点滅していないが、確実に回答ボタンを叩いた。彼女の前に散らばる回答ボタンと思しき物の残骸がそれを証明する。

啞然とする一同に見向きもせず、あやめはマイクに口を近づける。

「えー、『こんな司会者は嫌だ』。やたらセクハラしてくる」

言って、司会者を見遣る。どや顔で。

「え？ あ、いや、そもそもお題が違うんですが……」

司会者としてもどう対処してよいか分からないらしい。だがあや

めはまだ続ける。

「アレ？ 違うの？　じゃあ、『こんな司会者はエロい』。やたらセクハラしてくる」

そしてまた司会者を見る。どや顔で。

「同じですよ？　さっきと同じですよ、ソレ！」

さらに続ける。

「『こんな司会者は死ねばいいのに』。やたらセクハラしてくる」  
そしてまたしてもどや顔。

「してねーし！　セクハラ！　つーか、私に何か恨みでもあんのオオ？」

さすがに司会者もブチ切れそうなのを予感して、慌てて銀時が割って入った。

むんず、とあやめの頭を鷲掴み、ぐるりと180度回転させ、額がぶつかるほど引き寄せる。その拍子に眼鏡が落ちた。

「テメー、俺の話聞いてなかったのか！」

「え？　なんのこと？」

「眼鏡と一緒に記憶も落としちゃったのオオ？　絶対押すなっつたる！」

「『絶対押すな』は『押せ』ってことでしょう？　馬鹿にしないで頂戴。ソレくらい私だって知ってるわよ」

「ネタ振りじゃねーよ！　そしてお前がまず知るべきは常識だ！」

銀時とあやめのやり取りと同時に進行で、神楽の方でも問題が起きていた。当然対処に当たるのは新八。

「新八！　おかしいアル、このボタン！　私の方が先に壊したのに回答権がさっちゃんに行ったヨ！　どうなってるアルか、コレ？」

「うん、壊しちゃったからだと思うよ？　そしておかしいのはボタンじゃなくて神楽ちゃんの頭だよ。どうなってるの、ソレ？」

小さくため息を吐いて新八は続ける。

「それから神楽ちゃん。回答するにしたって、せめてお題くらいは

聞かなきゃ」

「すいませーん！ 司会者さーん！ コレ壊れたんで新しいのくださーい！」

「ゴメン神楽ちゃん。僕が間違ってた。君が聞かなきゃいけないのは、お題じゃなくて人の話だ」

どこまでも自由な少女に反省の色は見えない。

「今度はもっとちゃんとした頑丈なヤツにしてください」

そして、どこまでもふてぶてしい。

奥から係員が新しいボタンを持ってやって来た。

神楽の前に散らばったボタンの残骸を片付け、新しいボタンとランプの配線を繋ぐ。

「はい。今度は叩いて壊さないで下さいね。あ、それとボタンの確認して下さい」

「確認？」

「ボタン押して、ちゃんとランプが点くかの確認です」

「わかったアル」

一呼吸置いて右手を振り上げる。

「オルアアアア！」

言って、思い切り振り下ろす。

ドゴンともバゴンともズゴンとも如何とも形容しがたい音と共に、回答ボタンは粉々になった。

「おかわり」

やはり反省の色は無い。

「だから人の話を聞けエエエエ！ 叩くなっつつてんだろ！ テメーの頭叩いてやろうかアアア？」

「叩いて直るのなんて古いテレビくらいアル。私の頭は叩いたくらいじゃ治らないネ！」

「壊れてる自覚はあるのかよ！」

その後、係員が新しい回答ボタンを再度持ってきたが、新八はそ

れを辞した。また粉碎するであろうことは目に見えていたから。

その為神楽はこれ以降、挙手で回答することになった。

加えて、神楽は一騒動起こしたことのペナルティとして、あやめは『お手つき』として、それぞれ2ポイントの減点処置を食らう羽目になった。

万事屋チーム最悪の出だしである。

## 第九話 かぶせ

先ほどの騒動から場が落ち着くのを待って、司会者は仕切り直した。

「えー、それでは改めまして、『こんな夫婦は嫌だ』。お考え下さい！」

まずい。と、新八は思った。

マイナス2ポイントというこの状況。

男性回答者の得点が1ポイントずつというルール。

早押しというシステム。

頼れないパートナー。

つまり新八に課せられた使命は、神楽の暴走を抑止しつつ、誰よりも先に回答ボタンを押し、2回得点することである。

しかもそれが成功したところでポイントは0。振り出しに戻るだけである。

最悪な状況。

この上なくまずい状況。

だが、新八が『まずい』と思ったのはそこではない。

面白ければ得点。そうでなければ『減点』。

では新八の回答が面白くなければ？

神楽の暴走を抑止しつつ、誰よりも先に回答ボタンを押して、ようやく得たチャンスで面白いことが言えなければ？

計算機なんて要らない。暗算で出来る。

- 2 - 1 - 3

するとどうなる？

するところなる。

新八に課せられた使命は、神楽の暴走を抑止しつつ、誰よりも先に回答ボタンを押し、『3回』得点すること。

悪循環。負の連鎖。

こうなったらどうにもならない。どうしようもない。

だから新八の使命にはもう一つ、『一度も外さずに』という一文を書き加えなければならぬ。

そして何より『まずい』のはその状況に身を置かれたというこの状況。

この状況が新八に嵌めた足枷。  
プレッシャー。

ポイントを得るためには慎重に答えを練らなければならない。

ポイントを得るためには早く答えなければならない。

相反する要素が新八の思考を滅茶苦茶にする。新八の脳みそをぐちゃぐちゃにする。

思考の矛盾。理屈の矛盾。

それ故に新八の取った行動。

矛盾の語源となった男が「その矛でその盾を突いたらどうなるか？」という問いに対して取った行動。

何も答えられなかった。

答えないという答え。

何も解決しない解決策。

先の無い先延ばし。

新八の回答ランプに灯は灯らない。

彼の中の炎はすっかり消えていたのだから。



俯いて視線を落とした彼の瞳は、眼鏡のレンズの反射のせいで確認できない。

仮にその瞳を覗けたところで、それはいつも彼が揶揄していた銀時の目と同じ　死んだ魚のような目であったに違いない。

すっ、と新八は手を挙げた。

「参った。降参。お手上げ」

そういう意味だと誰もが察したことだろう。

新八の挙げた手が『片手でなければ』。

レンズの奥で新八の瞳がギリリと光る。

炎が消えた？　違った。

彼の中の火は消えてなどいなかった。  
残っていた。

赤々と熱く燃える心の火種が！

それはメラメラと燃え盛る様な見栄えばかりの炎ではなく、例えるならそれは最高温に達した炭の様な、炎こそ出さないがそれよりずっと熱くジリジリと燃える赤い光。

彼が誰よりも強く放つ光。

それは責任感だった。

今この場において、彼に責任など無い。あるとすればそれは神楽やあやめだ。

それでも彼はそれを自分の物の様に背負い込む。

彼の受身体質と生真面目さがそうさせる。

誰のものでもない責任を、自分の責任として背負う。

それが新八の責任感。

それが彼の心の火。

その火の前にプレッシャーなど、とつくに爆せて、蒸発していた。

「うおおおおおおお！」

新八は咆哮する。

高く振り上げた手をボタン目掛けて振り下ろす！

「僕がこの状況を変えるッ！」

新八の叫びに共鳴するかのように鳴り響く回答ベル。

同時に、彼の心に燃える責任感という名の炎は一気に燃え上がり、回答ランプに灯を灯す。

銀時の前で赤々と輝くそれは、新八の心をそのまま映し出したかの様であつた。

……銀時の前で？

新八は確かにボタンを押していた。

しかし彼のランプは点灯していない。点灯しているのは銀時のランプだ。

銀時の方が新八よりも早くボタンを押したということだろうか？  
しかしそれにしては様子がおかしい。銀時の顔を見遣ると、ダラダラとした油汗を垂れ流しながら白目を剥いている。

何かがおかしい。もう一度状況を整理しよう。

点灯しているランプは新八ではなく銀時の物だ。

各々のボタンにはそれぞれ手が乗っている。ということは銀時のボタンの方が先に押されたということは間違いないらしい。

そこまではいい。

その手　銀時のボタンに掛かっているその手の先を追う。

手首、肘、肩、と順に視線を上げて行く。

辿り着いた先に見たものは、猿飛あやめ。

半身乗り出して、銀時の回答ボタンに手を伸ばすあやめの姿であった。

「何してんのオオオオ？ お前エエエエ！」

ほぼ同時に叫ぶ銀時と新八。

まず先に怒りをぶつけたのは新八だった。

「何してくれてんの？ どうしてくれんの？ 今、完全に僕、活躍する流れだったよね？ 散々地の文で引張ったのに！ 『心の火種』とか特に意味のないカツコイ響きだけの言葉並べてまで盛り上げて、ようやく回って来た僕の見せ場だったのに！ どう責任取ってくれんだお前！」

「『誰のものでもない責任を、自分の責任として背負う。それが新八の責任感』」

「他人のモノローグ盾に言い逃れしようとしてんじゃねーよ！」

「え？ なんだっけ？ 『最高温に達した炭の様な』だっけ？ 『ジリジリと燃える赤い光』だっけ？ ププッ」

「蒸し返すなアアア！ 恥ずかしい地の文の責任まで取れるかアアア！」

まるで悪びれる様子の無いあやめに、今度は銀時が詰問する。

「お前、いい加減にしろよ？ 絶対押すなっつたろ！」

「それはつまり、『絶対押せ』というお笑い界では常識の技法の」

「

「だからネタ振りじゃねーって って、さっきもやっтар！ このやり取り！」

「あら銀さん、知らないの？ これは同じネタを2回繰り返す、これまたお笑い界では常識の『天井』という技法よ。これで簡単に会場を沸き上がらせることができるわ」

「湧き上がるのは俺の怒りなんだけど！」

「さすが銀さん、心得ているじゃない。それは『キレ芸』という、

またまたお笑い界では常識の　」

「うぜえエエエ！　なんでさっきからオメーはお笑い界の通を気取りたがってんだよ！　ちきしょー、やっぱ縛ってでも大人しくさせとくべきだったか……」

「縛ってくれるの！」

「なんで喜んでんだよ！」

「悦よろこんでるのよ！」

「そんな違いなんて分かるかアアアア！　そもそもなんで自分のボタンを　！」

そこで銀時は気づいた。

彼女が　あやめが何故『銀時の』回答ボタンを押したのかという理由に。

あやめは眼鏡を掛けていなかった。

すぐに思い至る。先ほどの騒動　あやめがお手つきをし、銀時の説教を喰らったあの時、眼鏡は落ちた。そしてそのままだった。だから間違えた。自分のボタンだと間違えて、銀時のボタンを　。

「またかアアア！　また眼鏡かアアア！　お前もうレーシック受ける！　もしくは接着剤で眼鏡貼り付ける！」

「あら？　そういえば。何か足りないと思ってたのよね」

「頭だよね！　『何か』に当てはまるのは『頭』だよね！」

頭が足りない。

自制心が足りない。

羞恥心が　、良識が　、e t c。

足りないものが多すぎた。

「で？　なんでお前がソレ掛けてんの？」

銀時の顔が向けられた先　新八の一つ奥の席で、眼鏡を掛けた神楽が素知らぬ顔で前を向いていた。

「いや、眼鏡掛けたら頭よくなるかな、と……」

「その発想がすでに頭悪いヤツの発想なんだけど？」

眼鏡掛けても頭の悪いヤツの実例が目の前にいるのに。

というか、それが頭の悪いヤツの眼鏡だった。

「えー、そろそろよろしいですか？ 坂田さん、お答えください」  
司会者は言う。

押したのが誰であれ、点灯しているのは銀時のランプ。回答権、  
というよりは回答義務は銀時にあった。

とは言え、押したのが銀時でないので当然準備など出来ていない。  
目が泳ぎまくっている。泳いでいるというよりは溺れている感じだ  
けれど。

「えーと」

声が裏返っている。尋常ではない汗が額から流れ出ている。

「『こんな夫婦は嫌だ』。夫婦喧嘩が心理戦だ」

「？」

「？」

「？」

「？」

「？」

もはや誰のものかも分からないクエスチョンマークが5行も並ぶ。  
面白いとか面白くないとか言う以前にわけがわからなかった。

彼が何を言っているのか誰にもわからなかった。

銀時にもわからなかった。

「……えーと」

しかし銀時は言葉を続ける。確実にすべったこの状況から巻き返  
す手立てでもあるのだろうか？

すつと、新八を指差す。

「今のネタはコイツが考えました」

……………。

責任を擦り付けただけだった。

「……今さら責任逃れしてんじゃねーぞ、天パ」  
自然、新八の口も悪くなる。

「『誰のものでもない責任を、自分の責任として背負う。それが新八の責任感』」

「うるせえよ！ 無駄にかぶせんな！」

それでは、と司会者は言う。

「只今の得失点はこうなります！」

バックパネルに表示されている各コンビのポイントがそれぞれぐりりと回転し、新しいポイントが再表示される。

銀時・あやめ。 - 2ポイント。

新八・神楽。 - 3ポイント。

その他。仲良く0ポイント。

……………。

アレ？

「『誰のものでもない責任を、自分の責任として背負う。それが新八の責任感』」

司会者は言った。どや顔で。ひどい悪ノリだった。

「ふざけるなアアアアア！」

新八はあらん限りの声で怒鳴る。もはやツツコミではなく純粹な怒りだ。

あやめがボタンを押し、銀時が回答し、新八が減点される。嫌な連携プレイだった。

しかし連携プレイではあっても、連帯責任ではない。責任を負ったのは新八一人である。形としては、新八と神楽というのが正確なのかもしれないが、この場合は新八一人が責任を負ったということでも正しいだろう。

なぜなら、『誰のものでもない責任を、自分の責任として背負う。それが新八の責任感』 なのだから。

「いや、だから背負えねーよ！ ついに地の文にまで裏切られた！ お前だけは味方だと思っていたのに！」

それにしても、と新八は頭を切り替える。

他の誰も回答しないのはどういう訳だろう、と。

最初の一回目は分かる。あやめがお題を聞く前にボタンを押してしまったのだから。他の誰かが割り込む余地などもとより無かった。しかし二回目はどうだろう？ 新八が己の中で戦い、もがき、悩み、決断し、回答ボタンを押すまで（正確にはあやめが回答ボタンを押すまで、だが）十分に時間はあった。

それでも誰もボタンを押さなかった。

他の出方を窺っていた？ いや、すでにあの時点で銀時たちも、新八たちも - 2ポイントだったのだ。だからこのどちらかのコンビが焦って回答するだろうことは読まれていたのだろう。つまりは自滅するのを待たれていた。それならば分かる。それならば説明はつく。

『あの男』を除く、他の出場者たちに限っては説明がつく。

しかし、『あの男』は銀時たちが、新八たちが自滅するのをただ待つような、そんな保身的な手段を取ったのだろうか？

あのただ一人異質な空気を纏った男。セキセイインコを肩に乗せたヘッドフォンの男。唯一観客を笑わせた男。アニメ声の男。どう見てもそんなタイプではない。自滅を待つようなタイプではない。むしろさらに焦らせ、自滅『させる』ようなタイプと言った方がイメージとしては近い。

ならば そろそろだろう。

そろそろ、仕掛けて来るだろう。

「しかし今ひとつ盛り上がりきりませんねー」

司会者は出場者たちを見渡す。

「そろそろドカンというのが欲しいですね。皆さん張り切ってお答え下さい！」

その言葉にヘッドフォンの男の口角がわずかに上がる。

やはり仕掛けてきた。新八はそれを見逃さない。しかし

「ドカンというのが御所望で？」

そう言った男の顔は、ゾツとするような恐ろしい笑顔だった。

その醜く歪んだ口元から短い言葉が漏れる。

「ドカン」

その言葉に合わせて、文字通り『ドカン』と会場が揺れる。

ただし、笑い声ではなく爆発音で。

仕掛けて来るとは思っていたが、こんな『仕掛け』は新八には予想外だった。誰にとっても予想外だ。予想なんてできるはずも無い。

まさか爆弾を『仕掛け』ているなんて

銀時の回答の比ではない　わけがわからない！

パラパラとガラスの破片が降り注ぐ。

見ればステージの照明が一部吹き飛んでいた。

5行のクエスチョンマークなんてリアクションを取ってる場合ではない。

5行のエクスクラメーションマークなんてリアクションを取ってる暇すらない。

観客は一斉に悲鳴を上げ出口へ駆け出した。正しいリアクションだ。

もともと、正しい行動ではなかったが。

「ドカン」

それを予期していたかのように男は呟いた。

またしても爆音が起こる。今度はまさに今、観客たちが駆け込も



うとした出口だった。

観音開きの大きな扉はひしゃげて、もうびくともしなかった。幾人かが爆発に巻き込まれたようだった。

恐らく他の出入り口も同様の仕掛けが施されているに違いない。もはや逃げ場などない。

全員がステージを見た。

ステージに立つその男を。くつくつと笑うその男を。もはやステージは男の独壇場だった。

男は大げさにお辞儀をする。

「はいどもー！ よろしくお願いしまーす！」

## 第十話 舞台

一組のお笑いコンビがあった。

女性同士のコンビだった。

彼女たちは目立った。目立つことに終始努力した。

しかし、面白くは無かった。

女性芸人というのはお笑い界ではさほど多くはない。

とはいえ、別に珍しい話でもない。割合でこそ圧倒的に男性芸人が多いが、絶対数そのものが多いため女性芸人というだけで目立つことは無い。

この世界で目立つということは、売れるということと同義だ。目立つということは、人目に触れるということだ。だから目立つということが何よりも重要視される。

こういう話をする、「目立つだけの芸人なんてつまらない。本当に面白い芸人こそが評価されるべきだ」という反論が返って来るかも知れない。

それは当然の反論で、返す言葉も無いくらい正論なのだろう。

それほどに今のお笑い界はつまらない芸人で溢れてしまっている。見た目だけの奇抜さを売りにした中身の無い『自称』個性派芸人。従来にはないアプローチを試みようとする奇を衒<sup>てら</sup>っただけの『自称』個性派芸人。

個性を履き違えた『自称』個性派芸人たち。

だがここで言う『目立つ』とはそういう意味ではない。

繰り返すが、目立つということは人目に触れるということ。逆に言えば、目立たないということは人目に触れないということ。

面白いとつまらないとかは、人目に触れて初めて『他人から』与えられる評価なのだ。だから『面白い』ということと『目立つ』とうことは本来比べられることではない。

『目立つ』が『面白い』より価値があるという意味ではないし、もちろん『面白い』が『目立つ』より価値があるという意味でもない。かといって『目立つ』と『面白い』が等価値であるということでもけしてない。

どちらか一方しかなければ、それは無価値なのだ。

そういう観点で言えばテレビに出ている芸人はかろうじて『目立つ』という条件はクリアしていることになる。

ここでももちろん目立つからテレビに出られるという意味ではなく、テレビに出るということがそのまま目立つということである。

理由ではなく結果ということだ。

そして彼らは判断を待っている。面白いのか、つまらないのか。価値があるのか、無いのか。視聴者に判断されるのを待っている。

つまらない芸人が、つまらないのにテレビに出られる、出ている理由はそれだけだ。

『まだ』判断されていないから。

つまらないと判断されれば、無価値と判断されれば、自然と消えていく。何をするまでも無く、当たり前前に淘汰される。

だから、「なんでこんな芸人がテレビに出ているんだ」などという文句は言わなくてもよい。

心配しなくとも彼らはすぐに消えるだろう。心配したところで消えるだろう。

例外なく、消えるだろう……。

だから、彼女たちも消えた。面白くなかったから。つまらなかったから。例に漏れることなく、例外なく、消えた。

あるいは、『消された』。

それはある番組内での出来事。

その番組内で彼女たちは『つまらない』と判断された。視聴者によってではなく、一人の男によって。

そして結局は、視聴者によって。

それはその男の持つ番組の一つだった。彼女たちはそこにゲストとして呼ばれた。

その番組の中で彼は言った。「お前ら、面白くないわ」と。

本来、彼の発言は取るに足らないものだった。誰が彼女たちをどう評価したところで、最終的にそれを判断するのは視聴者だからだ。

『面白い』『つまらない』『価値がある』『価値が無い』。それを決めるのはあくまで視聴者なのだから。

ただし、この場合はその男が問題だった。

彼女たちを『つまらない』と評したのがその男でさえなければ、彼女たちにとって事態はここまで悪くはならなかったであろう。

その男　鳥田紳之助の、国民的スターの持つ発言力はあまりに大き過ぎた。彼の視聴者に対する影響力があまりに強過ぎた。

彼の言葉は視聴者に色眼鏡を掛けさせた。

黒い眼鏡で見れば白いものすら黒く見える様に、『つまらない』眼鏡で見れば面白いものすら『つまらなく』見えた。

彼が『面白い』と言ったものは視聴者にも『面白く』、彼が『つまらない』と言ったものは視聴者にも『つまらなく』思えた。

彼の意味ではない。悪意は無い。

彼の権力によって彼女たちは消されたわけではない。彼の権威によって彼女たちは消された。

消された。

判断された。

『つまらない』と。

一人の男によって。

そして結局は、視聴者によって。

その消されたはずの彼女が　彼女たちのうちの一人が、舞台に立っていた。

もう立つことのなかったはずのその場所に彼女は立っていた。  
彼女は大きな黒いサングラスを外し、その目を鳥田に向ける。

「お久しぶりです。鳥田さん」

セキセイインコを肩に乗せた男は      いや、セキセイインコを肩  
に乗せた『女』は、

「私はアナタを許さない」

そう言った。

## 第十一話 もういいわ

鳥田は女の自白を聞きながら、しばらく思考を巡らせ、やっと思いついたかのように、

「ああ、あの時のお前か。まだ未練がましくこんな所にいたのか？ここはもうお前のいる場所ではないぞ」

そう言った。

どうやら今の今まで本当に忘れていたらしい。無責任な人だ。

しかし、爆弾魔を相手にその飄々とした態度は流石は大物。なかなか感心させられるものだった。

そんな鳥田の態度に女はさらに苛立つ。ぎりつと唇をかみ締め、睨み付けた。

「ふん。今度はインコと組んでリターンマッチか？相変わらず奇抜な発想だな。だがそれだけだ。面白くもなんともない。またすぐに飽きられるだろうさ。大体、インコが覚えられる言葉などたかが知れているだろう。飽きが来るより先に限界が来るんじゃないのか？そんな見通しも出来ないからお前は駄目なんだ。お前はもう、こつちの世界に戻って来るべき人間ではないよ」

「私のインコちゃんを馬鹿にしないでちょうだい。この子は100単語くらい軽く使い分けるわよ」

「100単語……すごい」

新八は思わず驚きの声を漏らしてしまった。

100単語。それはもうほとんどインコのキャパシティの限界の数値ではないだろうか。しかもそれを使い分けることが出来るなどにわかには信じがたい。

「もつとも、内8割は放送禁止用語なんだけどね」

と、女は付け加えた。

……………。

つくづく彼女は芸能界に戻るべき人間ではなかった。

「……………くっ！」

新八は横であやめがわなわなと震えているのに気づいた。まるで親の敵でも見るかのような形相でインコを睨み付けている。

「あ、あのトリいいい……………わ、わたしと。私とキャラが被るじゃないのオオオ……………」

「……………」

この人は一体何と戦っているのだろう。

いつそコイツとインコでコンビ結成しろ。相性は抜群だ。そして追放されてしまえ。二度と戻ってくんな。

色んなツツコミが新八の頭を過ぎるが、何とか口にするのを堪えた。

もうクライマックスなのだ。シリアスな場面のはずなんだ。そろそろシメに入らなければ。ギャグパートを終わりにしなければ。

だから新八はツツコミを自粛する。

とはいえ新八にはまだ懸念事項があった。それを有耶無耶にしたままではどうにもシメられそうにない。

しかし今は女と鳥田のにらみ合いの真っ最中。そこに割って入れるような空気ではない。

どうしたものかと新八が迷っていたら神楽がそれを代弁した。

さすが空気の読めない女！

グッジョブケーワイ  
G J K Y !

「お前、女だったアルか？」

それである。正に新八が訊ねたかったのは。

「あら。気づいてなかったの？ そっちの白髪サンはそうでもなかったみたいけど」

「そうなんですか、銀さん？」

銀時は頭を掻きながら、「ん……………まあ」と短く答える。

「第八話を読み返してもらえば分かるわ」

と女。メタな話をする人だった。

「ちゃんと伏線もあつたのよ。クリリンとコナンのモノマネ。アレ、男役っただけで中の人は女性の声優さんでしょう?」

「……分かりづらい伏線の回収ありがとうございます」

とことんメタな話をする人だった。

「とはいえ男のフリなんてすぐばれそうなものにね。あー、でも九兵衛ちゃんの例もあるから、アリっちゃアリなのかしら?」

「……………」

メタな話しか出来ない人なのかもしれない。

というか、それはポツと出のオリキャラが知ってていいような設定じゃない。

どうやらギャグパートは終われそうにないらしい。

さっきまでのシリアスな雰囲気はどこへ行ったのだろうか。もう帰って来てくれないかもしれない。ルージユの伝言も残さずにあの人ママに会いに行ってしまったのかもしれない。

それから女は思い出したように、インコの頭を撫でながら言った。「ああ、それとあの時はああ言ったけど、この子ホントは雄だからちゃんと男女のコンビってルールは守ってるのよ」

「社会のルールを守れよ、爆弾魔」

とうとうツツコンでしまった。

もういいだろう。もはや土下座したところでシリアスさんは帰って来ちゃくれないだろう。

ツツコミ解禁。

「つーかアンタ、登場時とキャラ変わり過ぎだろ」

「別に? 私は最初からこういう性格よ。まあ、あの頃はほとんどセリフ無かったしね。アナタが私に持っていたキャラ像なんて所詮は見た目の印象だったってだけの話でしょう? 人を見た目で判断してはいけませんって教えられなかった?」

あろうことが爆弾魔に説教されてしまった。

けれどそれには返す言葉も無い。こんなキャラだと思っていたのだから、つたどころか、女性だとすら思っていなかったのだから。



女は続ける。

「でも結局見た目が全てってことになるのかしらね」

「さっきと言ってることが逆ですけど？」

「別に矛盾はしてないわよ。あれはただ通例に従った物言い。私の意見じゃないもの。『人を見た目で判断してはいけない』って言葉があるのは、人間は『人を見た目で判断する生き物』だからよ。アナタだってその一人じゃない」

「僕はそんな人間じゃ」

「男だと思ってたくせに」

「うっ……」

「私がこうして正体を明かさなければ、アナタにとって私はずっと『男』のままだったはずよ。アナタにとってはそれが全て。見た目が全て」

「むう……」

新八はとうとう押し黙ってしまった。どんどん相手のペースに乗せられていく。

なんかやり込められている感じ。まずい流れだ。

例えば、と女は続ける。

「例えば、一人の美少女がいたとする」

「美少女？　なんですか急に」

例えば話よ、と女。

女が何を始めるのかよく分からないが、とりあえず新八は話に付き合うことにする。

「美少女よ、美少女。とにかくすごい美少女なの」

「……すごい美少女って言われても」

「えーと、じゃあ寺門通を超えるくらいに美少女がいたとする」

「お通ちゃんを超える女などいるわけが無いだろうが！」

「……なんでアナタがキレるのよ……」

マジギレだった。

目が血走っている。

爆弾魔がドン引きしていた。

たとえ、例え話のなかであつても寺門通を超える存在を許すことなど新八には出来るはずがなかった。

しかしすぐに今の状況を思い出して怒りをクールダウンさせる。

大きな深呼吸を三回繰り返し、コホンと咳払いを一つ。

「失礼しました。続けてください。それで、そのお通ちゃんの次にかわいい美少女がどうしたんです？」

微妙に設定が変わっていた。

「え……。ああ、うん。……そうね。そのお通ちゃんの次にかわいい美少女がいたとする」

話を合わせてくれた。意外といい人なのかもしれない。

「その娘が校門の前でウロウロしていたとする。アナタならどう思う？」

「どうつて……。まあ、落し物でも探してるのか、とか。誰か好きな男子にラブレターを渡そうとしてるのか、とかですかね」

「ふうん。じゃあ、それが見るからに汚らしいおっさんだったら？」

油っぽい顔に曇らせた眼鏡掛ける太った40代くらいのおっさんがハアハア言いながら校門前をうろついていたら、どう思う？」

「警察に通報します」

「ほらね。見た目で判断するでしょう？」

「あ……」

新八はここに来てようやく女の真意が見えてきた。

「おっさんだつて何か別の理由があるかもしれないじゃない？ それこそアナタの言うように落し物を探しているだけかもしれない。好きな女の子にラブレターを渡しに來ただけかもしれないじゃない？」

「……………」

おっさんがハアハア言いながら女の子にラブレターを持って來たのだとしたら、警察に通報するという対処で間違つてないはずなのだが、今はそんな揚げ足取りをしていい場面ではないだろう。

もつとも、その警察にそれとよく似たゴリラがいたりするわけだから、警察に通報というのもあながち正しい対処とは言えないのかもしれないが。

ともあれ、女の言いたいことは大体分かった。

結局、どう偽善ぶったところで人間は他人を見た目で判断してしまふ生き物らしい。

つまりね、と女は言う。

「要するに見た目が　ううん、第一印象って言ったほうが分かりやすいかな。第一印象が良い人の言動は好意的に解釈されて、第一印象が悪い人の言動は悪意的に解釈される、って話。つまらないと思われてる芸人が何をやってても面白くない、みたいにね」

「ああ、そこに繋がるわけですか」

新八は女の告白を思い出す。

鳥田紳之助によつて植えつけられた「つまらない」という第一印象。

「つまり鳥田さんに対する復讐ってことですか」

「うーん、それだと半分かな。50点。もちろん鳥田さんは許せないし、だからこそ彼が主催するこの大会を狙った訳なんだけど。でもそれだったら彼一人を殺せばいいわけじゃない？　何も爆弾なんか使わなくても闇討ちかなんかすればいいわけでしょう？　少なくとも観客を巻き込む必要は無いじゃない？」

当たり前のように「殺す」という言葉を使う女に新八は軽く引いた。

今まで普通に喋っていたから、ともしれば忘れがちになるけれど、今新八が対峙しているのは爆弾魔なのだ。厄介なキャラクターだ。

「ということは観客にも怨みがあるってことですか？」

「怨みって言うとは少し違うかな。私はね、彼らの第一印象を壊しに来たの」

「アナタをつまらないと言う第一印象を、ですか？」

「ううん。『女性芸人がつまらない』という第一印象を」

「いや、それはさすがに無いでしょう」

そこまでいくともう話が違う。つまらないと言われても仕方の無い芸人は確かにいるけれど、それが『女だからつまらない』ということになれば、そんなのはもはや差別だ。

「でもちよつと考えてみて？ アナタが面白いと思う芸人ってほとんど男の人じゃない？ その中に女芸人って含まれている？」

「いや……。でもそれはあくまで僕の趣向ですし、女性芸人は数が少ないから割合的にそうなるだけかもしれないじゃないですか。少なくとも一般論だとは思いませんよ」

「まあ、確かにね」

新八の反論に意外にも女は相槌を打った。

けれど女は続ける。

「確かにそんなのが一般論だなんて私も思わなかった。思いたくなかった。だからね、賭けをしたの」

「賭け？」

「そう、賭け。『女だからつまらない』ってのが一般論じゃないってことを証明する賭け。賭けに勝ったら 一般論じゃないってことが証明されたら、こんなテロじみた真似はしないつもりだった」  
女は少し悲しそうな顔をした。

「私が今日やったネタ。あれね、昔やってたネタなの。鳥田さんに『つまらない』って言われた時にもやったネタ。それよりも前からやってたネタ」

一度もウケなかったネタ      なの。

ああ、と新八は思った。

女性芸人としてやったネタ。

まったくウケなかったネタ。

まったく同じネタをやってウケてしまった。

男性芸人に扮してやったらウケてしまった。

一般論であることが証明された。

「女はつまらない」ということが証明されてしまった。

賭けに負けてしまった。

かける言葉が見つからない。

全てを否定された彼女にける言葉などない。

彼女を否定した張本人が彼女に同情していいはずがない。

新八もまた、一般論を持つ、一般人の一人なのだから。

「でも、それはもういいわ」

と女は少し明るく言った。

「私も言いたいことは言えたし、他人の考え方まで自由に換えられるとまで傲慢なことは本音じゃ考えてないわよ。私の思ってることの少しでも観客の皆に伝わればそれで十分なのよ。扉を爆破したのだってそのための足止めってだけだし。爆薬も調節したからさすがに死人は出てないと思うけど、怪我人はそろそろ出してあげないかね。語る場を提供してくれてありがとね、ボク」

「あ……いえ」

新八は曖昧な返事をした。

観客の群れは列を成して出口へと消えていく。

とりあえず一件落着きということだろうか。じきに警察も駆けつけて来ることだろう。

ステージにはもう女と鳥田と万事屋一行、その他は数名のスタッフしか残っていない。

どこことなく腑に落ちない幕引きだ。あつけないと言ってもいいかもしれない。案外こんなものなのだろうか。結局のところ犯罪者の心理なんて理解できるものではないのだろうか。

まあ、女も「それはもういい」と言ってるし、こうして観客を解

放しているところから見ても、それは本当に「もういい」のだろう。  
終わりなのだろう。「もういいわ」で終わる漫才のごとく、「も  
ういい」のだ。

……ん？ 『それは』 もういい？ 『それは』？

じゃあ『それ以外』は？ よくない？

何か見落としている気がする。彼女はなんと言った？

「あ」

新八は気づいた。  
思い出した。

『それだと半分かな。50点』

もう半分の彼女の犯行動機。  
彼女が許せないと言ったもの。

「鳥田さん、アナタを殺します」

彼女の右手にはリモコンが持たれていた。  
恐らく 爆弾の。

## 第十一話 もういいわ（後書き）

おそらく次回でラスト！

よろしければ最期までお付き合い下さい。

## 最終話 オチ

「ふん、俺を殺す、か。相変わらず面白くないな」

鳥田はまるで怯えた素振りも見せずのため息混じりに言う。

ふてぶてしいにも程がある。もう大物とか言うレベルではない。

感情が欠落しているのではないだろうか。

しかし分からね、と椅子に踏ん返り返ったまま鳥田は続ける。

「第一印象がどうか言う話なら俺もちゃんと聞いたぞ。ならば俺のことも解放してくれてもいいだろうに。あー、あれか。俺が昔番組内で言ったこととか？ ならばそれについては謝ろう。どうだ？

これで俺のことも許してくれるだろう？ 命だけは見逃してくれるだろう？」

……………。

違った。命乞いだった。

高圧的な命乞いだった。

この男はこの男で結構面白いキャラクターなのかもしれない。

許せないわよ、と女は答える。

「アナタを許せるわけじゃないじゃない。アナタを殺したいと思った本当の理由はそれだけじゃないもの」

「ふん、皆目見当がつかんな。あれ以上お前に怨みを買うようなことをした覚えはないぞ。命だけは勘弁してくれ」

「私にじゃないわ」

「じゃあ誰にだ？ 頼む。俺には家族がいるんだ」

「私の相方によ！」

「お前の相方？ 金か？ 金ならいくらでもあるぞ」

ここに来て初めて出てきた彼女の相方の話題。

どうやらその相方の存在がこの度の事件の真相に深く関わっているらしい。

というか鳥田は語尾で命乞いし過ぎだ。会話がまるで繋がらない。



語尾だけ見たら完全に小物である。大物と小物を併せ持ったキャラクターとか、今さら変なキャラ付けはやめて欲しい。もう最終話なのだ。

「アナタがあの子にしたこと、忘れたとは言わせないわよ」

「スマン、忘れた。……あ、ウソウソ！ 覚えてる！ 覚えてるからリモコン押すのは待て。……ふう、全く。相変わらずつまらんやつだ。ただの冗談じゃないか。それでも俺は大先輩なんだぜ？ お前もいくら芸能界を追われた身だからって、かつての先輩にはそれなりの敬意をだな　わ、悪かった！　今は言い過ぎた。この通りだ許してくれ。だからリモコンを構えるのを止めるんだ！」

なんかもう、いっぱいいっぱいの子キャラクターだった。

正直、国民的スターのこんな姿はこれ以上見ていたくない。

少しして、ああ、そうだそうだ、と鳥田は口を開いた。

「思い出した。確か『不細工がいくら不細工に顔を歪めたところでそれはただの不細工であって不細工以外の何物でもない。面白くもなんともない』とかそんなことを言ったっけ。アイツの顔芸キモかったからなあ」

女性相手にとんでもないことを言う人だった。

というかその文脈だと、さっきの「覚えてる」という言葉が嘘だったと自ら認めていることになるのだが、いいのだろうか。

しかし、女が怒るのも当然と言えよう。いくら芸人であっても、女性に対してその物言いはあんまりだ。

女は怒りに肩を震わせながら言葉を口にした。

「……確かにあの子は不細工だったけどっ！」

……。

そこは相方的にも認めるところらしい。

「……顔芸はキモかったけどっ！」

全面的に同意らしい。

「それでも、とてもいい顔で笑う娘だった！　それを……アナタが！　アナタが……うっ……うっう」

女は涙ながらに訴える。

「アナタのせいであの娘はっ！ アナタの言葉を苦に……………っ！  
もうあの娘の、あの頃の笑顔を見ることは出来ないのよ！」  
どうやらわりと重い話らしい。その言葉を苦に自殺したというところだろうか。

つまりはその復讐。

かつての相方を失ったことに対する復讐ということなのか。

「でも！」

そう叫んだのは新八だった。

「でも殺しちゃ駄目だ！ それだけはやっちゃいけない！」

「ありがと、ボク。私も悪いことだってことくらい知ってるわ。でもね、それでいいの。私が間違ってもいい。正義なんていらぬ偽善ですらなくたっていい。私は自分の悪を受け入れてこの人を殺す」

もう無理だ。女は完全に心を決めてしまっている。

もうこうなると頼れるのはこの男しかない。

坂田銀時。

「銀さん！」

「ったく。……わーったよ」

銀時は懷手をしたまま氣だるそうに二人に近づいていく。面倒くさそうな足取りで、ボリボリと頭を掻きながら。

鳥田と女に挟まれるような位置で、鳥田、銀時、女の順に三者が一直線に並ぶ位置で銀時の足は止まる。

銀時はどちらに向けるでもなく話しかける。

「オイ、オメーら。キャラ濃過ぎんだよ。主人公が最終話まで見せ場無しってどういう見だ、コラ」

久しぶりの登場での主人公の最初のセリフは、ただの文句だった。「十話以降ほとんど蚊帳の外だったじゃねーか。セリフだって『ん

……まあ』しかねーし！ 俺がどんな気持ちでお前の回想聞かされてたと思っただけだ！ どんな気持ちで活躍シーン待ってたと思っただけだ！ いつもの説教モードでシメるにしたってこっちに色々段取りつてモンがあんだよ。今まで蚊帳の外だったヤツがラストだけ持つてつたら『え？ なんであの人シメてんの？』みたいな空気になるだろうが！ 今さら修正できねーよ！ どうしてくれんだコルアアアア！」

ひたすら文句だった。逆ギレといっても差し支えない。

しかし、ここで少し銀時の眼の色が変わる。

だから、と声のトーンを落として続ける。

「だから、今回は説教無しだ。シンプルにコイツで行かせてもらおう」  
スラリと木刀を引き抜く。

「開き直ってるヤツに説教はいらねえ。木刀で十分だ」

銀時の態度に女は身構えた。

スツとりモコンを持つ手を頭上にかざす。それ以上近づくな爆弾を作動させるという牽制なのだろう。

しかし銀時の言葉はまだ続く。

「『正義なんていらねえ？』『悪を受け入れる？』はん！ 大層な心構えじゃねーか」

女のセリフを繰り返して、笑い飛ばした。

けどな、と鋭い眼光を女に向ける。

「テメーのメーワク受け入れてやる義理なんぞ、こっちにやねーんだよ。爆弾魔」

「迷惑は掛けるものよ。受け入れてくれなくてもいいわ」

「開き直りもここまで来るとたいしたもんだ」

「説教無しって言うわりに随分喋るじゃない」

「そういう性分なもんでね」

銀時と女の間合いは互いに五歩。微妙な間合いである。

銀時の脚力であれば一瞬にして一足で詰められる距離ではある。しかし女はリモコンのボタンを押すだけでよい。

女にとってこの間合いは十分過ぎた。

銀時にとっての一瞬は女にとっては永遠に等しい。

女は笑う。

「その木刀でリモコンを払い落とせると思っているの？ アナタがどれだけ速く動けたところで、アナタと私の距離は十歩はある。対して私の指とボタンの間は零距离。五体全ての速さが指先一つの速さに勝てるとも思っているの？」

「さすがに無理だろうな。……けど木刀コイツだけならどうだ？」

銀時は木刀を突きつける。

確かに木刀を『投げつけ』れば、身体全体で詰め寄るよりずっと速い。それこそ一瞬なんて永遠に等しい程に。

けれど女は未だ余裕の笑みを浮かべている。

「同じことよ。アナタがそれを振りかぶると同時に押せばいいだけ。飛ばした木刀のスピードがどんなに速くても、振りかぶる動作はそうじゃないもの」

「試してみるか？」

銀時は薄く笑い、木刀を振りかぶる動作に入った。

が、すぐに止める。

「なーんちゃって」

と、銀時は笑った。

にかーっと、ものすごく腹の立ついやらしい笑顔。

銀時の立ち位置。

鳥田と銀時と女が一直線に並んだこの立ち位置こそが銀時の策だった。

これは女からみれば標的である鳥田と敵である銀時が同時に視野に収まる位置だ。標的と敵を眼前にした女の意識は前方に集中される。

女はけして油断していなかった。いや、油断することが出来なかった。

逃してはならない標的と踏み込ませてはならない敵。油断の許さ

れない二つの存在に油断することが出来なかった。

それ故に生じた油断。

背後への油断。

銀時と女の会話も、木刀を投げつけるというハッタリも全て、その油断を生じさせる為のものだった。

そしてそんな隙だらけの女の後ろを取る事など、気配を覚られることなく背後に忍び寄ることなど、猿飛あやめにとっては元お庭番衆のくノ一の彼女にとっては造作もないことである。

しまった、と女が気付いたときにはもう遅い。

女が全てを理解したのは、あやめにリモコンを奪われ、神楽と新八に力ずくで組み伏せられた後だった。

「ちつ。やっぱ俺の見せ場無しじゃねーか」

小さく笑って銀時は木刀を腰に差し戻した。

今度こそ、紛れもなく、一件落着である。

女はさすがに観念した様子で、されるがままに後ろ手にして拘束された。

拘束に使われた縄はあやめの私物らしいが、深く詮索するべきではないだろう。

「この縄は私が趣味で」

深く詮索するべきではないだろう。

さて、後は警察が到着するのを待つばかりというところで鳥田は今回の原因を作った男は言った。

「おい。アイツ お前の元相方はどうしてる？」

それは女に向けた言葉だったが今一つ要領を得ない。確かその相方は鳥田の言葉を苦に自殺したのではなかっただろうか。

新八はそこに割り込んで疑問を口にする。

「いや、その相方さんって死んだんじゃないんですか？ だからこんな復讐を……」

「違っわ、生きてるわよ。あの娘はこの男の言葉を苦に……」

女は未だ許せずにいる鳥田を睨みながら答える。

「整形したのよ！」

「……………」

「整形してすつごく綺麗になつてた！ 彼氏作つて私に自慢してきた！ 結婚するからコンビ解消するって言われた！」

「……あの頃の笑顔はもう見れないってそういう意味かよ。どんだけ人騒がせなんだよ、アンタ」

とんでもないオチだった。逆恨みにも程がある。

悲劇など無かった。

最初から最後まで喜劇だった。

喜劇だけど笑えない。

相方が元氣そうでなによりだ、と鳥田は笑うが、笑えたものではない。

笑えな過ぎて笑えてくる。

銀さん、と新八は振り返る。

銀時は軽く頷く。

神楽とあやめも同様にコクリと頷く。

「きつちりオチをつけさせてもらうアル」

バキバキと指を鳴らす神楽。

「それを言うなら落とし前だけど      この場合はそれで正解だよ、神楽ちゃん」

眼鏡を押し上げる新八。

「さて、この女どうしてくれようかしら」

あやめの眼鏡がキラリと光る。

「ここはやっぱ漫才の流儀でいかせてもらおうぜ」

銀時は縄で縛られたままの女を無理やり立ち上がらせた。

そのまま四人は女の背後に回る。

「な、何よ！ 何するつもりなのよ、アナタたち！」

「何って、オチがついたんならやるこたア決まってるだろ」

四人の手が高く振り上げられる。

「やめさせてもらっわアアア！」

平手打ちのツツコミが女の後頭部に炸裂し、女は顔面からドゴンと舞台の床に叩きつけられた。

「あ、ありがとう……ございまし……た」

消え入るような声で女は最後の一言を口にする。  
相変わらず、大げさなお辞儀だった。

最後まで芸人だった彼女の最後の舞台は、こうして幕を閉じた。

『ボケとツツコミと男と女 完』

## 最終話 オチ（後書き）

これにて「ボケとツツコミと男と女」および「万事屋銀ちゃん」終了です。

読者の皆様、読了お疲れ様です。

今作では「笑い」がテーマとなっております。コメディとして始めた「万事屋銀ちゃん」の最後を飾るに相応しいテーマではないかと作者は自負しています。

ギャグの数も全作品の中で一番多いのではないかと思います。小説でしか出来ないギャグや、小説でやるべきではないギャグ。様々なギャグを随所に散りばめた作品です。

しかしそれは「笑える作品」であるという意味ではけしてなく、笑えるかどうかは全て読者に委ねられています。

この作品風に言うなら判断待ち、「価値がある」か「無い」かを判断されるのを待っている作品なわけです。読者に楽しんでいただいて、初めて完成する作品なのです。

ですから最後まで読んでもらえたことがとても嬉しいです。笑っていただけたなら尚嬉しいです。

本当に最後までお付き合いいただきありがとうございます。

また僕の作品と出会ったことがあったら、その時もお付き合いいただけると幸いです。

それでは、さようなら。

山南ケー助。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5934a/>

---

万事屋銀ちゃん

2010年11月5日14時00分発行